

川柳塔

平成七年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷八一五号



日川協加盟

No. 815

四月号

全日本川柳長野大会事務局

無題

西尾 栗

花の四月になって、年賀状のことを書く羽目になった。私の旧友にTという男がいる。大変優秀な男で、東大在学中に高文を通り、卒業後、官界に入って、トントン拍子で出世して我等母校の二十一回卒業生の出世頭となっていた。平成五年六月に私が出版した『こらむ散歩』を送った際、彼はすぐ電話で、少年時代を共にした喜びを祝ってくれた。ところが平成六年の正月にも、七年の正月にも賀状がこなかった。おや！それまで年一回の賀状は勿論、その中間にも手紙のやりとりをしていた。これはおかしい。歳が

齢だからあの世へ逝ったのか。それならそれと報せてくるだろうし、地位・肩書のある男だから、新聞の死亡欄に載るだろうと思って、平成七年の一月の終り頃、東京文京区の自宅へ電話してみた。彼は電話口に出なかったが、細君が出た。去年も今年も年賀状が来なかったわけを聞いたが、千枚もの賀状を毎年毎年、処理するのがとてもおつくうで、それに年齢も九十歳近いので、それで止めたのだし、ようと、マコトに無責任な返辞が返ってきた。

「T君は元気にしていますか？」「エエツ、元気にしていますけど、何分九十歳ですのよ」と言葉を濁した。私は元氣だとはかり思っているのよ、「九十歳が何ですか。元首相の福田さんなど九十五歳くらいじゃないですか。そんなに老いこんじやいけませんよ」というと、それ

からが悪かった。

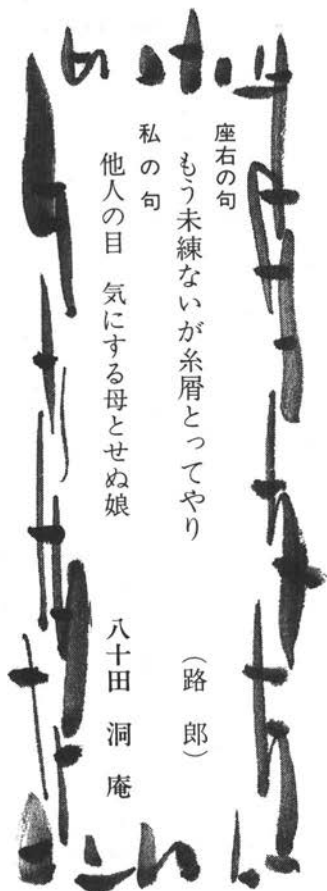
「私の父は九十八歳で亡くなりました。法務大臣をしていたが、父は子分を作らなかつたし、金銭には淡泊であつたため、金力がなかつた。それで首相にならなかつたのです」「私はそんな話を聞きたくないのです。T君の健在を聞いているんです」。

ブツン、電話が切れた。後味の悪い電話であつた。

年一回の賀状が来なかつた友の安否を聞いたのがこんな結果になろうとは、私は思わなかつた。と同時に、残念であつた。虚礼廃止とか何とか言われても、年賀状はやはり、生存確認の意味があるものと深く感じた。

命の恩人へいつしか賀状だけとなり

栗



座右の句

もう未練ないが糸屑とつてやり

(路 郎)

私の句

他人の目 気にする母とせぬ娘

八十田 洞 庵

川 柳 塔 四 月 号 目 次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 無 題

心あたたまる話

川柳塔 (同人吟)

自選集

川柳の群像 荻野義博

■古川柳 柳籠裏二篇研究 (二十五丁)

水煙抄

大空のころ (52)

秀句鑑賞

「同人吟」水煙抄

西 尾 栞 …… (1)

西田柳宏子 …… (2)

橘高薫風選 …… (4)

東 野 大 八 …… (46)

高杉鬼遊選 …… (52)

橘 高 薫 風 …… (41)

黒 川 紫 香 …… (50)

山本希久子 …… (79)

心あたたまる話

西田柳宏子

こんな話、信じてもらえらるだろうか?と思
うほど、心あたたまる人情物語である。

私の家からバス停までの間に貸ガレージを
借りて個人タクシーをしているA氏(お名前
は伏せさせて頂く)がおられる。別に知合い
でもなく、また、特に親しい顔見知りでもな
かった。二年ほど前、私が転倒事故で骨折入
院する少し前だったと思うが、たまたまバス
の時間が悪く車でもと思っている時、丁度、
ガレージから出て来たAタクシーを拾って地
下鉄の駅まで乗った折、気やすく話しかけ、
お互いに感じのいい人だなと受け止めた。

それから間もなく入院し、十月末退院まで
一度も会わなかったが、十一月中旬、出社
時にガレージから出るAタクシーに出会った。
ドアを開けて飛び出してきたA氏は、親切に
私を抱きかかえるようにして車内に入れた。西
田辺まで行くと聞くとそのまま走り出た。
車中で怪我のことなどを心配して尋ねてくれ
るのに、半ば戸惑いながら事故当時の話をす
る。二十分くらいで西田辺へ着くと、再びド
アを開けて丁寧に介添して降ろしてくれる。
メーターも倒しておらず、料金も取らずに客

澎湖抄	小出智子選	(76)
茴香の花	西出楓楽選	(80)
「一番」	千葉風樹選	(82)
一路集「映す」	古野ひで選	(82)
「たつぷり」	山本義子選	(83)
初歩教室「太い」	吉岡美房	(84)
各地柳壇（佳句地十選／住谷石舟）	井上直次	(98)
■句会だより ほたる川柳同好会	大原葉香	(99)
保西岳詩さんを悼む		(100)
三月本社句会		(104)
柳界展望		(105)
四月各地句会案内		(106)
■編集後記		

座右の句

麦を踏むこの子もやがて麦ならん
私の句

（工藤寿久）

明日は風吹くさ水平線を視る

高瀬霜石

を求めて走り去った。料金は千五百円くらいだが、親切とはかり甘えてもおれぬ複雑な気持ちであった。

それから毎朝、家を出て通りへ出ると、ちやんと車が停まっている。車外で窓を拭いていて私を見ると軍隊式にパツと上体をかがめ「お早うございます。忘れ物はありませんか。頭を打たないように」と車に招き入れてドアを閉めて出発する。まるで自家用のお抱え運転手のようである。西田辺へ来るまではニュースの話題や川柳の話など、主として問いかけはA氏、私は専ら説明役で、西田辺へ着くと、また、丁寧に送り出して走り去る後ろ姿を感謝して見送ったものである。

朝の早い私は毎朝六時五十分に家を出る。それに合わせるようにA氏はガレージの中で車で寝ているらしい。時々、奥さんが着替えなどを持って来ているのを見掛けたことがあるが、A氏は夜遅くなると家へ帰るのが億劫になって車で寝ると言っているが……

この自家用お抱え運転手は、十二月二十日ごろまで続いた。乗せてくれたA氏もA氏だが、甘えて乗った私も私だと、変な感心をしている次第である。現在はもう彼も私の歩き方に安心したのか、出迎いはしなくなったが時折り出会うと、最敬礼してくれるのは今も変っていない。本当にこんな温かい人情運転手がいることをお知らせした次第。



橘 高 薫 風 選

鳥取県 江 原 とみお

神戸市 木 村 貴代子

神さまの匙からころげ落ちていた

雪つもる五臓の錆が浮いてくる

正に寒 若狭の鰯に見据えられ

葦原を出たことのない葦雀

ボタン雪から貰う不可思議なる安堵

道楽の果ての渋茶をのんでいる

西宮市 亀 岡 哲 子

詳しくはわからず地割れのぞき込む

橋落ちてアニメのヒーローまだ来ない

陽は昇る橋は架かっている筈だ

罹災再び割れない亡母の碧い壺

亡母よ亡母 私の友が逝きます

震災後二十日ろう梅今盛り

ふとんと子にかぶさりて地に祈る
憤怒する大地 人間けし粒に

断層を知らずに夢のマイホーム

地震には耐えた我が家が焼け落ちる

ない家のローン背負って生きていく

震災後 人はやさしくなったよう

吹田市 栗 谷 春 子

うぐいすが字の通り啼くのどけさよ

横書きの日記に漢字つらねゆく

たのしさは無いものなしというお店

あざらしもやっぱり欠伸していたり

なだめようのない年頃になりし孫

めでたくも八十年のプランクトン

堺市 桑原道夫

エゴイストの君へしきりに雪が舞う
傘上げて見つめるものは美しき
月を見て反省文を書いてます
押入れに首突っ込んで突っ込んで
春立つやチューインガムのやわらかさ
夕暮れの少年に電柱立っている

竹原市 岩本笑子

足摺岬よ大事な人とまた来よう
草の血が青い戦はやめようよ
握手 握手 時が止まったかのように
本当のさよならしたの未練なの
時々ハスカートをはく妻であり
雲白く無償の愛に似て白く

米子市 林荒介

粉雪が洗ってくれる蟻り
逢ったのか帰って来ないブーメラン
血の音を聞き分けている冬の燭
靴底の我慢強さに気付かない
好きだから欠席裁判にかける
敬われている遠ざけられている

藤井寺市 吉岡美房

わらべ唄 雪のいのちを掌に受ける

浅い春どきどきしてるにぎりめし
負け犬のままで帰れぬ縄のれん
鬼の面取って仲好く豆を食べ
自慢した位置で人間錆びて行く
この恋の逃げないように封をする

和歌山市 木本朱夏

まぼろしよガレの欠片を抱きしめて
踏み台にしても良いと言ったひと
ふぐ鍋をつつき合うて事もなし
ポケットに男をひとり飼いごろし
片しぐれ傘も男もかえらない
数の子の歯ざわりほどの未練かな

弘前市 肥後和香子

おろし金でおろして下さい長き夜
手術前 脳は刃物よりも冴え
哀しみの女のように雪積もる
宇宙人混じって眠る六病棟
ありがとう子宮に敬意表します
恋女 思考力ゼロ突っ走れ

竹原市 小島蘭幸

嗚呼神戸ポートタワーに灯がともる
ここという時は男と思わせる
座るには少しかたづけねばならぬ

先生の部屋雑然として温い
弟がマスクをすると僕になる
制服制帽 紅一点の凜々しさよ

黒石市 千葉風樹

私より運勢欄を信じる子

ランドセルまだまだ軽い荷なんだぞ
台本どおり夕日と妻の座に戻る

河馬一頭 屋根を支えている孤独

雪のんの罪無き者を打据える

米を研ぐ 息づく箇所は心得て

富山市 舟渡杏花

万物が真つさらに見ゆ今朝の雪

戻らない男を待っている白髪

老春に唆かされる相聞歌

晩景に一刷けほしい紅の彩

妻の猫ベーターベンに動かない

今欲しいのはピフテキでなしにぎりめし

豊中市 田中正坊

長寿めでたし老醜はうとましき

晩節ということばあり冬銀河

魂を売って総理の座を守る

母方の先祖は隠れキリシタン

アメリカの子からも電話 大地震

震災の余波はわが家に避難民

黒石市 相馬一花

捨てられた男は捨てた振りをする
天下盗る話は妻が聞き流す

八十になって毎朝ひげを剃る

満員のバスで香水果し合い

座禪組むように金魚がおとなしい

呉市 横田英詩

マネキンがウインク春ですよ春ですよ

老いて候 罪百貫が背に重い

ぜんまいも電池も要らぬ生命かな

五体満足 檜山無視のお爺さん

天晴れな敵に唸ってばかりいる

鳥取県 新家完司

炎上の長田区に住むともだちよ

煉瓦ひとつ運ばぬ人の作業服

救援隊の男の汗を写すべし

ささやかでお恥ずかしいが義援金

こころまで瓦礫にされませぬように

鳥取県 土橋はるお

嬉しくて何も見えなくなる瞳

白バイも美人の尻を追いたがる

木の瘤を磨くと仏さまになる

豪雪について恋する猫が来る

男の芯も酒と女に弱いんだ

尼崎市 田中 薫

飯茶碗ぼつんぼつんとあり 家族

恋となるあわれ冬樹のあたたかし

古代の人の褥りとも 夜におびえて

うつむいて水貰う列に風花

警報機ポカんと 踏切を渡る

和歌山市 堀端 三男

被災地に詫びてゆっくり湯につかる

別れ際のジョークが本音だったかも

こころ足りて仁王の顔も柔和なり

亡妻の背を流すつもりで墓洗う

老いと死を大往生で模索する

吹田市 古川 喜美子

好きな時 何時でもおいで下さいね

友情を裏切ってきた夜の鏡

風車 私の過去の見えかくれ

青春の音して林檎 芯になる

叱り過ぎたかと布団を掛けにゆく

米子市 新 正子

サクラ咲く 私の前を行く不幸

志の高さを山と語り合う

海の底まで春の野は続いている

遅咲きを待っててくれたお兄ちゃん

三日月をこっそり魔女になって漕ぐ

豊中市 滝北 博史

もうあかん しばらく気絶した私

私の名 隣家の主婦が呼んでいた

五十年 活断層と知らず住む

ライバルは開口一番 天罰じゃ

命日の気分 阪神大地震

寝屋川市 岸 野あやめ

限界か病院三軒 手術五度(夫の死 五回)

かく早く逝くとも知らず逆ろうて

震災の余波 火葬場が満員で

盛大なお葬式でと褒められる

うしろ姿の 夜毎に遠し

羽曳野市 榎本 吐来

家庭内離婚の記事が胸を刺す

血統書 或る夜の妻と子の会話

子は妻の手先と知ったコップ酒

豆買いに出る靴音が高過ぎる

震災をそつなく糧にする政治

米子市 木村 富美子

亡父の夢見ると響いて来る太鼓

姑からの涙で堪えた日の手帳

綱渡りそんな世渡りして見たい

世をすねて何もいい事なかったな

出逢いみな命の糧にして生きる

米子市 寺 沢 みど里

コロッケの好きな老女になってゆく
女ふたり通じ合うもの探してる
流れ着く先は広野と信じたい
陽に当てる埴輪に今を見せてやる
広口の瓶で重宝されている

鳥取県 大 角 正 道

心臓が動いてじつとしていられない
妻も子もある簡単に妥協せぬ
畳の上で大震災を考える
公約の一番だったのは何だ
なんとなく気になる敵を持っている

鳥取県 大 角 幸 代

運命ではないと掌じつと見る
それぞれの瞳の中の今日と明日
もし雨になったら逢いに行くという
指先のそのまた先にある想い
嘘を書くにはあまりに白い紙である

松江市 舟 木 与根一

瓦礫の山 神も仏も押しつぶし
積雪の量も情けも深くなる
受験生の窓を気遣う寒雀
鈍い振りするのも妻の護身術
春立ちぬ鬼もけろりと舞い戻る

出雲市 竹 治 ちかし

満たされた子の眼に映る弱い鬼
日本を一つにさせた震度七
もう好きと言わずに酒を止めと言う
良い夢を見させてくれた子の巣立ち
友は良しただ一笑に付して済み

鳥根県 松 本 文 子

くよくよするなとわたしにも白い雪
手紙ばかり書いて淋しい性になり
しばらくは孫第一と逃げておく
腐ってしまった球根の哀しみよ
地吹雪の中に亡父と病母の声

宝塚市 中 田 純 次

火と水の二河白道を求めゆく
価値観の根底揺らぐ震度七
絶交の友から見舞電話くる
寒空に水の貴さバケツ手に
大地震 所詮地球は仮住い

豊中市 安 藤 寿美子

主の祈り光明真言みなとなえ
食器棚 水屋 膳棚 どれにする
こわれたものついでにこわれぬものも捨て
詳しくすぎる説明もひとつ分からへん
請求書バス代電話代コーヒー代

吹田市 山本 希久子

高槻市 川島 諷云児

地震予知 小動物と話せたら
風匂うゆつくり春に包まれる
温泉も蟹もと妻に従いぬ
幼稚園にもどれぬ花子太郎なり
仏さまにこまごま話す灯をともし

茨木市 堀 良江

もう少しの辛抱 母のお説教
この人に父の匂が少しある
鳩時計残して子らは皆巣立ち
立ち話やっぱり震度七のこと
茜雲ここで欲しいな寺の鐘

大阪市 西出 楓 楽

価値観もひっくり返す大地震
ノストラダムスの予言がよぎる大地震
お茶漬の味にうるさくなってくる
絵心と詩心に満ち人が好き
片目だるまのせめてほこりを払わんか

大阪市 稲本 凡子

ナア孫よ先に逝くとは許せない
許せないのに喜ぶものを買ってくる
したたかに生きたと見えぬ京女
ライバルの目線わたしでないらしい
歩かないだけで歩けぬことはない

不器用で悪事に遠く遠くいる
彩褪せた自画像抱いて冬を越す
ロボットに人生観を変えられる
忘れたい過去を他人が呼び戻す
酔えば出る歌の一つに君恋し

松原市 小池 しげお

ご住職 死ぬ順番を決めてみる
三ツ指をつかなくなってきた襖
約束を果たして帰る星月夜
追いつめた所に立ててある梯子
その頃に毎年風邪をひいている

海南市 三宅 保州

予定にはない発言で盛り上がる
忙しくないと落ち着かない男
ステージに憧れもしたチンドン屋
長期戦になったら妻にかなわない
漁業補償済んで漁師は忘れられ

和歌山市 牛尾 緑良

花時計 明日の時刻を指したがる
約束が昨日も今日も眠ってる
子の書架はとくにしている親離れ
やがて父の鋳型通りに出来上がる
珈琲はブラック 今日を切り捨てる

西宮市 林 はつ 絵

天災は悟りへ一歩近づける
改めて命いただく猫共に

生かされる訳をわたしに問うわたし
助かって見ると観音割れ給う

銭湯を教えてもらうありがたく

弘前市 高瀬 霜 石

僕はやっぱり神の失敗作だろう
線香の煙に黙々叱られる

沸点の低いこの血は誰の川
妻と積む三百六十五個の石

獅子の子じやないから谷へ落とせない

五所川原市 斉藤 岳

震災も不撓の川柳塔届く

センター試験おにぎりが旨かった
氷点下 牛の乳房温かし

飾り風 武者絵のいのち重たかろ
雪を搔く天が与えた仕事なら

弘前市 浅田 隆 樹

いなりずし老母の安否を妻に聞く
化粧した妻と偶然街であう

カラオケのスナック時代が入り乱れ
母の愚痴お経のようなりズムもち

一坪の風呂に広がるはすの華

町田市 竹内 紫 靖

四歳の記憶カワラが流れ落ち（関東大震災）
美しいあいまいな国はころびる

深夜ラジオ読み上げる名はいつ終わる
パソコン将棋 飛車打ちおろす音がなし

若手棋士に筆と色紙が待ちかまへ

横浜市 菱田 満 秋

うららかな陽ざしへくじを買ってみる
どの駅の時計も一分遅れてる

七難をかくして脚を長く見せ
濡れて行く女に角がはえている

火葬場で煙昇るを見届ける

枚方市 八田 敏

世話すると言った妻の麻痺の手よ

若葉マーク着けたい妻の車椅子
妻背負い生きる二人の影法師

妻病んで料理の本を買ってくる
禍を福とする術探る日々

鳥取市 両川 洋 々

乱世に俺の出番がきつとくる
これも血か酒と女がやめられぬ

悪夢なら覚めよ神戸が炎えている
臨終の老母へ叫んだあたりがとう

笑う日が来るまで男死ぬでない

鳥取市 春木圭一郎

天災を人災などと不遜なり

被災地に弟がいる気の重さ

非常時も静かな男はれられる

義援金 明日はわが身とボンと出す

趣味ならば楽しい会へ変えてみる

出雲市 富田蘭水

七人の敵も出そうな夜桜見

仲直り腹いっぱい空気すう

いつか鳴る心のベルを磨いてる

窓いっぱい冬陽が嬉し病みあがり

酒絶ってまだまだ青い炎追う

河内長野市 植村喜代

ロボットが働く辛いことばかり

幸せを見て来て話眠らせず

どれだけの涙流せば春になる

この空は神戸につづく痛ましき

大地震 何もないよに陽が昇り

竹原市 時広一路

まだやれる表札の墨入れ直す

虹を描く絵の具切らさぬようにしよ

海間近のんびりとなる水の旅

水道の味が落ちてる春ですね

短針となら競争も出来そう

広島県 藤解静風

夜は明けるものとはいえど嗚呼神戸

発熱の枕は海を漂り

竜宮へ行こうと怖い亀がいう

女は強し妻の返事が乱れない

幸せがすぎて体形くずれかけ

大阪市 小糸昭子

草書体のたりと女艶めいて

内訳帳 数字の列が肅々と

一杯のワインで効かぬ長い夜

落ち椿 私もぼとり落ちそうな

神経が安定せずに焦げ臭い

西宮市 門谷たず子

非常時と思えば素顔気にならぬ

親切を貰う電話が鳴りつづく

子の重さぬくさを思う老いの坂

生と死のはざまに続く波の音

あれからはおまけがついた夫の酒

岡山県 荻野 鮫虎狼

死んでから叙勲に叶う有難さ

震災に一番強い縄電車

厄払う男 狐と対話する

不景気な会社だ安全旗が垂れる

明日がある明後日がある今日は寝る

米子市 青戸田鶴

平手うち神はどこまでためされる

神戸の空へみんな祈りの目をそそぐ

美しい神戸の街よ立ち上がれ

なにげなく明日へ続くと思っている

陽だまりできらきらしているいぬふぐり

堺市 藤井 一二三

人の情けが咲く地獄絵のその中で（阪神大震災）

高過ぎる庁舎で民の灯が見えず（堺市政を嘆く）

無責任な文字ながながと回答書

思ひ出のふくらむ梅の白さなり

くらし向きああ灰皿の煙草まで

島根県 西村 早苗

ワンピースどこやらピカソめく模様

流暢なことばで牛乳ことわられ

三寒四温サクラ餅が売ってある

鍵っ子の着たまま乾く春の泥

レモンティー春の芽生えの音をきく

札幌市 瀬尾 六郎太

まさに鳥ジャンプ競技の不倒距離

向かい風嵐にも似たりハイジャンプ

風微妙のるかそるかハイジャンプ

カンテける風も頼みのハイジャンプ

北の果て見聞あらた北海道

尼崎市 春城 武庫坊

闇動く中を脱出記憶なく

地が狂う阿鼻叫喚に神ありや

神も仏も頼るすべなし余震また

余震連続ドッコイ今日も生きている

怨霊が静かに燃やす夕茜

尼崎市 春城 年代

大地鳴動わが師わが友如何せん

避難所の一畳に師の端然と

師を囲む四人乾杯哀しかり

人間の陰しさの中 貧しさの中

上つら美談が走るうら表

大阪市 河井 庸佑

建前で押さねばならぬ席と知る

骨惜しみしない実行力が武器

商いは粘りと工夫亡父の声

原点に戻り難題追うてみる

一步退く姿勢で画く先の先

松原市 玉置 重人

スパーの列も年寄り多くなり

度忘れの度に辞書につく手垢

病院へ行くのにどれを着て行こう

職退いて風がこんなになまぬるい

退院の妻を早速アテにする

豊中市 辻川慶子

いろいろの恩を思っている海辺

ふとん干す昨日の事はもう昔

福は内ここには鬼はいませんよ

車窓よりばんやり見てる旅が好き

両足を投げ出す畳 旅がえり

箕面市 椎江清芳

幻の彼方に沈むマイホーム

バーゲンを着ても目を引く身のこなし

入院をして身につけた腹八分

普段着で来たお見合いに親が惚れ

モンペはく写真見合いの遠い過去

吹田市 瀬戸まさよ

減入るときエイツと断ち切り美容院

無防備の極致と思う湯に入る

遠まわり春を見つけに行く散歩

無くなった昔 瓦礫に立ち尽くす

辞めてなお会社社会社という人種

寝屋川市 堀江光子

万年筆 父の遺愛の持ち重り

この辺で母のとりなし父は待ち

報われる日など思わぬ父の背

横顔は還らぬ子をば偲ぶかと

曲ろうと一筋道に変わりなく

羽曳野市 吉川寿美

余震なお避難テントへ雪が舞う（大震災二句）

通らねばならぬ運命よ生よ死よ

音読の出来ぬ手紙と相対死

響かない父の太鼓が哀しいね

八方破れこれがわたしの処世術

羽曳野市 田中透太

川柳燦燦 三窓さんのメッセージ

いい顔で次の電車を待っている

忘れてた苦しい時に蒔いた種

ジョーカーをいっぱい持っている焦り

何よりも地震の本を読んでおく

八尾市 片上英一

そして神戸あとの言葉が出てこない

それからの芦屋市打出小槌町

夢まぼろしかあのビルもこのビルも

ベッドから燃やしはじめているテント

ああまるでのれんみたいな不幸

富田林市 池森子

幾重にもたたんで蒼き夢のまま

冬空よ少し泣いてはくれまいか

だんだんと夢うすくなる冬の午後

拒みつづけたものを運河は忘れない

瓦礫と化したのか一盛りの骨よ

岸和田市 原 さよ子

南向きの部屋がうれしい老夫婦
血の恐さ亡母そっくりに齡をとる
不意だから一層うれしい孫の顔
気兼ねない友をもてなす七草粥
合理主義 時には冷たく思い古い

岸和田市 高須賀 金太

先頭で踊る男に氣をつけろ
先頭で旗を振るのが苦手です
スタートがそもそも違う君と僕
抜き返す努力は俺もやっている
影のある男を好きな男です

和泉市 岡 井 やすお

仮設住宅ゴルフ場には建てず
面接は国会式の答弁で
女性多数 県には女性知事よから
満点は決してつけぬ師の情け
風邪はやり久松留守と貼っておく

加古川市 吐 田 公 一

沢蟹で海の広さを未だ知らず
生活の知恵を昔に教えられ
病院に来てボクだけでない病
強がりの演技と解る里の母
無欲だと思ふ寺から寄付がくる

岡山市 井 上 柳五郎

思い出の中に暫く立ち止まり
お喋りが黙ってるから氣味悪い
欲望の停まる駅ない電車に似る
些事ひとつこだわり過ぎて短い日
鬼に豆よりも恵方の寿司かじり

倉敷市 田 辺 灸 六

被災地へ送る小さな灯をひとつ
天災の恐さ瓦礫の山に見る
人の計と齡を較べて冬籠り
裏方が似合うと決めた日の安堵
下手ながら好きで取組む五七五

倉敷市 小 野 克 枝

運命に片目つぶった妻が添う
出直しの一步写経の筆輕し
山越えの駄馬は日錢を握りしめ
雪を着た水子地藏のおなじ顔
「ありがとう」の言葉おぼえて孫帰る

岡山県 矢 内 寿恵子

年よりは若く流されまいとして
限りある命 限りなき詩の道
人並に迷い重ねてまだ女
生きざまは火の輪くぐりの数知れず
傷口にとまって冬が動かない

竹原市 石原 淑子

せせらぎの小石の苦悩思ふなり
仏飯のうまくもれない今日のうつ
長風呂の母をのぞいて手話となる
ゾウの鼻ゾウそのものと思うた日
木の上で観ている鳥に諭される

広島県 田村 新造

ふるさとがまだ揺れている燃えている
ふるさとをいじめつくした直下型
妹が住んで気になる長田の火
テレビ見るたびに増える死者の数
生きてたと知らず電話にどつと沸き

出雲市 園山 多賀子

あれからは蛇口全開慎もう
いくばくの余命つらつらおもみみる
音のない振子時計が似合う部屋
放物線一人よがりの夢を追う
八つ橋を大阪で買うこともある

島根県 小砂 白汀

ストレスを一気に吐いた大地震
五千人バベルの塔の下敷きに
訣別や海立ちあがり立ちあがり
北の島すべて返した四月バカ
逆吊りの刑に動ぜぬ女郎蜘蛛

島根県 堀江 正朗

鬼は外 凍てつく寒さ詫びながら
音々に生きぬき生涯停電中
裏おもて聞き分け妻も苦勞する
老いてなお笑顔の中にひそむ意地
声出して笑い愚かさ吹き飛ばす

島根県 堀江 芳子

雪しきり桜むかえるしきたりに
現実に戻ればやはり七十五
帯しめてはずむ おんなの幸思う
ややこしい電話 芳子と代ります
時代の差に耐える笑顔はいと易し

鳥取市 武田 帆雀

明鏡止水 雪見障子に雪が降る
松外し今年に賭ける亥の夫婦
ライバルの肺活量が計れない
ミスをした机に熱い茶が入る
誘われる酒に二の舞してならぬ

鳥取県 鈴木 公弘

激震の立つも座るも地獄なり
寒月やチチハハシスという地割れ
余震まだ明日の方角まで続く
ふたたびの絵皿をがれきから拾う
抱いて夢ひたすら歩くほかはなし

米子市 田 中 亜 弥

何百回嘘を重ねて地の果てに

じわりじわり本音をはかすのも他人

節分の豆をないしよで鬼が食う

言い訳の続きを今日も聞くはめに

棚の壺にまさかの時の金がある

米子市 川 上 より子

夢を詰めてしまったわたしの知恵袋

花輪の多い霊は安んじたらうか

喜んで嫁がそう直ぐに三になる

惑星の未来を握る水の精霊

風吹けばこぼれそう杉の花粉とわたくし

倉吉市 最 上 和 枝

古里の大きな山が動かない

開発の山が一物持っている

ふる里の山懐に亡母がいる

磨き過ぎメッキ少々剥げて来た

ぼつちやりと可愛いこれが美人かな

鳥取県 土 橋 睦 子

ふるさとの餅に指紋の跡がある

背の高い方が妹さんらしい

わたくしを温かい目で見る星ふたつ

天賞に真つ赤な薔薇を捧げます

薬草のマニアになって山へ行く

出雲市 久 谷 まこと

膝小僧 子供の思案見とどける

知恵袋 明日の思案はまだ出さぬ

神仏を無視は出来ぬと絵馬吊るす

バラ色に今朝は輝くエイプリル

一歩ずつ広がり野原萌えてゆく

弘前市 佐 治 千加子

ダリの時計浮ぶ中空 去りゆく人

一念発起 今この川を渡らねば

雪晴れのまぶしさ倍にして逢わん

言い分はそれだけですか どんと焼

凝視する魚の眼に会う喫茶店

弘前市 小 寺 花 峯

温度差を変えてやれない子がひとり

印鑑のふちが欠けてる助け舟

スピードを少しゆるめて風を待つ

厨房に立って考える人になり

ときどきは釈迦の夢見る無神論

砂川市 大 橋 政 良

出迎えるみんな仮面に見えてくる

過労死につながっていた導火線

根回しがマニュアルどおり進まない

結局は馬鹿の真似だけうまくなる

大根を切る庖丁を研ぎに出す

生駒市 北山悟郎

男なら好んで火の粉浴びにゆく

危険と背中合わせに仕合せが

病人に体温計が羅針盤

男老い心身小さくなり果てる

いさぎよく散らす命を永らえて

奈良県 田中紀美代

湿布貼る背中を繕うように貼る

相性が良すぎて好かん時もある

おきまりの会話でふたりの鍋つつく

私の出番に早くも笑うひと

いつからか夫の祈りが長くなり

美禰市 安平次弘道

耐えている言葉へ動くのだ仏

自画自賛あわてて落ちる花の首

金にもの言わせ唱える開けゴマ

大いなるマンネリ朝の顔洗う

老人の定義が癪な若作り

下関市 石川侃流洞

散骨でも化けて出ません子に任せ

羽衣も古び旧姓遠くなる

珍問愚答 誰か政治を思わざる

棒読みに棒読み慎重審議する

末席を取るため一番乗りをする

唐津市 久保正剣

銀行を襲う車をまず盗む

政治家になれる資質は無くていい

液状化しない女とまづい酒

別姓で妻と書いてるルーム・キー

大地震やさしい政治出遅れる

唐津市 山口高明

ネービーな色が好きです人嫌い

人間の心を捨てる自己破産

友達が出来ぬ首席の孤独感

ヨチヨチと新聞持つて祖父の部屋

横紙を破るおとも娘には負け

神戸市 山口美穂

この世の地獄 五体で受けた震度七

生かされた喜び次に欲が出る

噫わが家倒壊の庭水仙が咲く

五千の命 五千の無念ドラマみる

天地裂く夢に目覚めて汗握る

西宮市 秋元てる

回忌済みの気抜け地震にどやされた

「あの時も鏡が割れた」老母おびえ

手も足も出せず静かな災害地

受話器から「生きててくれて有難う」

雪椿この災害に白く咲く

大阪市 上田柳影

いのちの灯消える日めくり剥いている

三代の努力を消した震度七

献血車降りると青く澄んだ空

言いきってすつきりさせたのだ仏

平家蟹なんと淋しい顔だろう

京都市 都倉求芽

十大ニュースのつらい第一位が出来た

厚化粧の地表を断層 気に入らず

地球ごと輪切りにCTできないか

コンクリートと鉄で出来てた蜃気楼

天災に裸にされた政治力

西条市 片上明水

余命表 借金だけが残りそう

何よりも先にこの客 酒をつけ

裏町のニュース裏町だけで消え

約束も破った時も酔っていた

地方版ミカンが済むと梅を追う

香川県 成重放任

漬け物の石に似合わぬ大理石

あの人の話半分聞いておく

浮草のような暮らしが待つ罹災

赤子まで温い権利を持つ家庭

助け合い救い合うのはやはり人

香川県 木村 あきら

姿見にVサインして家を出る

三寒四温 花もシブシブ咲いてくる

錆びている釘が一番効いている

千切れ雲見つめ八十路の一人旅

生きている事も忘れた痴呆症

香川県 工藤 吟笑

風除けの垣を外した春日和

国訛り丸出しでゆく島遍路

丸腰で頼みにつれば断れず

墓掃除 無縁仏の草も抜く

トビが鷹生んで三代目に潰れ

香川県 川崎 ひかり

顔からは想像出来ぬお人柄

お医者さん首ふるクセはやめてんか

パーティーの後の空しさ知るグラス

苦を樂に変えて老母さん丸く生き

太陽がのぼると生きる勇気わく

香川県 池内 かおり

確実に優しくなつて来た夫だ

掬うても浮世の垢が寄つて来る

あつちのをこつちへやった預金です

留守電に入り切らない讃岐弁

夕食のメニューが変わるお買得

香川県 新川 マサエ

焼石にボトルの水を運ぶ蟻
捨て石になって汗かくボランティア
手を鳴らし人や金魚を呼んでみる
燃えつきる命見つめる心電図
生きているように話している仏間

大阪府 板東 倫子

地獄絵のコーベ見下ろす風見鶏
湯気の立つブタ汁へ涙こぼす人
千円の大根を売るユダ憎む
十日目の入浴 芦屋の杜長さん
東西の震災 奇しくも五黄の亥年

大阪府 榎本 落児

合格の孫にあげよう五つ星
いい顔だ和服がとても似合ってる
視察者はきれいに髭をそっている
視察者の作業服には泥がない
膝の猫に言うて聞かせる漱石忌

大阪府 松尾 柳右子

助け合う心覚まして大地震
青年の未来明るいボランティア
豆まきは遠慮してます被災地へ
余震ねつ服着て寝酒止めてます
遠方の見舞電話に心晴れ

大阪府 本間 満津子

トイレの水持って見舞いに行けもせず
顎までお湯につかってピーポー聞いている
つくづく無力 人一倍に思っても
命も金も片方だけではしょうがない
市の花 桜 西宮にも春が来る

大阪府 坂本 仙吉郎

先送りして居るうちに年が暮れ
先送りすること止めて亥の如く
齢九十 早やと未だとを使い分け
健やかで世紀の替わる年を待つ
元氣だよ三年先は年男

堺市 一瀬 福一

古里の水車丸ごと凍りおり
あの時が頂天だった回り椅子
カタツムリ子細ありげに首を曲げ
ゴムバンド少しは無理をきいてくれ
逆境に航路変らぬ父の地図

箕面市 岩津 ようじ

あの神戸あの三宮アーケード
泥酔を怒らぬ妻に気を遣う
すれ違う人の微醺に渴く喉
あの人のダッチローは処世術
結界のわが小宇宙四畳半

吹田市 茂見よ志子

弄くつた自然にしつべ返しされ

自然死は贅沢なのか震の惨

欲持たぬ今の気持よ持続せん

何事のありやと冬の月は冴え

春来るといふに詠めない春のうた

守口市 結城君子

落ち込むと倍の力が湧く血すじ

被災地の電話にみんな立ちあがり

避難リユック揃えて安眠できた床

日米を比較されてる救助の差

それからは毎日の湯のありがたさ

東大阪市 森下愛論

無になれるひととき一合樽の酒

盃が乾く解けないパズル解く

つきささる皮肉をかわす呆け上手

ボランティア他人と言えぬ手の温み

一分後我に返った大地震

河内長野市 井上喜醉

切れ味が鈍ると頂上にはおれず

満腹にさせずペットもダイエット

ストレスは旅へ出るまでためて置く

女房の色気へ酔うて置く平和

ゆっくりと器へ慣れる聞き上手

西宮市 山本義子

終戦時も苦しかったが若かった

被災地も春到来の陽ざしあび

いい噂聞いた耳たぶ丸うなる

電話口ポトリポトリと情けふる

まだあつた向う三軒両どなり

宝塚市 吉田笑女

一生に二度目の恐い大地震

身を寄せた我が子の家に落ち着かず

ガス付いて我が家へ帰るいそいそと

ほっとして夜はぐつすり夢も見ず

住みなれた土地はいいな独りでも

川西市 松本ただし

幻を原始に戻す鯨の尾

憂いがない備え天災だけでない

即是空 幻の街 空の青

断層に沿ひ討ち死の石灯籠

銭湯へ順待つ列でホッとする

川西市 氏林洋敏

日本にリーダーいない大地震

地震から家で離せぬヘルメット

仏壇の前で淋しいことを言う

母背負う体力だけはとつてある

湯煙の中で方言聞いている

京都府 稲葉冬葉

終章の炎だ京の初日の出

千手観音 千のひとつに見放され

幸せて温い涙が流れます

ありがとうロビン 君の名は忘れない

横綱の若さへ綱を締め直す

和歌山市 細川稚代

神様の怒りか列島駆けめぐる

シャボン玉まだ七光信じてる

疑えばきりない熱い茶を入れる

マヒの手で真紅のバラを画きつづけ

いい人に会えばいいこと教えられ

和歌山市 池永正雄

笹舟も小さな風は欲しかろう

曲り木の一本も無い杉林

女心が返す本にも枝折付け

傑作と聞いてピカソの前に立つ

ハナハトもサイタサイタも共白髪

名古屋市 越村枯梢

生と死の間の吊橋揺れ止まず

修羅の街 小さな殻に閉じこもる

結局は街に漂う浮遊塵

愛しさは私を支える杖一本

着ることもなかった父のタキシード

静岡県 安本晃授

天の刻信じて走る救急車

只管に地を這う父は農の虫

ピンボケの顔も愛嬌旅写真

広告の安心をかう老い煩い

ギャンブルをこぞって煽る春の風

静岡県 蘭田 蓼沓

打てば響いた頭も徐々に薄くなる

判読で孫の手紙を読むたのし

トンネル抜けて抜けても街見えす

住職と羅漢が好きで寺通い

春近し 蛸の羽音を一つ聞く

竹原市 森井 菁居

溜息を積んだがれきが海渡る

のんびりの日々でビールに味がない

就職が決まり電話が長くなる

大学を出て職があるお陰さま

花の大学 酒も煙草も親ゆずり

出雲市 小玉満江

私には自慢に聞こえる愚痴話

春だから内緒話を明かさうか

木の椅子で一人待つて冬駅の駅

旧正月 回転ずしを家族連れ

春よ来い春を知ってた路のとう

島根県 佐々木 鳳 笙

がれきから転がる老母の骨拾う（阪神大震災の被災地で）
とん汁に少し笑顔を取り戻す

おおい雲よ おふくろさんに似て来たぞ

人生の調味料です五七五

流行を追っていますと風邪を引き

富山市 酒 井 輝

古賀調と唱歌が大正琴の曲

乗り継ぎのきかぬ地球を痛め付け

気が付いて折り返しても降り坂

ポケ電に切り捨てられる昼休み

俺だって活断層の上に棲む

仙台市 川 村 映 輝

外食が好きで料理に生かしてる

九十一 明日へつなげる自信ない

贈物 誠意と義理を区別する

病院へ行っても義援箱ならば

震災へ貧しい人ほど心よせ

十和田市 小笠原 敏 人

フルートが故郷の山にこだまする

道譲る人と車で和む朝

二十余年 夢のオーディオ買いに行く

調度品替えて一日明け暮れる

寒立馬嘶く北は寒からず

米子市 林 瑞 枝

デーバックから産まれた春の蝶が翔ぶ

騒音の中にわたしの地平線

せきずいを真つすぐ青い墨を磨る

手を伸ばし運を掴んだ月の眉

堺市 板 尾 岳 人

愛されて聖母マリアに抱かれしか（フートルダム寺院）

父の愛 母の嫉のある流れ （セーナ川）

妻の名を忘れてしまふエーゲ海 （エーゲ海）

紀元前紀元前という遺跡 （アテネ）

西宮市 奥 田 みつ子

倒壊の庭に水仙凜と咲き

命かるし虫けらとなる震度七

ラーメンの温さ確かに生きている

朝の蜘蛛 生きていたかと話しかけ

堺市 山 本 半 銭

人間はじやまものだった森の中

お悔みを他人の顔で言うている

黒梓にとても好い顔泣けてくる

豊中市 江 口 明 光

年のせい忘れ上手になった母

美しい貧しき男湯と女湯に

円満な顔に五十を足してみる

地震から見えない物が見えてくる

吹田市 井上照子

隣室の音あなたかも過去浮かぶ
森羅万象芽ふいて生へ希いもつ
書棚の本老いという字がやたら見え
神鈴を鳴らしまだする命乞い

和歌山市 宮口克子

退屈で安全地帯からとんだ
両方をたてる綱引きむずかしい
むずかしいですね大人の通信簿
激論に酔うてこんなうまい酒

鳥取県 西浦小鹿

力尽きたところでまだ前をみる
あなたからまだ見ぬ夢をみるつもり
サイコロをころがして見る夢ばかり
のたうった跡が額についている

今治市 野村京子

もどれない道へ誘ったのは女
雪の日もパン屋の灯ついている
水仙の軽さ腕から娘が抜ける
外は雪 夫婦羊かん厚く切る

唐津市 田口虹汀

風船を地球儀にして描く日本
下戸の眼をたこ焼きの灯が離さない
腰痛に泣く男あり陸月空

少年の夢も卑弥呼と同じ夢

唐津市 仁部四郎

選挙カー黒い煙をやはり吐き
民主主義 修繕に行く投票所
うたたねの夢はせいぜい宝くじ
花の闇明りの方に居る家族

大阪市 町田達子

晩の悪夢悲しい人造る
お雛さま今年は辛抱願います
寒風へほほえむ梅に励まされ
ノクターン少し悲しみ忘れよう

大阪市 清水絹子

花の下 京には京の玉子焼き
あの日から本音出し合い隣組
割って焼こか焼いて千切ろか寒の餅
手術承諾 妻という字がむづかしい

大阪市 神夏磯典子

被災の人思えば何でも有難し
肩凝りがすうつと消えた良い知らせ
本当の山に出会えて越す勇氣
雪しきり人待ち顔の歩道橋

大阪市 井上白峰

おぼろげな記憶たどれば母の海
忘れたい事が脳裏にこびりつく
学歴も派閥も要らぬ力瘤
果し状 突き付けられたあみだくじ

大阪市 川 端 一 步

駅掃除するおじさんとバルザック

定年まえ第二就職せかす妻

女文字 公開をして封を切る

青年が柱になって救援復興

大阪市 津 守 柳 伸

ありがとう言える心を大切に

ひたすらに祈り邪心を消してゆく

面影を彷彿させる電話口

明暗をわける夜明け震度七

堺市 楊 井 二 南

冷えた手で情の深さを訴える

矢印へ方向音痴気を許す

約束を破りたくなる面構え

包装のまま義理チョコを蓄える

豊中市 吉 田 あずき

千年のサイクル砂時計をかえす

断層はもう人間の地図でない

背なに陽を受けて哀しみ増してくる

菜の花の思い出弾むことばかり

豊中市 三 宅 つえ子

てのひらに生きる歓び陽を溜めて

余震待ちひとりランプを抱いて寝る

このひとと沈んでもよし大地震

車椅子 冬のさなかに春の歌

守口市 森 川 まさお

ひとり旅 影と一緒に宿へ着き

だんご汁 坂を越えれば磨崖仏

句三昧 冬の噴水かと思う

もの言わぬ同士で飲んで意思疎通

寝屋川市 江 口 度

河豚ふくれ蟹泡をふく震度七

風に弱いが地震に強い街路樹よ

強盗の逃げた闇から舌が見え

白雪皚皚 再出発の第一歩

寝屋川市 柴 田 英壬子

瞬く間の人生だから意気に燃え

老斑の手にエメラルド指しあぐね

風薫る色に形に藤の花

大震災以後占いに叛けない

寝屋川市 平 松 かすみ

この湯気を上げたい テレフォンは不通

無事と言う声がこんなにうれしい日

被災者を思う 寝る時 食べる時

陽光へみんなお喋り好きな花

枚方市 海老池 洋

遊び好きが柄に似合わぬ新刊書

マルつけるだけのハガキも出し忘れ

休火山の姿でうつらうつら妻

仙人になれそう靈芝入りの酒

藤井寺市 福元みのる

立ちつくす家も家族も亡き故郷
久し振り返書はやはり病んで居た
子の縁談 父の意見は無視される
父はまだアンチ巨人で押すつもり

羽曳野市 森松まつお

無事な顔見て軽口も出る安堵
それらしい服で被災地へ行く総理
松の内 例年どおり胃が重い
かみあわず火種残したまま別れ

八尾市 宮西弥生

何もかも焼いて神の子となりぬ(阪神大震災 二句)
親と子の絆はかたし凍りめし
活断層の上で開き直っている
落ちない口紅買うて春を待つところ

八尾市 宮崎シマ子

五時四十六分止まってしまった花時計
春だ春だと水仙 水を欲しが
錯覚のゼロ ポケットで勘定し
悲しい日も庭に鶯来て歌う

八尾市 山下美津留

影武者が分別くさい顔でくる
大時計 恐怖の時を指し続け
良心がうずき葬儀の小間使い
地図の隅たしかにあった丘が消え

東大阪市 崎山美子

少しずつ夢がしぼんでゆく寒さ
大雪のテレビへくしゃみ二つ出る
被災地はさぞやと思う雨の夜
同じ傷負って友の痛み知る

岸和田市 芳地狸村

切札のハイテク泣かす活断層
代替のバスにうれしい長い列
恥じらいの文字に女の艶がある
魔術師の指より冴えるたこ焼屋

岸和田市 岩佐ダン吉

軍事費を聖域にして譲らない
星条旗おし立てリンゴやってくる
チリメンジャコの命もらって生きている
立場捨て僕に青空見えてくる

岸和田市 古野ひで

被災地の子等の笑顔に救われる
道ひとつへだてただけの運不運
平気では語れぬ亡母の一代記
立志伝 紆余曲折の果てと言う

岸和田市 寺田甚一

震災で知った人情不人情
最善の措置よりいまは水をくれ
昔話 年ゆく毎に鮮明に
均等法 弱い男がじれったい

岸和田市 島崎 富志子

娘の厄が無事に終ったうまい飯

行く先は天国ときめ老い楽し

バレンタイン 夫婿孫と氣を使い

献体の叔母の勇氣よ八十歳

和泉市 西岡 洛 醉

無為無策 柏手打った月参り

四疊半独りばっちの仏顔

明日から無職 太陽眩し過ぎ

週末へけじめをつけて金曜日

富田林市 松本 今日子

車椅子少しおしゃれをした母と

ポケベルの鳴ってる人とすれちがう

南天の赤も時にはさびしくて

良き年と頼んだはずの初日の出

富田林市 片岡 智恵子

悪友の逝って男のもの足らず

腹立ちを静め孤独と向い合う

捨ててきた台詞に明日は閉ざされる

大震災 修羅を見た眼を閉じられず

大阪府 榎山 隆

ボランティア背筋のどれも伸びている

まっ先に淡路 阪神 春よ来い

逃げ水を追った彼方は幻か

縁結びでしゃばりおよね居なくなり

大阪府 八十田 洞 庵

終着駅着く道のりは地図に無い

みろく仏 浄土におわし母もまた

職人を継ぐ長男の飲みつぶり

北斎の浪見る湯船一人旅

伊丹市 山崎 君子

生き延びた梅は待つて春の声(阪神大震災に)

カレー食あの皿もないひとり言

ガス電気水はお家の神器です

星一つ見つけて友の安否聞く

姫路市 大原 葉 香

糸一本ほどの命がまだ続く

風何か言いたげ雲を連れて去る

売り声の途絶えて久し裏通り

蟻の歩幅たどればきつと善だらう

姫路市 中塚 遊 峰

墓地買うて墓も建てたが跡目なし

年輪の豊かな話術 座を温め

弱音など吐くひまなかった寡婦街道

懺悔したその手で蠅も叩きます

奈良市 宮口 笛 生

肩書きを二つ残している古希で

赤い服だんだん似合うて来る歳だ

人間の弱さ神様まつり上げ

一月二月いじけたままの老い二人

奈良市

天正千梢

神さまのはからいにより地が破れ
プログラム神はきつちり握つてる
灰になり無一物だと知りつくし
忘れかけた人を恋うている夜景

奈良市

米田恭昌

衣食住足りて被災の友思ふ

身内より他人につくすボランティア
自販機がひったくるようにお札とり
ライバルに素顔見られたお手洗い

奈良県

中原比呂志

ワトソン君見たまえこれが活断層

万歩計振り切れそうな災害地
わが家でも埴輪兵士が重傷す
つばくろよ頑張れ俺も家造り

京都市

松川芳子

酒の味忘れましたと万歩計

母さんは若いおだてに乗せられる
ストレスがふわりふわりと煙草の輪
鏡とは上手に妥協して生きる

京都市

山海友熙

水や空 空や水恋う被災の火

火柱の影におびゆる大枯野
仏灯の蠟涙かたし運命とも
春を待つヨチヨチ歩きの赤い靴

和歌山市

福本英子

何や彼や言うても父の顔が効く
鳩に餌をやつて婦長に叱られる
糞害に平和の鳩の行きどころ
防空頭巾の縫い方聞きに隣から

和歌山市

垂井千寿子

ライバルの古い傷口かばい合う

戯れの言葉に本音見え隠れ
母の力はなんと小さい娘は神戸
窓際で理想の星を抱いている

和歌山市

桜井千秀

無色透明とても怖くて手が出ない

被災地の合い間に流すコマージュ
山中の気配に神の化身見る
時超えた景色に問うてみたいこと

和歌山市

田中輝子

弁解の声生臭し電話線

人救す悲しいほどの失語症
還らない時間と医者も知っていた
身の一つ列に並んでいるいのち

和歌山市

福井桂香

シンビジウム今年も咲いてくれました

母よはは ころろに椿敷きつめる
仏壇のメロンは風邪の娘に渡し
過去帳におわすは知らぬ人ばかり

和歌山市 山口 三千子

何かある度に濡れ衣着せられる

齢かなと思う話が諄くなる

真心は通じぬものか鬼あざみ

風見鶏いつか自分を見失う

和歌山市 内芝 登志代

震災へ若い力が底力

品のよい老先生も水運び

婚約へ母と娘の小旅行

哀しさが深く女は鬼となる

和歌山市 榎原 公子

風避けて越せぬ炎の河を行く

山茶花の散り敷いてなお炎なり

めくるめくような出逢いがあつたつけ

ラップして会話が乾かないように

岡山市 川端 柳子

生死の境さまよってきた声ほがら(阪神大震災)

七十歳になってもがんばるむきになる

歳月や孫の句を読むあの方も

住所録 全部大事にしたい人

倉敷市 井上 富子

まだ未知の私を探す遍路笠

能力に応じた差しを持つ賢母

制服がきりと包むニューフェイス

両の手に孫唄わせて土筆がり

笠岡市 松本 忠三

女房がいい年をして鯖を読む

旧正月 戦友の死の電話来る

ばあさんがわたくしにだけ万歩計

若いわねただ一言の世辞でよい

岡山県 山本 玉恵

魂を呼び合う冴えた星月夜

守護神も一緒に山を売る話

車椅子 愛一杯を積荷して

百点の友より長い愚痴を聞く

岡山県 二宗 吟平

旅帰りに出たときのまま独り部屋

震度四それから本を置きかえる

新年の老人大学ワンカップ

一年忌ぴんとこぬほど日の速さ

広島市 森田 文

救援でなかったへりが今日も飛ぶ

日本列島ビックリ箱の上にあり

菜の花が咲いたよ孫も子も来たれ

寒椿急に決心したらしい

廿日市市 林野 甦光

川岸で修理するあり鵜飼舟

雪解けに軒並み朝の陽が光り

どちらかと言えば弱気な善人で

諦めに慣れて一つの旅終える

震度七 原始時代に戻される

柳井市

弘津柳慶

投書欄 今の政治へ怒り声

薬にも毒にもならず平社員

こだわりを胸に会釈をして別れ

宇部市

平田実男

賞味期限あつたら捨てられそうな僕

住めば都 檀山捨てたものでない

不景気は知らぬパチンコ屋のネオン

人災のほうの怖さも予知出来ず

鳥取市

西原艶子

雪だるまになって次々バスに乗る

けんかして友と敵とが見えてきた

皿へ盛るだけで絵になる松葉蟹

人ひとり振動させている慕情

鳥取市

小谷美ツ千

寒月や切ないノックが聴こえます

寒たまご恋ひりひりと限りなし

うたがえば五本の指の生臭き

光るまで熱い助走を繰り返す

鳥取市

岩原喬水

亥の娘に亥の孫ができ

待ちあぐむ我が世の春はまだ来ない

金回り悪く体調まで悪い

ある日ふと福の来そうな予感する

酔っ払い宇宙遊泳する茶の間

鳥取市

西村黙光

禁煙を客にすすめて煙草売る

風邪で寝てかぜに養生教えられ

新築を浄めてくれた猛吹雪

倉吉市

淡路ゆり子

手のひらに脳死と書いて雪十日

花の芽をいたぶっている春の雪

神様の吹き矢に当る番を待つ

付きを呼ぶスカーフ巻いてパチンコへ

倉吉市

野口節子

ときめきを隠す化粧をしています

一城を束ねる紐が細すぎる

斜めから迫れば弱い涙つぼ

おい鏡 世辞の一つが言えないか

倉吉市

米田幸子

一線で区切ると青い空と海

城壁を築くと人が振り向かぬ

目に角を立てるとものが歪みだす

じつくりとハワイに行つて肌を焼く

米子市

澤田千春

伴せは続かぬものよ背を伸ばそ

続編を信じて土を耕そう

光るものみつけないので歩きます

母の忌にろう梅雪にのつて咲く

米子市 野坂 なみ

幻のオアシスがあり人は追う

地獄絵の中で摺んだ光るもの

ひびき合うものを温めてゆく日暮れ

あかね雲 沖の向うはよろしくね

米子市 光井 玲子

みどり児のはや産湯から自己主張

明日きつと光が見えてくる予感

脇役を演じ続けて終わるだろう

マッチの火それは大事にしています

米子市 茂理 高代

田圃道このなつかしさ何故だろう

振り向くと捨てたい恥が積んである

陽の当る縁で静かに句を作る

乗り越えて同じ思いで月を見る

米子市 中井 ゆき

今年こそ桜前線追ってゆく

セーヌ川ロマンチックな顔になる

よもぎつむ母とおんなじ陽だまりで

日曜は犬にも朝寝言いさす

米子市 白根 ふみ

冬ねぎの白さ疎開児みずみずし

余震なお雪ぐつの里仮の宿

復興の命の道路を広くする

人情の深さ雪ぐつなお深く

鳥取県 土橋 螢

器用貧乏 最善を尽くすだけ

地震火事 兵庫の人に雪が降る

地震より恐い親父の声がする

何もかも許して春を待っている

鳥取県 松下 たつみ

なにもかも言ってしまった懐手

温かい言葉選んで折れておく

草の根を信じて父の医者嫌

大寒の手に振れる物みな痛し

鳥取県 西川 和子

正面の山に慰められている

光るとも思えぬ石を磨いている

プレッシャー ペンのインキが出て来ない

このままでいいかと今日もゆれている

鳥取県 田村 きみ子

桜の下で肺活量を比べ合う

あらかしこ そんなレターも書きました

髪染めて余った命遊ばせる

桜咲くのになたしが咲けば笑いの

鳥取県 幸家 單車

身を張って証言台に母が立つ

俺の行く途に矢印ついてない

愚かさをかばう口髭付けて見る

生きて来た証を綴る一行詩

鳥取県 さえき や え
地震以後 丸寝のくせがつきました(阪神地震)

お客は禁煙すうているのは運転手

まだまだ不景気 米が自由にかえたとして

恩師逝く 美しきかなもどり雪

鳥取県 乾 隆 風

こしらえた笑顔に油断するなかれ

どっちつかずのぬるま湯へ手が打てず

反抗のねじれは戻るまで待とう

汽車賃ほど残して義援金をする

鳥取県 黒 田 くに子

この個性伸ばそ杉の子天をつく

まだ夢がほしくて伸びる豆のつる

病がなんだ背を伸ばそうか背伸びする

伸びる芽をつんでレールを引いている

鳥取県 羽津川 公 乃

春の海 竜神さんに逢いに行く

丸い背はわたしの戦後五十年

十指みな祈る形に組み直す

夫は料理 妻は片付け息が合う

出雲市 尼 れいじ

また来てネ等とは言わぬ洗い髪

ノーマルなタイヤで雪道行く夫婦

過去の人から時々もらう知恵

二杯なら眠れたはずの赤ワイン

出雲市 吉 岡 きみえ
春待つて てんてんてまりついてます

ほらそこに春が来ている水の音

夫婦独楽だんだん間のびして回る

自戒十訓ことしはハイという返事

出雲市 石 倉 芙佐子

菜の花に見初めてもらう白い雲

木の葉づく鳴いて私を哀しませ

女おさおさ五人官女は緋の袴

桃の花好きだと言えばことたりる

出雲市 岸 桂 子

終電車すでに鎧は脱いでいる

頑張っで行かねば山は登れない

風花やこれから先は春になる

車椅子上手になった母の背な

出雲市 小白金 房 子

吊皮に今日の疲れがゆれ動く

呑む話 夕やけ雲にせかされる

失明へ春がやさしくノックする

捻子巻けば動く記念の腕時計

島根県 石 飛 水 煙

人生の花道祈ること多し

男泣き瓦礫の山の彼方より

一瞬に風呂にも酒にも遠ざかり

災害地だんだん欲もとりもどす

島根県 藤原鈴江

強がつて悲しい事は追いはらい
愛情に包まれ今日も立ちあがり
夫婦とはそんなものかと諦める
もったいないこんないい事忘れてた

香川県 山地 マツエ

かくれんぼかくれ上手で忘れられ
初孫が生まれわが家に春が来る
いい笑顔でした柩の老母送る
気まぐれに蹴った小石がはね返る

松山市 白石春嶺

寝袋を脱ぐみの虫のタイミング
約束を違えず土を割る息吹
へそくりを貯める財布に鈴がない
駐在所が欠伸 防犯モデル地区

松山市 宮尾みのり

そう言えば娘へ譲る物がない
紙袋にまで気を使い女かな
今にみろたつぷり利子もつけてやる
ニコニコと仕返しもするクラス会

今治市 越智一水

秋灯下 妻からお茶の声かかる
二月が好きよ木の芽草の芽嬉しい芽
陶芸の里で土筆のあった声
孫が蝶追うてる猫も追っている

今治市 矢野佳雲

天狗の面 鼻高だと覚えあり
どの鬼も手の鳴るほうが好きらしい
いい風をつけて売りたい風車
子育てがやっと終ると姑の世話

高知県 赤川菊野

下駄箱に女物だけ淋しいね
時々鬼を演じて独り住む
よう我慢したなと仏間の灯がゆれる
生きているよろこび写経の墨をする

北九州市 梅田宣司

確定申告 笑わぬ顔とすれ違う
ヒョットコの面をかぶって輪をぬける
ふくなべの酒に飲まれて打ち明ける
しめ縄もせず正月を旅に出る

福岡県 横地東川(正好改め)

付添いの妻 筆まめに闘病記
頑固いま落葉と語る地に住みて
小溝までU字溝なり芹探す
古都言葉今に伝えて国訛り

熊本市 永田俊子

どん底で人のなさけの熱い汁
死はそこに夢の続きの修羅となり
ドラム缶風呂 戦地の空にも星ありき
人逝き生れて無心に回る水車

唐津市 浜本ちよ

目を皿に犠牲者の名を見つめおり
狭い世をなおせまくするわが心
味噌汁は一人で三食のんでます
殿方は男心を死の日まで

富士宮市 渥美弧秀

思春期の孫へ一言悔い残る
傘寿近く反骨の血を呼び戻す
晩年へまだ燃えている詩とピアノ
唾み合いまた寄り添って二人きり

弘前市 一戸ツネ

夕鴉 風に誘われ経をよむ
天地一体 雪は津軽を包みこみ
雪曼陀羅 泳ぐ余生は付録です
雪搔きに微笑みくれる明けの星

弘前市 中山雅城

大将の写真が睨む大講堂（小学生時代）
先生がゲートル巻いて来る校舎
編入の子供の親は師団長
玉子焼 運動会の春と秋

弘前市 岡本花匠

受験子へ応援に来る夜鳴きそば
極楽の味かみしめて飲む甘茶
稚児よりも祖母うきうきと仏生会
春日和 好きな色とき画布を染め

弘前市 蒔苗果林

春を待つお腹輪切りにして写す（検診入院 四句）
血圧が高くこうこう爺と呼ばれ
曜日ごとナースの白衣花がわり
夕方は妻の見舞ときまつてる

弘前市 村田善保

行く川に乗れず枯れ葉にある愁い
人生の苦楽を噛んだ歯が軋む
失望の涙で溶いた泥絵の具
パンのみに生くるにあらざる空の蒼

十和田市 阿部進

くれなずむ姑が嫁にいやがられ
大地震 残ったものはローンだけ
厄払いしたのに事故に巻き込まれ
還暦が我が人生のスタート点

大阪市 大塚節子

母と二人 今日はどうんの昼にしよう
顔がきくというても所詮金が利き
この年で何辛抱と思うけど
直下型 安全神話は神話だけ

大阪市 藤田頂留子

復興のより早かれと桜咲く
足元からお慈悲頂くお砂踏み
点滴のベッド情報完備なり
その時に言うだけの出来事です

生れたと只一言の電話口

大阪市 清水利武

自然破壊の仇を取りに来た地震

冷蔵庫一人歩いている地震

幸福がやっともどって見る桜

堺市 柿花紀美女

亡父の蔵書はらりと落ちた花葉

寒時雨終日こたつ老い深む

貼り変えた白さへ亡母の影を見る

一揺れが瓦礫と土砂の地獄絵図

堺市 黒田真砂

少し他人めいた顔して娘のお正月

五十肩少し遅いと湿布薬

主婦業もだんだん手抜き四十年

落葉掃く倅せ庭の寒椿

堺市 中野樺子

くらしの道具 瓦礫の下で泣きじやくる

震災に価値観変わる神戸の灯

持ち出しリュック中味に迷う昨日今日

護美箱もスケール違う瓦礫見る

高石市 浅野房子

学校と塾しか知らぬ子の未来

喉元を過ぎぬうちからよう忘れ

大地震 体の揺れが止らない

被災地のニュース見ながら不味い飯

メンバーの色に染まない天の邪鬼

この怒りどこに向けよう活断層

都市崩壊こんなはずではなかったに

上下左右 揺さぶられたる六十秒

池田市 岡本吉太郎

運強い昭和の御代も遠くなり

合理主義過ぎて己の首をしめ

山けずり海埋めて地の神怒る

正論と思い込ませる偉い人

池田市 金崎峰子

お返事を手紙か電話迷ってる

愚痴っぽい話 自分をふり返り

似たくないことまで似てる亡父思う

時の人いつのまにやら影ひそめ

茨木市 藤井正雄

被災地へ真水十キロ徒歩で来る

隣の子よく叱られて逃げ上手

人情が隣に座る北の旅

三年の約束 支店十年目

交野市 福崎しげお

地震には警報ないという恐怖

尋ね人 瓦礫の下という地獄

握手して愛確かめた手の温み

流水はまだかオホーツク北の果て

藤井寺市 中島志洋

肩の凝る話はやそう春うらら
四月馬鹿やつと気付いた待ちぼうけ
夜桜の後片付けは下戸の役
出不精を優しく誘う春の風

東大阪市 安永曉子

もくもくと救われる人救うひと
運命に大人子供の差別ない
六根清浄 晴天の山鬼が行く
改札はよく知っているスリの顔

八尾市 高杉千歩

桜満開 箸のこけた方へいこ
年齢をごまかしつい保安帽
一日が終り硬貨を募金箱
美化されてあの子は里へ逃げたまま

八尾市 吉村一風

イカ干しのカーテン秋の空寒し
災害へはよ来い来いと春を呼ぶ
春風に内緒話がふつと出る
花嫁の父になりたしなりとなし

岸和田市 田中文時

持ち家より借家気が楽 震災後
ゲートボールに若いつもりが誘われる
孫の目には祖母金持ちと映るらし
ご破算にして朝の靴紐締める

岸和田市 三輪通彦

夫婦でも別姓希望する世相
身のほどを知って挟まぬ差出口
小心な妻が気にする世間体
出世より趣味を選んで満ち足りる

貝塚市 行天千代

年始め大きな地震困ります
被災者に苛酷な雪が舞いながら
目の前で家が燃え行く辛いこと
走ること好きな私もう齢だ

宝塚市 丸山よし津

高慢へ神の裁きか大地震
豪邸の街でプレハブ生き残り
思い思いの方へ倒れている墓石
巣立ち行くキャンパスの恋実らせて

姫路市 丁坪サワ子

百聞を一目で知る被災の惨
一碗の飯で足りてるわが命
定年に義理チョコ一つ夢もらっ
友一人今日も旅立つ西の国

和歌山市 玉井豊太

祭笛 森から春のアナウンス
母のふり見せてお金の使い方
人間を忘れる旅にいま離陸
おんなとの戦に負けた傘を干す

和歌山市 青枝鉄治
新党の名がおこがまし古い顔

袴を脱ぐと謝りやすくなる
タカに成りトンビの親を軽んじる
あやとりで絆深める妻と孫

和歌山市 田中みね
不倫願望 孫があらうとあるまいと
手拍子に乗って今年の歌い初め

憧れの町が廃墟と化す神戸
神戸から僕等元気で生きてます

和歌山市 岩本美智子

夫病み被災の友へ手が伸びず
目立たずに礎石となつて支えたい

無農薬野菜と風邪の友見舞う

亡母と同じ齢に閻魔に呼ばれそう

大和郡山市 坊農柳弘

待つよりも追い駆けて取るそれが愛

春の風ガンバレ神戸花まつり

空威張り無理と見透かす妻と嫁

お人好し今さら四月馬鹿なんて

大和高田市 岸本豊平次

地震救済 論ずる議員の白い襟

生涯を現役の意気古希迎う

同窓会 女番長も孫のこと

畝傍山 軍服がゆく紀元節

岡山県 池田半仙
八十歳知らない小鳥群で来る
一輪挿し造花のような寒椿

虹色の順序八十まだ知らず
初孫のとても大きな鯉轍

岡山県 小林妻子
雪が降るぐらいで逢う瀬止めはせぬ
湯舟の湯こんなによ越していいですか

金持った方が縄尻掴んでる
米粒がこぼれこっそり拾うとく

岡山県 岩道博友

笑顔して受験祈願の霜を踏む
義援金募集の書面が後手でくる

ふるさとの絵心展覧会場暖かい
豆まきの後を坊さん掃きに出る

岡山県 江口有一朗

星凍てる寒い夜空よ災害地
疲れない影に感謝をして眠る

少量の酒で心のカタルシス

心経や自由の賛歌 春の風

竹原市 古谷節夫

順不同きつちり順位付けている
逆風が去年今年と吹きまくり

自分史の字余り見つけ青春譜
窓際で根を下ろしたと友のふみ

鳥取市 前田 一枝

竹とんぼ手作りの夢風を切る

横目では通れぬ募金箱の声

まだ生きるブラン一段高くする

逃げ足の演技のうまさ板につく

鳥取市 美田 旋風

その先を読んでしっかり持ち上げる

現代っ子昔話は鼻で聞く

雑兵の書齋 太閤記が並ぶ

聞かされた愚痴の本音は子の自慢

倉吉市 野中 御前

芋虫になってじっくり充電し

正直な鏡へ嘘を塗りたくる

手のひらで豆腐切ってる祖母達者

わたくしの前を素通りするあなた

米子市 石垣 花子

幸せそうな顔して土をいじる老母

置きぐすりで治るくらいの風邪ですみ

二人してじっくり育てて来た家風

折り返しからは家族の応援歌

米子市 金山 夕子

マイナスをプラスに出来る教訓だ

義理チョコを愛に変えます少年へ

湯けむりに余震のようにぼたん雪

社長の意向 君が代歌う新年会

鳥取県 石尾 かつ乃

人柄が匂う白字の句碑に逢う

休む子もなくて嬉しい朝の靴

山ひとつ越えたら母の海が待つ

白酒に孫の未来を話し合う

鳥取県 石谷 美恵子

新薬も効けば効いたでもつ不安

幸せを誓った岸へ遠く住み

年齢へものを言わせて突いてくる

火の性を隠して白く冷たい手

鳥取県 谷口 次男

とっつあんが鬼籍に入った年齢がそこ

素敵とは無縁の家系欠伸する

素敵とは遠い夫婦でそれなりに

学者より鯰の方が偉かった

鳥取県 乾 喜与志

にぎやかいテレビが震度七を言い

生きている証が屋根裏にあった

米寿から卒寿に向けた矢を放ち

日向ぼこする縁側が掃いてある

鳥取県 上田 俊路

真実は言えぬが嘘はなお言えぬ

土に生き静かに土の鼓動聞く

言い訳のたびに本音がもれてくる

防災を明日はわが身と聞いている

鳥取県 林 露 杖

終戦後六度目という大深雪

震災の孫 転校で参観日

孫転校 年金生計組み替える

老妻に町民意識アンケート

鳥取県 津 村 八重子

道終るまではしっかりと踏んで行く

浜千鳥歌い恩師の顔偲ぶ

羽子板に亡母の残した絵が動く

恩返し出来てあしたの風を吸う

松江市 柳 楽 鶴 丸

頑固一徹 路郎門下の生き残り

頑固だけよく先生に似ています

猪突猛進そんな頃もありました

死んだら寿命 薬は飲みません

出雲市 板 垣 草 丘

習いごとの中継もして忙しい

城のある人にちよっかいかけられる

焼け跡に飛ぶ種もある風に乗る

市議選の境界にいて動けない

出雲市 板 垣 夢 醉

乱痴気の罪を背負って桜散る

恋せよとサクラ老いの身そそのかす

嫁さんに弱い息子で父ゆすり

冬明けて体のごみを日に払い

出雲市 伊 藤 寿 美

大往生か遺書か阪神大震災

紙一重のいのちよ老いてベシミスト

過疎二人繕る縦糸が細くなり

水やった花を数えている余生

香川県 永 峰 伽名子

地球規模の天災地災は戒めかも(阪神大震災によせて)

やっと声通じた刹那の感動よ

避難所へ小さな善意を子に託し

八十の姥引き取るこちらハンデイもつ

高知市 北 川 竹 萌

八十路坂 婿を送るも三人目

薬稽の夢 自分史の結び書く

自家菜園 今日の青空元気です

マタタビ酒 杯一つ永らえる

七尾市 松 高 秀 峰

叱り役なくさめ役といい夫婦

震災で助けられたり助けたり

勝算があつてライバル先に立ち

あの笑顔返ると信じ震災地

八戸市 島 田 昭 治

胸裂きて見せたや紅く燃える血を

その時はその時だと苦にしない

本人が来てるに弔電のおまけ

挨拶を返さぬヤング許してる

大阪市 寺井東雲

キスされてなんで泣いたかわからない

混浴と知って眼鏡の世話になる

ブラットホーム傘でゴルフの下手を見せ

大阪市 北 勝美

開発のつけが観面 埋め立て地

被災地に花売る店もある安堵

なすり合っている間に時が経ち

大阪市 渡部さと美

頭数と言われたけれどむつかしい

父の樹を時どきゆさぶってやろう

結論は出したが未練の尾が切れぬ

奈良県 長谷川春蘭

戻らない猫へ無口につづく妻

山茶花の散る哀れさが老いの身に

木の葉落ちこれより森はだまりぐせ

和歌山県 西口忠雄

脛立てて爪切る妻も女です

五七五 指で初心の貌を見る

良心のかげらで犯罪裁かれる

和歌山県 小倉アサ

病院の早い夕餉に病んでいる

寄り添えばみんなまあるくなる未来

聴く耳は持たない愛の直滑降

鳥取県 太田幸枝

写真マニアの夫が裸になれと言う

結び目が解けて男女の恋終る

陶芸マニア腕が中々ついて来ぬ

(追加)

芦屋市 黒田能子

一瞬に消えた家族の物語

抱き合って声掛けあつて命あり

無傷の家なし傷だらけでも住める

崩壊の家にもハトが舞い下りる

給水の植木に少し水をやる

震災の時刻になると目が覚める

唐津市 田口虹汀

一年の無事故故自転車に深謝する

孫曾孫来ると手狭な核家族

地球儀を回して此処がラバウルさ

足元の乱れぬ中に出すバトン

▼本社句会に対する投句について▲ 川柳塔社で

は、本社句会に対する投句の取扱いに関して、常任理事会で検討を行ってまいりましたが、四月句会から拝辞することに決定しましたので、ご諒承をお願いいたします。

川柳塔社

柳緑花紅

橘 高 薫 風

私は花という字が好きだ。草が化けると花になる。形の大小、色のいろいろ、草木の花は文字通り千種万別、造化の妙を思わせる。

数年前の晩秋の一日、岡山の華川会館で催された歳末助け合い美術展を覗いた。これには全国から書画陶芸その他千点以上の作品が寄せられる。私も川柳の色紙を山陽新聞柳壇選者の関係で毎年二点ずつ出品している。その会場で筆太ながら優雅に書かれた「花笺」の二字の横額が目にとまった。花の字が殊に良い。九十七 三溪 とあるのも好ましく、欲しいなと思った私は、出品者が東京在住の人であることだけしか知らないのに可成りの値を入れておいた。それが落札して私の所有になり、今も十畳ほどのリビング兼書斎の壁に飾ってある。春夏秋冬、変りのない黒い字が華やかな花のたたずまいや匂までも感じさせてくれる。

そして、何よりあの有名な于武陵の詩「勸酒」を思い、原文以上に有名な井伏鱒二の翻

訳を時に口ずさむ。

勸君金屈卮

(きみにすすむきんくつし)

満酌不須辞

(まんしゃくじするべからず)

花笺多風雨

(はなひらいてふううおおく)

人生足別離

(じんせいべつりにみつ)

これが原文で、井伏訳は、

コノサカヅキヲ受ケテクレ

ドウゾナミニツツガシテオクレ

ハナニアラシノタトエモアルゾ

「サヨナラ」ダケガ人生タ

となつてゐる。翻訳というものを超えて文芸はこうでなければならぬと教えられる。言葉が生きている。花も風も踏み越えて行くのが男であるし、「グット・バイ」の時宜を心得るのも男であらう。

さて、この欄のタイトル「柳緑花紅」であるが、「鵲の嘴」とどちらにしようかと迷った。いずれのはしは、見当違いのことばかりを言う私にふさわしかろうと思つたからである。りゅうりよくかこうは、柳録書この意味を含め、下手ながら洒落しているつもりで、気軽な随筆を旨指している。

作品鑑賞

神さまの匙からころげ落ちていた

江原とみお

勸斗雲に乗って活躍する孫悟空も所詮は仏の掌から出られなかったが、この作者は、すでにころげ落ちてしまつてゐる。ひよつとしてこれは作者の願望であるのかも知れない。

道楽の果ての渋茶をのんでいる

祇園あたりで舞妓の酌で飲み、陶然とした気分にはうじ茶が出たら、男冥利に尽きる。

罹災再び割れない亡母の碧い壺

亀岡 哲子

この作者の六句はドキュメンタリーの映画を見ているように感じた。この句は太平洋戦争と今回の震災とに遭つてなお命を保つ母の形見の壺の碧さが澄み切つて私の心を打つ。

草の血が青い戦はやめようよ

岩本 笑子

反戦歌として残したい句である。草を染めた血の青い無気味さ、空の青さを想像するとまことに対照的であらう。

弟がマスクをすると僕になる

小島 蘭幸

マスク一枚を介在させたこの感性は現代川柳の鋭利な武器の一つである。鑑賞者の感性と作者のそれが一致するとそれはもう完璧だ。

三月号の松丘町二執筆の後記に「何よりも先ず本号の遅刊をお詫びします。編集上の組織一部変更などのため延刊今日に及び、読者諸氏にご迷惑をかけ申し訳ありません」とある。創刊以来初めての遅刊であった。

十周年記念大会の直後の二月号には、その反響の私信も多かったが、この月の「飛燕往来」の一部を転記しておく。飛燕往来は路郎や編集部へ送られて来た私信の紹介欄で『川柳雑誌』終刊まで同じタイトルを通してところも、路郎の性格が出ている。当時は今よりも地方との通信も繁々と交わされていた。

▼蛭子省二君（朝鮮）謹啓、御端書と短冊入手、私去四日夕刻より発熱、其儘倒れて今日に及び居り、喘息併発のため苦悶二倍、いつもながら、ヒドイ目に会ふ事に候。下熱して喘息のみ残る当分擲中の者に候。全快致し衰弱回復仕りなば、直に揮毫して御一笑を買ふ事に候。

昨日信州の柳風会より電報頂き、飴坊君御永眠と知り申候。お気の毒に候。病状も仄

聞致し居りし故、再起は不可能ならむと察し居り申候。

ある人が私を凡骨をつくりだと評し申候。

喘息持のところ、瘦せたところ、猫背のところ——その凡骨君も死去せしが、私はタツタ一度会ったのみに候。曾て桂雨君とナゴヤ東館本店離座敷に閑談し居る処へ、突然凡骨君がやって参り候。当時は関東震災にて逃出し大阪千里山に卜居。どうも土地に合はぬから機会をみて東京に帰りたいと申し居り候。

（中略）凡骨氏喘息に関する愉快な話あり

新陳代謝は原則にして、古きより代るは当然なれど、遺されたる病弱者には一抹の寂寞を覚え申候。食欲を缺いたため衰弱してペンが執りにくし。かく認め疲労致し候。頓首

二月十四日正午（緑雨宛）

▼木村半文銭君（大阪）川柳雑誌感謝。今度の表紙はいい。味がある。君の「僕は今」を読んだ。無理を愛するのめいが少し自重して非無理を愛したら何うだ？と言って、君に無理をするなど注告する事は僕に酒をやめろ

と注告してくれるのと同じ矛盾さは認めるがお互に年齢と相談せにや可けん。併しもう起きているのか未だ寝てゐるのか。ウンと養生するがいい。お互に仕事は是からだから身体を大切にせんと困るぜ。といふ僕も痔で困つてゐる。起きて寝ても痛いのでコイツには降参する。愚陀といふ作家は異色ありと囁目してゐたが若くして死んだが君の片腕になる男だったがネーツマヌ奴は永生きするし、君や僕には金がなし、世の中はあはれに脚色しとる。自重々々。（路郎宛）

▼小林不浪人君（青森）その後はずるぶん久しく御無沙汰してました。今年青森に開催することになってゐる第五回海峡親善川柳大会のことに就いて亀井花童子君と打合せのため、今、海峡を越えてゐるのであります。いづれまた書きます。二月十日（路郎宛）

▼前田五健君（松山）お手拭頂きまして有難う御礼申上ます。スッキリしたもので感心してゐます。何やら彼やら恩を被るのみで酬ひられぬを恥ちて居ます。路郎師によりしくお伝え下さい。松山の正宗寺子規の遺物も灰になりました。惜しい寺を焼いたものです。五健は其の炎の中で涙が出ました。煙のためにはありません。淋しい大銀杏も半焼け、春の芽が果して出るでせうか。（緑雨宛）

自選集

恒松町紅

黒川紫香

震災のニュースが続き外は雪
あれ以来 何時か何処かでという不安
物わりのいい顔でいる老眼鏡
内心は頼り口ではソッポ向く
老い達者 日程が詰む飯茶碗

正本水客

工藤甲吉

鬼手仏心えらい坊主を期待する（阪神大震災）
人間をすくえるのは人間だけだとしみじみ思う
罹災した人の顔がつぎつぎ浮かぶ
天皇皇后 目線を同じにして見舞われる
大学入試 若者の顔に力もどる

藤井明朗

藤村女

地震国 日本列島逃げられず（阪神大震災）
戦後五十年 爆撃の跡いやな思い出
いつもにこにこ大黒さまと笑み返す
夫婦別姓 未婚の母が生れそう
なつかしく会うひと多し花の春

ドンドカン判らぬまに跳ね起きる（阪神大震災）
真つ暗な中 呼び合っている家族
がらくたに埋まり抱き合う祖父と子と孫と
夜が明けたラジオが叫ぶ悲惨さを
他人のことと思う余裕の出来た午後
レーガンに似て来たように怖くなり
震度七 考えられぬ大鯨
珍しく蒼穹の日の雪まぶし
雪掻いて掻いて草食む寒立馬
魔のさした女を男もて余し
背を丸め焼跡探す父母の骨
被災地のキャンプに愛の聴診器
ああ八十路 喜怒哀楽の浮き沈み
毎日を意のまますごす老いの幸
幸せを自分に聞かせ ねぎさむ

遠山可住

震度七 生きたいのちをいとおしむ
震度七 神も仏もこけ給い

ボランテニア 若者の眼が生き返る
逆縁の運命むなしく数珠を繰る
協道に車がポイと捨ててある

松川杜的

貫之の吸う息 吐く息 歌になり
絵皿いっぱい悲しい唄が書いてある
わらべ唄 紙風船からこぼれ落ち
八度五分 許せよ妻の炊飯器
ボランテニアのつもり 震災画報買う

有働芳仙

釣っている後ろ姿の夫を選り
十年前とバッグの中は変わらない
犬の目と話が出来る人でなし
母の手と妻の手ここで切替える
雑草は春の芽を吹く災害地

金井文秋

かつてライバルと思った人の老いを見る
肝心な所を補聴器聞き漏らし
仮病だと今さら言えぬ粥の味
この話まとめて来いと試される
呆けてては使うことない無料バス

八木千代

あまりにも身近 雪まで燃えている
雪は火にわたしの椿 散らせては
微熱つづく椿を寝かす穴を掘る
腰痛になってしまった雪おんな
雪うさぎの痕はたしかに春の机

小林由多香

神様の力も借りる絵馬を吊り
美辞麗句もらいすっかり油断する
可能性五分五分あきらめはしない
第二報待つ静けさがもどかしい
赤ちゃんを起こさぬように声落とす

小西雄々

名曲の余韻 平和な鳩が舞う
あやまって鬼抱いてから樹が枯れる
これしきの風邪と思えど八度五分
ノーサイドまでの余熱が有り難い
亡母の忌へ街はざわめく花便り

児島与呂志

辻地藏 花の見頃にそむかれる
空腹で寝たふりしたい花に酔う
根来寺の桜が人の坂にする
しばらくは恍惚でいる春の昼
幸せを見付けて根来のせりをつむ

野村太茂津

あらたまる言葉で病衣脱ぎ捨てて
八十一年使いふるした賢いとし
切腹のためらい痕を撫でながら
傘寿金婚ひとりよがりに桜散る
寄つてたかつて祝うてくれる桜咲く

波多野五楽庵

薬包紙 男盛りが過ぎました
時間下さいれんげの花に逢えるまで
雪女別れた人に似て悲し
哭すれば哭することも情けなし
憶測で二一天作五とはじく

高杉鬼遊

傷口を見せて仏の首ひとつ
大阪の涙は今もあたたかい
中年やすこし汚れた雪だるま
孫からのチョコは義理と思わない
蒟蒻のうら返される無愛想

野田素身郎

観光客まばら氷雨の月曜日
そそくさと焼香 代理できた葬儀
大きなおなら九十過ぎた母達者
今日もまた一句も得ずにたそがれる
晩酌もひかえ目になる被災シーン

辻白溪子

どことなく影まで疲れきっている
見るだけでおいしく見える京料理
手相気になり病院をすぐに訪う
順を待つ年寄りの無駄話
すうどんで冷えを凌いでいる屋台

奥谷弘朗

人柄が良くて物腰柔らかい
柔らかいわりに気になる言葉尻
なるほどが素直に言えぬ訳がある
引揚げた日を人生の区切りとす
古里は打吹太鼓に酔っている

大矢十郎

ああ神戸 車衝突どこじやない
放送の送り放しへ異議がある
空爆のない豊かさへ地の怒り
奪い合えば足らず分け合えば余り
人様の物は求めず古希の春

月原宵明

流感顔のまん中だけ洗う
ポケットで小銭鳴ってるうまい酒
月おぼろ鬼瓦にも眠たい夜
ご破算は瓦礫の上に立ちつくす
半畳のたたみ一族罹災する

小出 智子

冬の雨 母との刻を密にする
旅仕度してなさるのか母静か
ある不安 家中の灯をみな点し
母危篤 身の隅々の吹きさらし
ふたりっきりのサイクルに巻き戻す

西田 柳宏子

マイホーム慌てて地震保険つけ
被災地に明るい園児の声を聞く
几帳面すぎる背骨がくたびれる
キャリアの中に目につく後ろ傷
親の目に親越す背丈眩しそう

河内 天笑

したいこととする人が勝つ浮世なり
思い切ることから春を演じよう
ペンキ屋の職人おもう紙のいろ
成人式すんでもマンガ面白い
訂正をしたら男が下がります

橘 高 薫 風

老師九十二 夫人圧死せり(悼 武田義章先生夫人)
復旧は急 土埃土埃
柳友の死に近寄り難き長田町
紋太 素生 竹二 句沙弥の御霊しずか
震災の明日は我が身と思うなり

水 煙 抄 (追加)

羽曳野市 徳山 みつこ

震度七以来見上げるヘリの音
建設のつち音がする春が来る

静岡市 中西 雅

テント住み火なく水なく涙のむ
大鍋に真心の湯気 老いなおむ

熊本県 増田 一 乗

クリントンの仲裁聞かぬ米リーグ
非課税の限度まではと積む預金

鳥取市 山口 しげる

積載量 超えてストレス溜めている
不器用で雛形どおりに生きている

川上三太郎賞作品

雑 詠 5句一未発表作品一
審 査 大野 風柳・時実 新子
一審査方法一
■1次審査として全作品を無記名で審査、上位10名を通過者とする
■10名を対象に5句1組として審査、総合成績によって川上三太郎賞1名・準賞2名を決定する。
■表彰は三太郎賞(副賞3万円)準賞(副賞1万円)とし、7月24日の柳都川柳大会席上で表彰する
■投句は4月20日着・1000円(小為替)同封で〒956 新津局私書箱15号 柳都川柳社宛

川柳太平記 (203)

川柳の群像

荻野義博

東野 大八

今から遠い遠い昔の大正五年(一九一六)、

講談社発行の面白倶楽部柳壇の剣花坊選で

今年まで在せば明治五十年 棕坊

が入賞したが、これは棕坊と号していた少年時代の義博さんだった。

その後、娯楽雑誌、新聞数紙、大正川柳に投句を続けていたが、関東大震災後、毎夕新聞柳壇「寸句集」の投句メンバーとして、選者の鈴ン坊先生が、寸句春秋社を創立したのを機に、その傘下に加わったのが東京柳界に踏み出した第一歩だった。

当時の寸句春秋社の同人は、碧水・迷作・鶴声・源坊・茶夢の諸君だったが、いずれも後に東京柳界で名を成した若い時代だった。その中で義博さんが吟社の運営、発行誌の編集を任せられたのは、当時すでにそれだけの

手腕と人望が抜きんでていたからだろう。

僕が初めて義博さんと出会ったのは、この寸句春秋社の句会が開催されていた浅草観音堂裏の貸席三ツ輪倶楽部だった。当時の僕(藤島茶六)は、初心者域を出なかったが、義博さんはすでに第一線に活躍する花形作家として、僕等修練を励む目標の一人だった。

(中略)

戦後、暫くして生活の安定を得たことから川柳界に復帰、昭和四十年には東都川柳長屋連の差配に、また、その翌年には川柳クラブから改組した川柳人協会の初代副会長に推され、その川柳活動は、水を得た魚のごとく眼をみはるものがあつた。その温厚篤実な人柄が多くの川柳人から信頼を寄せられたためだ。この中で特筆すべきは、義博さんの提唱に

よって川柳人協会が「川柳文化賞」を制定、今日まで15名の受賞者を毎年送り出していることは、この文化賞が続く限り義博さんの偉業として永く柳史に残る功績といわなくてはならない。

昭和49年隠退した川柳人協会太郎丸前会長の後を継いで二代目会長に推されたが、その運営は円満な人柄と人格を反映させて、協会員百名を越す結合体が発展し、異色ある川柳長屋連と共に中央柳界の誇りとなっているが、惜しくも病いに斃れたのは昭和54年10月27日であった。(以下略)

長文の引用で恐縮だが、以上は、昭和55年に発刊された『荻野義博遺句集追憶号』の冊子における故藤島茶六川柳人協会長の追悼文の抄録である。

「酒は適量に飲めば、百薬の長」でもあり、社会生活に欠かせぬものにちがいないが、度を過すと虎になる人を見受ける。これは愛酒家でなくて、呑ん兵衛、呑み助とかいわれ、えてして他人に迷惑をかけることが多い。そればかりでなく、大事にすれば八十歳くらいまで生きる生命も、酒のため、何にも替え難い生命を粗末にしてしまつ人もいる。こんな損なことはないと思う。もし私が酒が好きで

大酒を飲んでいたら、あるいは今日まで皆さんにお目にかかることができなかったらうと私は考える。

これは「酒」と題するこの人物の遺稿であるが、仰せのとおりご当人は、明治31年8月26日生れの江戸っ子であるから、めでたく享年81歳でその生涯を終ることができたのだ。

下戸やと記憶の底に唄一つ 義博
とあるように、この人には酒の句がほとんど見当らない。遺稿の酒の文章にも、酒はおちヨコで二、三杯が適量であつたらしい。そのかわり大のコーヒー党であつたという。

「義博さんを寡作家と思ひ込んでいた。寸句時代は別として、追悼号に抄句を載せるというので軽い気持ちで引受けたら、二十余年間に千二百句、協会の文化祭を加えると原稿用紙七十枚ほどにもなった。殊に公私とも多忙で、招かれる以外、他の句会へ出かけられなかったため、長屋連には情熱をそそぎ、常会の二、三日前は、稼業の印刷屋という仕事の合間に頭を抱えて作句に熱中されていた。

○丸・太郎丸・迷亭・芳浪の諸師に引継がれてきた協会と長屋連の代表となられてからもずっと裏方を務めていた関係で、より身近な交渉を持つようになり、日本橋に居た内で十余年間は三日にあげずお邪魔をしたり、コ

ーヒー店で落ち合ったりした日が続いた。家の人たちも、商売外の唯一のこの楽しみをよく理解されていたらしい」（白倉寿夫悼文）

「私が個人的にお世話になったのは、昭和三十七年に発行した川柳きやり七人集「壺」を作った頂いた時のことです。こちらの希望をくみとって貰い、いろいろ指示を頂き、思いがけないほど立派な句集を作った。何しろ七人の面々は、口は達者だが、手がそろわず、原稿もまあまあで、校正が出てから訂正を出すは、組替えを頼むはでこ迷惑を掛け通してあつた。その上、よそより格安で、

積立金の支払いにもムリのないようにとやさしく扱って貰った。そのご縁で、ご子息にお願いして八人集の「壺」も作って頂いた。

コーヒー組とアルコール組で、めつたに二次会をしたことはないが、会うと景気や祭り話などで減多に川柳の話はしなかったが、「周魚先生はいい人だったね」と時折りカナルを打ってくれたことが忘れられない」（野村圭祐悼文）。

「この大会でも悩んでいた出席者と投句者の問題も、義博さんの相談を受けた。出席者は朝早くから高い会費を払って、高い交通費を払って出席しているのに、投句者の句ばかり抜けている不合理、これは作品がいいか

らといえは一言もないが、それでは出席者のサービスが足りないからと思つて、出席者を第一部、投句者を第二部として別個の課題を出すこと、但し投句料を払いさえすれば第二部にも出句出来るようにしたらの進言で、この問題はめでたく解決した。最近では各地区でもこの方法を用いているようだが、実はこれは選者の消化にも、発表誌の事にも役立つている」（小谷源氏悼文）。

「義博さんが川柳協会の会長に就任されたときも、氏は決して自らを売るといふことはしなかった。あたかも水の低きにつくが如くに、ごく自然に推されて会長の座に就き、しかもその温厚な人柄によつてスムーズに重責を果たされたのである。氏は力によつて人と争うことを好まず、また裏に回つてコトを構える人ではなく、寝業師などとはほど遠い人であつた。即ち、覇道の人ではなく、正に王道の人であつた」（山本六道郎悼文）。

銀紙の星が大きい童話劇 義博
空論に終るといつも金が無い

台所の目いが動いて夜が更ける
まだ俺を呼び捨てにして父達者
交番へまだ酔っている鼻血
十代の言葉に或る日教えられ
〃 〃 〃 〃

▼次号は「神山 虚六」

柳籠裏三篇研究 (二十五丁)

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人
八木敬一・七久保博・岩田秀行
紀内恒久・西原 亮

鈴木倉之助 故岡田 甫

330 鯛片身釣ル迄まつと夫人なり

梅舎

佐藤 鯛の片身はつまり「周」の字で、太公望が文王の懇請によって、軍事・政事に参画して功あり、やがて周の宰相まで出世したことを詠んだ句。

太公望の妻は、古来、悪妻の標本とされた女で、夫の太才を見抜くことができず、魚釣りにはかりうつつを抜かしている亭主を馬鹿にしてさんざん毒つき、ついに離縁されたところある。もし、貞淑に亭主を信じて待っていたなら、宰相夫人として世の尊崇を受けることにもなったであろうものを、という意味の句

のようである。

やかましい女房をさつてつりに出ル

しかるか、をおん出してつりに出る

妻をさり鯛を半ぶんつり上る

安六礼 1

岩田 賛。この釣針、真直ぐだったという。

西原 賛。覆水盆に返らず。

鈴木・岡田 同。

331 耳と口どつちがはやひ四月也

運町

佐藤 四月は初夏、ほととぎすと鯉と、どちらが早く江戸の町の姿を見せるか、という謎

めかした句であろう。

聞たかたとへばくつたかこたへ 二二二
天に耳地に口チのある江戸の夏 玉 10

青木 賛。素堂の「目には青葉山時鳥初松魚」の句をふまえて。

鈴木・岡田 賛。

332 つめくするぞよと京の朝がへり 五葉

佐藤 悠長な京談で仕立てた句の面白さを買ふべきか。江戸の女なら、

朝がへり下女が事までがなり出し 一〇 11
すりこ木の出ルのハ安い朝帰り 傍 54

と、まことに勇ましいが、

けんくわでも相談らしひ京言葉

宝十三義 1

では、一向にしめしがきかない。

岩田 賛。既出の、

お山狂ひをするさかい勘当じや

竜三 1

と同じ趣向である。

鈴木・岡田 賛。

333 とんだ事棒ぞこなひに麒麟あひ 五扇

佐藤 春秋は獲麟に筆を絶つ、その獲麟は魯の哀公の十四年といひ、哀公西に狩りして麟を獲るとある。「呉越軍談」では、魯の大夫

であつた叔母武叔の下僕でシヨクシヨウとい

うものが、城西に樵に行き、一疋の怪獸を見た。その形はクジカ（のうじかのこと）に似

て、尾は牛のそれである。そこで、シヨクシ

ヨウはこれは怪異であらうと思ひ、その足を

打ち折つて西郊に棄ててしまつた。誰もその

名を知る者がなかつたが、孔子は弟子と共に

往きてこれを見、その麒麟なることを知り、

さんぜんとして泣いたと叙している。けだ

し、麒麟は聖人の世に現われるもので、王者

の瑞獸とされるが、今、世乱れて人倫すた

られ、これを知る者がなく、ために足を打ち折

られ、さんざん傷つけられて斃れてしまつた

ことを嘆じたものである。孔子はこのシヨツ

キングな事件をまのあたりに見て、魯国の史

書を書く決心をし、隱公の即位より始めて、

春秋一卷を作り、獲麟に至つて筆を措いたの

である。

主題句は、下郎のために、聖獸の麒麟が棒

でぶちのめされたとする史話を踏まえて詠ん

だもので、麒麟ともあるものが、とんだ災難

に遭つたものと軽く諷刺したものであら

う。

「棒ぞこなひ」の熟語を知らぬが、「棒害

ひ」つまり、棒をもって相手を打ちのめし、

傷つけ害うことの意味か。

おいしい事きりんびつこをひいて出る

一三三

へんなもののぶち殺したと西の狩

四一 27

とんだ事麒麟を棒でぶちのめし

菟 25

死なしたり是ハ麟しやとのたまハク

三九 16

鈴木 礎稿明解

鳳凰の日出やうかナア麒麟

八八 12

岡田 同 佐藤氏、得意の分野。

334 萩だの杉だのと奥羽のむつかしき 丸水

佐藤 萩は仙台萩で伊達を諷し、杉は米沢の

上杉のことらしく、何れも奥羽の大藩である

が、伊達は綱宗の放埒によつて、あわや改易

の難に遭おうとし、上杉は赤穂事件に危つく

連座して一藩の運命にも関わろうとする事態

にあつたが、何れも大事に至らずして防ぎ得

たのである。「むつかしき」はこれらのこと

を言っているのであらうか。それとも、これ

らの大藩が陰然たる一敵国をなしているの

で、幕府としても、奥羽に対する政策の容易

でないことを諷したものであらうか。

七久保 礎稿の後半に賛。

紀内 礎稿前半に賛。狂句仕立て。

青木 〓タブーの御政道に触れるので「萩だの

杉だの」と植物合せでばかし、下五「むつか

しさ」と漠然としめくくっているのも、後は

読者にまかせているのであつて、それ故、句

解も広義に取りたい。礎稿全に賛。

鈴木 萩は礎稿の仙台萩（伊達騒動・正しく

は寛文事件）、杉は秋田杉（秋田騒動）をいっ

たものであらう。いずれも宝暦以来実録物で

こつそりよまれていた。後者には「秋田杉直

物語」―「秋田治乱記実録」―「増補秋田路」

という順序で写本で行われていたという。

「秋田治乱記実録」は「伊達騒動」と共に帝

国文庫に入っている。

岡田 秋田杉のこと知りませんでした。謝。

紋太没後二十五年 本社復興四月句会

とき 4月8日（土）午後1時開場

ところ 県立明石公園内「緑の相談所」

兼題 コピー・首・線・存分・復興

会費 500円 各題3句・2時締切

ふあうすと川柳社

秀句鑑賞

同人吟 黒川 紫香

3月号から

持ち時間いっぱいあった頃の虹

吉川 寿美

精一杯働くことのできた頃を懐かしんでいるのだらう。持ち時間というのは元気が溢れて心にもゆとりのあった時代で、働き過ぎると嘯かれても平気で虹だったのかも知れない。野良猫に名前を付けている妻よ

小島 蘭幸

ときどき現われる猫にいつしか愛情が出て思いつきの名前で呼んで居られる奥さんの姿に川柳らしさを蘭幸さんは感じられたのでは。母は待つ黒い電話のある家で

菊池 トミエ

黒い電話は旧型の手回し電話機のことと思う。きちんと座って、ひと言ひと言たしかめる律儀なお母さんが浮かんで来る。娘の切った髪に気付かぬ父で居る

竹治 ちかし

母親と違って男親は可愛ければより以上、娘には夢中になる。少し髪切ったくらいで気がつかず、いつまでもこどもと思っている。

水仙が咲いた春の音など聞きましょう

榊原 秀子

春に先駆けて咲く水仙、長い冬から抜け出す音に女としての感傷が走る。素直に喜びを出しているのが良い。

祈禱する神主さんは同級生

土橋 はるお

生真面目に祝詞をあげる神主とは同級生、それも腕白仲間の人だ。その時代を思い出すとお互いに違った生業ながら面白い。何となく感ずるユーモアを、はるおさんは見逃すはずがない。

海月の骨抜いてみるのももしろい

西口 いわゑ

一体、海月に骨があるのかと考えさせてくれるこの句。痛烈に突っ込んだ作品を見せて貰えるかと思えば、こんな剋軽な句も出されるいわゑさんに頭が下がる。そのいわゑさん宅が今回の地震で大きな被害を受けられたとか、大変な事とは思いますが、一刻も早く立ち直つて元気な句を見せて欲しいものである。

越えてきた波が額に現われた

寺沢 みど里

いろいろな人生の起伏を越えて来て良きにしる悪しきにしる尊いものである。思わず眺める鏡に映る顔の皺はそれを物語っている。

この稿を書く頃は、阪神大震災が発生して早や一月になる。私の方は幸いに家屋も人命も助かったが、皆さんと同様あの恐ろしい瞬間も体験した。その後、神経過敏になり、一寸した音でも身構えるようになった。やっと通じたテレビ・ラジオで、思いもしない残酷さで被害の状況を知る。それからの句会は、どこへ行っても地震に関係のある課題が出る。体験から出たもの、ニュースその他で拾い聞いたもの、そのどれもが今だから強烈に身に伝わる。ただ、歳月を経た時、後世の人はどう感じるかが疑問で、時事吟としての難しさを感じる。でもそれらの句によって被災者を慰め励まし、災害の恐ろしさを伝え、戒めとなればそれでいいと思う。だから今でないとならない真実味のある佳い句を作ってほしい。

久しぶりに同人の皆様とお会ひした気持ちで読ませて頂いた。どれが良い、どれが悪いと言ふのでなく、川柳の本質である人間性のある句を主に取り上げ、私なりの鑑賞を書かせてもらった。

駆け込んでツンと鼻かむ冬の駅

山口 新子

とても爽やかに響く句である。寒い冬の駅に駆け込んで来て中のぬくもりで思わず滲み出る鼻をツンとかむ。それが乾燥した駅舎に清らかな音で響いた。

ときどきは何しに來たか解らない

池内 かおり

こんなことがよくある。歳かな呆けたかなと思う。大した用でもなかったので軽い自嘲で済ませたものの後味が悪い。

缶ジュース最後は軽く振ってポイ

小玉 満江

面白くも何もない日常茶飯事の一コマだが、それを見逃がさないところにこの句の面白さがある。たしかに人間というのは、何でもない動作に面白さを見つけるものである。

三代代ただ今快調同居中

山地 マツエ

三代代揃って元気に同居されている様子が生き生きと伝わって簡明瞭な句である。因みに私宅は目下四世代同居中です。

受験生の絵馬を読んでる受験生

近藤 豊子

対照が面白い。いろいろ並べてあるが、みんな薬をもの心地でいるらしい。

会議室出ると無口がよく喋り

中島 志洋

会議には欠かさず出るが、発言しない人がある。別に意見をもたないかと思うとそうでもない。決をとるときは大体、賛成の多い方に手を上げる。人によっては厄介者とか見えなない。それで一步会議室を出るとやたらに喋り出す。内気だろうが無口とは言えない。

駅の地図他社の線へはそっけない

八十田 洞庵

駅にある沿線案内図、見せたいところは華やかな彩で四季の絵を添えて書いてあるが、同じ所を走っているも他社の線路一本だけ載っている。対抗意識がまざまざと見える。

消去法 最後に残るのもみじめ

丸山 よし津

人生の行方を消去法で取り入れて互いに考えさせてくれるものがある。

水かけ不動 湯浴みさせたい寒参り

岩本 美智子

大阪法善寺横丁にある水かけ不動はいつ行っても賑わっているが、からだいっぱいにふさふさした苔が生え、掛けられた水が映えて如何にも寒そうに見える。この寒中、せめてあたたかい湯浴みでもさせて上げたいと思うのも、優しい女の気持かも知れない。

箸置きも猪という気の配り

森田 文

今年の干支は猪、出された料理の前に置かれた箸置き、小ぶりな中に画かれた猪が祝ってくれるようで一寸した気配りが嬉しい。

何とも言えぬ顔少年のホームラン

林 瑞枝

打ったボールがホームランとなって駆け戻って来た少年の顔が輝いている。「何とも」と表現された瑞枝さんの巧みな手法である。

人生はテトラポットで終りそう

木村 あきら

テトラポットのように目立たなくても、みんなのために頑張ってくれている。

ゼロからの出発ふたり潔し

正本 水客

天災、地災、水災、水客さんの場合は人災かも知れないが、突然、降りかかった災難も八十をととの昔に越した夫婦で生き残ろうとする気骨がたのもしくて清々しい。

読みやすいからワープロもいいですよ

金井 文秋

話しかけてもらうような文秋さんの句、いくら上手でも読みづらい字よりも老人には有難い。ワープロでは味わいが無いと言われるが用件次第できっちり読める方が望ましい。

水煙抄

高杉鬼遊選

秋田県

湊

修

水

阪神をひっくりかえした大なまず
その一瞬 神も仏も肝つぶす
半壊にいのちひとつを抱いて逃げ
みちのくの土にならんと都落ち
のがれてみちのくの雪あたたかい

名古屋

藤

井

高

子

縦結びで届くりボンもまた嬉し
風邪引くな寝込むな なさけ厚く着
てにをはが揺れてドラマが裏返る
アリバイは猫にお聞きと言っておく
犬ふぐりだって咲く日は凜と咲く

宝塚市

永

田

暁

風

文明の背骨砕いて震度6
家具は倒れサツシユ開かず呼び交わす
ラセン階段登れば未来見えますか
女の句が作れないのは亡妻の刑
鐘を撞く寺もやっぱり淋しいか

甘く見ていたとは思わなのだが
敵半分 味方半分いて生きる
後戻りするひまはない深呼吸
ポトリポトリと椿の首にある狂気
昔々はみんな過労死だと思っ

藤井寺市

高

田

美代子

呼びかけも返事も必死 瓦礫下
謝って癒えぬ歴史の深き傷
軽重を問われ首相の白き眉
赤紙で命鴻毛だった過去
香る花香らぬ花も美の化身

寝屋川市

瀧

本

八十八

商いの世辞を男は真に受ける
夫婦とはいいな すねたり甘えたり
値札だけびったり合わぬ試着室
炎のようなところを抱いて翔びきれず
平成の鬼は豆など怖れない

宿毛市

岡

村

千

鳥

札幌市 三浦強一

天上天下唯我独尊かたつむり
目の届く範囲で妻に遊ばされ
立春のみぎりお風邪はいかがです
宝島忘れた子らのするいじめ
震災の廃墟の庭の梅の花

今治市 塩路 よしみ

古いですが 三猿守り世を渡る
もの言わぬ母の髪梳く冷めた頬(母の死 二句)
悲しみがこみ上げてくる天よ地よ
齒科の椅子リラックスにと無理を言う
辞書ばかり積んで頭はから回り

綾部市 藤田芳郎

本意ではないが愚妻と言っておく
質よりも量に安心してしまふ
ルビーにダイヤ 淋しい人に違いない
よう言うわ同じ穴から出たくせに
矢印をなざると妻の掌に戻る

羽曳野市 西村りつえ

淋し気に白が残った五色豆
バーゲンをはみるだけにする募金箱
三面鏡左に勝った右の笑み
春うつろ母は遠くへ逝きました
吹っ切ろう涙は春に似合わない

旭川市 朝倉大柏

伴走に代ってほしい時がある
陽に顔を回し日まわり生き上手
流木も気まま自由のわけでない
啄木と同じ手だなと手を見つめ
正面の顔に正面向けて負け

今治市 村上久美子

老眼になって情けの字を覚え
許されて人も許して季はめぐる
生きざまの次は死にざま子に見せる
その場所に居たので言うたことになり
反則もあつた夫婦の九十九折

今治市 越智青園

いたちごっこやと終った落葉焚く
七人の敵にも雪が降りつもる
反対車線みんな倅せ者に見え
大地震 人ごとでない支援の輪
買うは極楽 支払地獄になるカード

寝屋川市 井上すみれ

呆けられぬ浮世の義理が残ってる
ライバルは健在 風邪に気をつけよう
三婆になって亡夫を賞め競い
ピーポーが走る包丁持ったまま
今日のウツ太郎冠者に会いに行く

尼崎市 軸丸勝巳

熊本県 大川幸子

激震にお隣さんが声をくれ
震災が変えた近所の風通し
飛ぶ家具をよけて無傷は神の加護
余震予告 心の揺れがおさまらぬ
暦は春 被災の身にはながい冬

広島市 流奈美子

四ん月の風サクラサク桜散る
新緑やわたしもそんな過去を持つ
決断のできぬ背を押す春の風
懐かしい顔は幻 里の窓
久方に父母と語らう花手桶

豊中市 石川勝

花樹園で鼻を遊ばす凡夫婦
齢の順には逝かぬこの世はあみだくじ
唐がらしひりり忘れていない思
あいづちのうまいお方に救われる
ありのまま現像液に嘘が浮く

河内長野市 大西文次

後で酒出そうな方に味方する
晴耕雨読 天にも地にも逆らわず
人違いされる心配ない黒子
頑丈が自慢の父の道具箱
有難う言うたらそれですむ話

エープリルフル嘘と思えぬ嘘をつく
一寸気取って吸った煙草にむせている
こればかりの根からモヤシが伸びあがる
その時は時さと度胸すえている

羽曳野市 酒井一壺

嬉しくて赤いネクタイ締めて行く
行く先を決めずに駅に来てひとり
裏金が動いたらしく止んだ風
孤立した男の首に風寒し

福岡市 井崎ミサ子

お人柄 惚れてどこまでついてゆく
雪が降る思わず外に出てはしやぎ
ふたありになると同じ話する
ハンドルを放し夢中で話する

宝塚市 嵯峨根保子

まだ戻る事が出来そう行きづまり
気丈夫な友一人いてたじろがぬ
行く先を結界ビシヤリ止めている
銭湯も戦気分洗い桶(震災のため)

高槻市 傍島克治

相槌のよさに味方と信じ込み
同病に話が弾む湯の煙
他人の振り見て我を直さず真似をする
順不同でも気にかかる俺の順

和歌山市 古久保 和子

初耳の顔で相手を喜ばす
損得を計算したら動けない
乱雑な部屋にも決めた場所がある
雪の降る音聞けるかな冬の宿

大阪市 三浦 千津子

哀しみでしばらく神を見失う
二番手につけて我が身に鞭ひとつ
美しく負けて明日のパネとする
急転直下 女の口を黙らせる

松江市 浦辺 静江

遠慮なくずばり言う嫁気が軽い
大声で呼びあいながらたそがれる
春間近やりたい事が目の前に
久々に捻子巻きもどす薄化粧

鳥取市 植田 一京

手さぐりの明日へ運勢欄を見る
ふる里に母いるだけで有難い
靖国に祀る美談はつくるまじ
地獄絵はゆっくり見ないようにする

倉吉市 松本 よしえ

軸足が駄目だと言われないように
半分の小さい方は母が取る
髪きつく束ね喪明けが近くなる
まむし酒そろそろ効いて来る頃だ

米子市 堀江 美月

四月馬鹿 言いたい事を言って見る
テレパシー下さい今日の探しもの
トンネルを出て約束の駅に着く
ただ生きるだけの我慢に風が鳴る

熊本県 高野 宵草

ご近所へ案山子くらいの夫です
のと飴をもう食べ飽きて風邪癒える
昨日より今朝が今朝がと寒くなる
尖り合う兵器よ地球は丸いの

八尾市 平川 幸枝

鼻息の荒い人には近づかぬ
飼いならず病の虫が動き出す
美容院変えて浮気をした気分
ブライドの椿 着地がままならぬ

宇部市 中村 三良

冬銀河寄り添う妻も少し老い
カラフルな夢に情けが多過ぎる
傾いた靴に合わせるスケジュール
三寒四温 時々鬼が茶々を入れ

堺市 谷平 照

長電話すまいと思う話し中
間違え電話 迎え頼むと言って切れ
電話では話せぬからと言う電話
子の恋ではねあがりまず電話代

海南市 谷口義男

餓死しない程度の糧があれば好い

美しく老いて枯れる日だけ望み

庇い合い本音で生きる老い二人

親の恩 先祖の恩も幻に

八尾市 井上しのぶ

転勤で厚いコートに買い替える

栄転も左遷も同じ赤い花

あれこれと遠い国から指図され

可愛げのない女だと無視をされ

久留米市 鶴久百万両

献体に妻も賛成してくれる

ゴーギャンに惹かれて海の絵を描こう

被災地に親友がいて募金する

神を売った男の骨が軽くなる

河内長野市 印藤智子

喫茶店一人で座る冬ぐもり

イライラの度に洋服一つ増え

防災のリュック背負ってへたり込む

三時です夫とお茶を飲む仕事

熊本市 北川一進

その癖が悪い貴方のちよつとだけ

人の世話する前 我が身振り返る

根っからの悪ではないと聞く調書

良い部下を持って定年楽になり

鳥取市 山宮愛恵

和太鼓の響きに迷いふっ切れる

向い風武骨の父が受けてたつ

ワープロの釣書コピー気がのらぬ

制服はお古でいいよお母さん

岸和田市 井齋一齋

満期まで寝かしてくれぬ子の学費

出る杭も打たれ上手で出世する

顔ぶれが揃い筋書読めてくる

心身の疲れ故郷を恋しがる

泉佐野市 内田倫子

すわ余震 風の揺れにも身構える

逃げた鳥 入口開けて待っている

ままごとの客は大きなぬいぐるみ

四十年低温やけどの恋でした

尼崎市 田辺鹿太

逆も真やさしくなった男達

親と子の段差を埋める夕ごはん

減入る日はとことん春を考える

紅梅をやさしく包む牡丹雪

弘前市 相馬銀波

公約の嘘が明日を遠くする

くちびるが渴いて男軽くなる

深追いが無駄骨だった私小説

雪しんしんこの温もりも消える村

河内長野市 水谷 笙子

話題ない夫と二人 フルムーン

天と地の恵みの米に文句つけ

幼稚園 はや良妻が芽ぶいてる

長命で美人の方も居られます

枚方市 前 たもつ

一病息災 負け惜しみともとれ

大地震の前で人間負けていず

電話ではみんな元気と言っておく

自販機に札を折るなど叱られる

河内長野市 柏 本靖子

折角のお洒落 気付いてくれぬ人

生きてゆくヒントは父の背なにある

無位無冠 空白めだつ予定表

サクラサク一足早く春がきた

相生市 中 塚 礎 石

グリーン車の目が疑うている身なり

愛憎が姿を変えて森に住み

本当の味方は自分一人だけ

懐はみんなを当てに縄のれん

和歌山県 中 後 清 史

神のみぞ知る終着の時刻表

土壇場で人のところが透けてくる

沁尿器科のナースと出合う照れ隠し

打ち明けてよかった風が風いで来た

岡山県 富坂 志重

スモッグに街路樹の咳聞こえそう

手にしみて頭へぬける寒の水

丸い背を映してまたまた水たまり

来る人も訪ねる人もない雪夜

大阪市 中 井 正 秀

初詣 今年も良い句作ります

賞金を買う気にさせる宝くじ

年金者 仕事のように歩いてる

追いつき駅煙草が街を行く

八尾市 村 上 剛 治

宝船つける港がうちにない

達者です進みがちです腹時計

天と地のはざまにまろく生きている

逃げて行く鬼をみとどけ戸を閉める

大阪市 勢理客 トミ子

ライフワーク全部切られた震度七

せりなずな平成七年寒い春

手も足も冷えてスーブの列に居る

スイトピー夫婦げんかは見ない振り

堺市 桜井 莊 次

投げられた謎に器量を試される

振り向けば影も形もない噂

その先を急ぐ話で戻れない

忘れたい事がどんどんたぎる夜

寝屋川市 太田 藍子

上向いて歩こう幸せになろう
終りなき自然へ間借りしてるだけ
被災地の大阪弁に救われる
ばあちゃんのと産話が終らない

米子市 足立 由美子

少しずつ私を楽にして暮らす
被災地の事を思えば乗り切れる
平凡が幸福だよと今気づく
アンテナの位置変え今年生きてみる

堺市 宮本 かりん

暖房を消し被災地の人思う
被災地の子供に笑みが戻り出す
亡父の手を背に感じている節目
こっそりと季節はすれに咲いている

鳥取市 近藤 秋星

チューリップお隣よりも先に咲き
春を待つ話題寒がりばかり居て
被災地の上にも同じ月が照る
親に似ぬ子だから親が期待する

島根県 武島 ちよえ

水仙に私の背すじ伸ばされる
涙脆いところごまかす春霞
くちづけを誤解しないで苺です
血圧に内緒よ今日は誕生日

鳥取県 岩崎 みさ江

わたくしを諫める白い停止線
母を支えるわたしは友に支えられ
不器用な男へ母性が目をさます
花が舞う空に導く風ありて

尼崎市 長浜 澄子

こんな時だから笑いが欲しくなる
急かないで歩く私だけの時間
公園のシーソー跳ねたまま暮れる
ポケットベル時は流れて無口になった

仙台市 小寺 九

有難き単身赴任とも言えず
雪景色 世間がかくも白ければ
言い訳ができてうれしい冬籠り
お互いに思い込んでる夫婦愛

羽曳野市 芦田 絢子

この鳩は神戸逃れてきた鳩か
掘りおこす土から春が匂い立つ
無防備にすぎるあなたも私も
受話器からインフルエンザうつりそう

今治市 渡邊 伊津志

座り良い重しの石の黒光り
男でも女でもない年になり
潮満ちて来るぞと思う蟹の穴
コースから外れて海が見たくなる

西宮市 古谷 ひろ子

地鳴りして科学神話が囁かれる

被災地に灯をつけてゆくボランティア

あの日から私も優しくなれました

避難して来た雀の群も餌を分け

和歌山市 木村 親路

私は風燃える火の玉持っている

名医かは知らぬ有名医ではある

いい年になっても首が座らない

玉砂利を踏んではいるが無神論

摂津市 木下 道子

いざという時もお役所仕事です

洗って干して洗って日脚伸びる庭

ミニスカート すみれたんぽぽ 犬ふぐり

包装をせずにハートを贈ります

大阪市 和田 和風

福は内 鬼もおいでよ寒かろう

窓際は鬼が仏になるところ

犬が鳴く今夜も余震ありそうな

兄の墓倒れ地震でまた戦死

和歌山県 中村 君枝

双方が本音ぶつける濃い絆

やりくりに一円玉も助成する

温もりで粉雪とけるフルムーン

手短にお願いします御挨拶

寝屋川市 後藤 黎之助

川柳塔無事か無事かと拾い読み

激震に学んだことが多過ぎる

舞う雪に入江たか子の活字みる

ときどきは錆を落としてに孫の供

芦別市 斎藤 房子

ふるさとの風に溶けゆく夜叉の面

罪深い手を洗っても洗っても

らくがきの傘に入りたいひと一人

大吉を胸に始発の汽車に乗る

大阪府 澤田 和重

一寸だけのつもりが長居してしまふ

ときめいた脈をナースに計られる

検査結果どうあれ覚悟きめている

たつぷりと保険あなたに掛けておく

八尾市 生嶋 ますみ

駄々っ子へ玩具のように買う破魔矢

仕事より衣裳話題の事始め

長い修羅やつと点滴はずされる

サッカーへ熱中してる内気な子

尼崎市 尾宮 弘治

七いろに足らぬがキレイ孫の虹

愛と愛 足したわが子に疎まれる

嫁ぐ娘に諭す男の放し飼いの

五千余の遺影に祈る写経筆

鹿児島 大山 舞鳥影

助手席で無免許の妻指示をだす

上役の影をうしろで踏みつける

大江文学いそいで買って数ページ

松江市 松本 知恵子

寒い窓開け節分の父の声

震災の無事の電話に声もなく

震災になお原発がある不安

寝屋川市 宮崎 菜月

方位感なくしリュックの水運ぶ

アラジンのランプで瓦礫戻るなら

青テント飢えた話を語り継ぐ

枚方市 森本 節子

何事もなかった墓のたたずまい

枕もと補聴器 眼鏡とり揃え

被災地に思いをさせて豆を撒く

堺市 小西 小雪

これからは妻の名義にしておこう

主婦と言う身分証明などいかが

貸金庫 条件あわず引き下がる

泉佐野市 稲葉 洋

着ぶかれて十二単と洒落ている

千万の字句も尽くせぬ港都の苦

お見舞の電話ひとりでない命

堺市 吉本 菁風

世の中は差を優劣として眺め

幸せになる幸せな汗を出し

誠実に同じ目線で話し掛け

鳴門市 八木 芳水

寄り道が好きひとり身の方向舵

野良犬がめまいしてくる銀世界

川砂利の丸みに習うこと多し

高槻市 小林 一閑

避難所のコンクリートに冬痛し

外国の援助 今度は受ける側

水道が出た浄水器やめにする

徳島県 安宅 美代子

方程式少しくだけてみませんか

どの笛に今日は踊ろか四面楚歌

よそのゴミ運んで村を埋めに来る

今治市 渡辺 南奉

この指にとまれ淋しい者同士

大震災 岡目八目かしましい

もつともな話で欠伸ばばかり出る

神戸市 向井 泰子

皿茶碗 見事に割れた大地震

余震あるこたつに家族まるく寝る

塩むすびこんな美味しいものはない

八尾市 村上 ミツ子

無記名のアンケートにも身がまえる

豊かさに慣れてひもじさ忘れてる

根ほり葉ほりつまらんことを訊きすぎる

東京都 松本 冬 蛇

禁煙をしてはつきりと嫌煙派

故郷は遠きにあつて大渋滞

買い溜めた健康器具は粗大ごみ

大阪市 川原 章 久

被災地に咲く仁侠の小さい花

動物園引く掌冷たや孫の守り

雪霏々と河馬の顔やら象の目に

和歌山市 吉村 さち子

ここだけの話とつきに耳が立つ

意地張って補修工事が間に合わず

人が人を救って今を生きている

和歌山市 津村 武 春

震災へ追い打ちかける流行風邪

死にたいと言いつつ今日も医者通い

政権は欲しいし党は守りたし

高槻市 江原 秀 夫

願わくばもう一巡り猪の年

ボランティアに代えてせめても義援金

水百本も積んで下さい視察へり

大山市 森 正

争って行く当てもなくぶいといと外

震災へ心ばかりを今日の無事

寒いので老いの明け暮れもの忘れ

河内長野市 橋本 弘 美

家直す予定はやめてフルムーン

ワイドショー地震に話題さらわれる

お目出度い男とこの世添い遂げる

唐津市 山門 幸 夫

焼け跡のかわらの墓標傷ましく

やきもきが終りしみじみ怖くなり

伏す老妻と芋粥する寒の朝

唐津市 山門 タ ミ

雀二羽何を聞いたのカカシさん

影法師歩く癖まで心得て

護岸出来 蟹も住めない川になり

泉佐野市 河原崎 礼 子

安否問う電話のベルは鳴りやまず

また地鳴り揺れる前から身構える

原発に不安消せない大地震

松江市 松浦 登志子

こまごまと男が動く家系です

銀杏をむいたそばから食べる人

食っては寝 起きてはしゃべる口を持ち

倉吉市 山中康子

震度七 素敵な神戸うばわれる

災害に笑みをのこして生きてはる

積雪にゲートボールが弾まない

宝塚市 飯西ミサヲ

地震など知らぬ顔してびわの花

あの日から風の音にも身構える

十日振り初湯のこちもらい風呂

堺市 以倉菜々

関西の根性いまに見てなはれ

口止めの話そろそろ歩き出す

財布だけはいつもスリムにしてくれる

兵庫県 円増純子

忘れてた味 干柿の甘さかな

ボタン一つはずし気楽に生きている

不況風せめて絵馬には夢を書く

鳥取県 奥谷彩子

寒翁が馬ほどほどの幸でよし

吐き出した愚痴 真つ白な雪が消し

孫台風去って淋しいおもちゃ箱

和歌山市 木村初子

被災者に申しわけなし熱いお茶

流れ雲ふと追いかける癖がある

六感で決めた未来はまだ続く

広島県 森川抜智

変な名の政党ばかりまとまらず

メモにする広告の紙取っておく

面白いドラマCM邪魔をする

大阪府 亀井円女

入院も満更でなし輪の温さ

あとけなやナース居眠る午前四時

気散じに笑いを交わす四人部屋

島根県 今川三津江

予報には無かった雨が今日も降る

恋人のように炬燵が呼んでくれ

春一番やる気の猫が爪を研ぐ

岡山県 大石あすなろ

亥の年へ一本道の歩を刻む

続編もあなたの貨車で山越える

不協和音少しわがまま過ぎました

寝屋川市 太田とし子

鬼にやる豆のかずでも数えよう

煮え詰った話に金のない同士

避難地の宝子供の笑みがある

香川県 堤くに子

あの声は隣 今夜も午前さま

石地蔵カラスが噂告げに来る

助手席に私知らないイヤリング

唐津市 福島 紀一

被災者は冷静 私には出来ぬ

被災地に春が来いよと豆をまき

血圧が高いと医者の怖い顔

唐津市 浜本 治幸

下戸上戸 会費は同じ酒を酌み

なるようになれと胃カメラ飲んでみる

ごみ袋その家の文化物語る

唐津市 山口 ふさ子

眠れぬ夜ラジオに添い寝してもらい

地獄絵は天の怒りのように見え

生きていた事が不思議と友の声

大阪市 中橋 恵美子

被災地へリュックに愛を詰めて行く

一匹の鼠と知恵を比べあう

マニキュアを消しておしめを洗ってる

静岡市 増田 扶美

灯を消せば静かな雨の音

木簡の文字が歴史を変えました

真実が言えず姑の日向ぼこ

静岡市 松下 正枝

人生は時の廊下のひた歩き

病棟の夜の廊下は遠く見え

冬枯れを色どる運命寒の梅

静岡市 三浦 つね

優しさが寿命を延ばす糧となる

嫁姑 貧乏性で馬があい

神様はどうなさるか絵馬の数

高知県 百田 幸

嫁さんに無理な期待はせぬつもり

開発で少女に戻る川がない

やんわりと言えばやんわり聞き流す

大阪府 原 美恵子

心配をするのが子には重荷らし

忙しい時に前置き長い人

赤面症 若さと共に消えました

熊本市 遠山 夏生

その奥の瞳が澄んでいる花職人

ガンでないだけで病気が治りそう

謡曲の本そのままに七回忌

福岡県 本田 忠男

手も足も貸せず復興祈るだけ

店しめた訳を他人が訊きたがる

豊作を囁す値下げの計りごと

鳥取県 橋谷 静江

丈夫だけ取りえの母が寝ずの番

毎日のドラマへ年を忘れてる

お舅は嫁にやさしく慕われる

尼崎市 中澤 向 西
その昔 栄えた頃の門構え

かあさんが子の工作へ腕まくり
奇跡などない一生がつまらない

和泉市 中川 楓

地震から夫婦の布団近づける

春隣 虫と出番を待っている

ループルで呼び止められた大阪弁

兵庫県 上月 梅村

四方八方探し回ってもとの位置

いたわってやらねば妻の座がもたぬ

仏壇に春風添えて花を活け

大阪市 池田 一男

初日の出 屋根が邪魔して出てこれぬ

鬼は外 貧乏神だけまだ残る

梅見行く枯れた心のリリシズム

兵庫県 倉垣 恵美

地下からの訓示にしては厳し過ぎ

あたたかいままでとどけよにぎりめし

いまが大事いましかできぬことばかり

愛媛県 久保 良子

負けるものか酸素点滴ついて来い

むこはんを頼りに息をしています

ころりと死ねるおくすりないかしら

離段の愛は昔のまま生きる

沙羅の花 傷のふかさは妻の愛

生きぬいて浄土の風に遠くいる

高槻市 芦田 静江
熊本市 岩切 康子

わたくしの時間をくれる電気釜

先生も行儀を崩す花見席

投石の波紋は憂さを淡くする

熊本市 宇野 照代

雪月花 飲む口実に事欠かぬ

さらさらと写経してますボールペン

母逝ってからの実家が遠くなる

柏市 上鈴木 春枝

点しても消しても私だけの彩

とりあえず儲け話は聞いておく

好きな絵に出会えた雨の美術館

富山市 島 ひかる

初めての医者がやさしく診てくれる

健康がとりえ自慢の顔が泣く

明日は立春 病気に負けてなぞおれぬ

香川県 山崎 はつ恵

時々浮いて酸素を補給する

持ち上げた漬物石に負けた腰

白黒の石に時々ある迷い

松江市 佐野木 みえ

一呼吸入れて気の張る電話掛け
娘の電話やつぱり風邪を見破られ
絆さえ疎ましくなる春の宵

出雲市 西尾 和子

喪が明けてもう聞かれない亡母の声
寒修行 無病息災祈ります
年賀状届いて友の無事を抱く

出雲市 加藤 スズコ

小走りで嫁が助ける登り坂
走り書き自分で書いたはずなのに
今日からはA子で通らない二十歳(孫成人)

八尾市 與田 明

育毛剤すり込むたびに毛が抜ける
手となって足となりしが首にされ
よく書けた子の作文に恥をかき

茨木市 島元 ふみ

忘れてた勿体ないをくり返す
半世紀生きた証が灰になる
朝シャンの孫も我慢のガス停止

寝屋川市 富山 ルイ子

長幼の順序緩んだ自己主張

明日はないものと思って今日を生き
一病を持ちボチボチと無理をせぬ

鳥取県 山内 芳江

百点の靴がスキップして帰る
隠しても写真に年齢が出て困る
どんぐりを拾う子もなし塾通い

鳥取県 山本 正光

天上の閃光鬼が居るらしい
政治家はいいなきれいな街で住み
寝たきりと痴呆にだけはなりとない

鳥取市 岸本 宏章

父がいた駅も無人化 灯が消える
タンカーが海よりでかく見えてくる
掘り出した埴輪が何か言いたそう

箕面市 木村 天弘

不安に泣く被災の子供抱いて寝る
痛ましい焼け跡 土とともに泣く
救援時 切り札だったヘリコプター

羽曳野市 川田 晋

見るつもり結局捨てたスクラップ
繕いのきかないほどに綻びる
俄雨 破れ傘だが借りて出る

有田市 生馬 芙美子

無風地帯で勤もにぶって来るばかり
捨てようか やつぱり元の場合へ置く
災害へ詫びたつぷりの湯につかる

尼崎市 岩倉 キク子

出つくして底の見えてる知恵袋

春夏秋冬 皆それぞれの風の顔

温故知新なんで古きを捨てたがる

島根県 菅田 かつ子

六十は六十なりの美しさ

横文字で少し気どつてみたものの

手の届くところへ電話を置いてあり

香川県 辻上 よしみ

春風が浮気心を連れて来る

コップから顔を出したい水中花

つまずいた石に我が身を振り返る

鳥取県 高尾 京

お灯明 産湯わかす火 家焼く火

水電気 我が家で食べる有難さ

震災で隣近所の和が生まれ

豊中市 藤原 桂子

終の日はシナリオどおり迎えたい

ようやくにひとりぐらしに慣れて冬

日々新たな鉢からのぞく春の顔

寝屋川市 籠島 恵子

にわか雨のおかげで買った派手な傘

すてゼリフ粋な言葉が見つからぬ

行ってきますに軽く手をふる電話中

尼崎市 河津 正治

パレットのおわりの彩で絵を生かす

方便の嘘の化粧が濃いすぎる

立食いそば発車時刻を読んでいる

尼崎市 野瀬 昌子

披露宴 父が涙の祝い船

楽してる訳でないのに肥えている

あと味の悪い話に蓋をする

富田林市 山原 昭水

寝言でもファイトファイトと言っている

幼稚園 兎 アヒルもお友達

伊勢の宿 夫婦げんかは河内弁

島根県 福岡 博利

うぐいすの笹鳴き喉をいためたか

炊事洗濯交替してとはまだ言わぬ

支持政党あった昔がなつかしい

橿原市 西本 保夫

余震から遅寝早起きまだつづく

まだ確保したまま地震非常食

消火栓 私の家の前にある

富田林市 欄 智久

無理するな万歩計にも注意され

春彼岸 亡き妻に会う一心寺

散髪屋の鏡の奥にバスが行く

母と子の手帳に父の顔が無い
老い二人仲よう喧嘩しています
人の住む地球が宙に浮いている

尼崎市 吉 永 伊三郎

ストレスが娘のわがままにシヨートする
食欲も出て大部屋に戻る朝
深呼吸 構図広がる空の青

大山市 山 田 津多江

冬眠の内に芽吹いた露のとう
雪の日は山の木立と共に耐え
哀しみの中に希望の彩が揺れ

兵庫県 西 井 つや子

被災地を見舞う陛下もジャンパーで
水郷をゆく船頭の国なまり
蟹ツア―鍋かこむ間の主婦無口

大阪市 中 田 あい子

そつとゆれつんと立ってる芒かな
ボケなどと誰が名づけた木瓜の花
落ちてまで二本松葉のVサイン

香川県 高 橋 たみ

ライバルが増えて広がるいばら道
片チビの靴が浮気で外へ向く
半分が欠けては困る老い二人

香川県 田 中 ふみ

うれしさも悲しいこともとんで失せ
呑気です火山の上であぐらかき
大自然なめたらあかんつけがきた

泉南市 坂 根 流 水

遠慮など美德と思い損をする
逝きし子の顔によく似た辻地蔵
安請け合い火の粉を被る羽目になり

寝屋川市 坂 上 高 栄

十二月八日 私の誕生日
知らぬ振りアンテナだけはピンと張り
三面鏡どの顔もまあ老けたこと

尾張旭市 三 浦 きぬ

捨てる花やさしく拾う人もあり
恋の虫はつばつ春へ動き出す
遠き人心は近く居て安堵

静岡市 沢 田 きん

一円も粗末に出来ぬ汗の金
被災地の疲れ切ってる娘を案じ
欲を捨て上を見なけりや苦にならず

静岡市 永 倉 柳 華

大笑いやがて悲しくなるわたし
胸の火をポストへ入れて待つ長さ
収穫も機械任せの世に変わり

静岡市 片 平 静 代

静岡市 佐藤次枝

取り敢えずその場逃がれのいい返事

度忘れた名前に顔がアップされ

健康で貧乏なんか気にしない

静岡市 小木久子

自尊心われとわが身を追いつめる

腹割って意気投合のよいお酒

風邪の神わたし素通りしてくれぬ

和歌山市 森口美羽

制服を着るとシャキツとする私

振り分けてなお忙しい予定表

楽しめて証拠のような肥満体

富田林市 藤田泰子

見かけより甘くはないよ冬苺

尻尾振るお稽古もする下り坂

終止符は自分で打てぬ冬景色

鳥取県 原みさを

日めくりに今日の怠惰を叱られる

横文字のシャツの乳房をふくませる

あれが火矢だったとはつゆ気がつかず

富山県 高畠五月

大正のしきたり一歩さがります

どぶろくの匂の好きな自在鉤

どう見ても反射の悪い鏡です

大山市 城山道子

B面はやさしいパパで丸く住み

チヨコひとつ買物籠の隅に入れ

厄除けの福豆もらい寒が明け

沖縄県 杉谷一栄

ぜいたくなダイヤ誕生石だから

直接をさけて伝える事がある

いいしつけされてた犬で拾われる

今治市 野村清美

若い気へもう年ですぬ孫が言う

空缶がころころ風になぶられる

良い方へとれば心の傷が癒え

米子市 木村春枝

湯けむりのむこうの美女が掴まらぬ

逆風に火種の一つ走り出す

未来から風だんだんと強く吹く

米子市 鹿島 蘭

続編は今度生まれた時にかく

湯豆腐をくずし話の口をきる

思うことボンボン キヤッチボールする

米子市 池尾保子

誘われるゴルフも酒も世渡りか

年金がそろそろ底をついてきた

あすは検診しつかり御飯食べておく

唐津市 岩崎 實
乗りこえてふんばれ明日の陽が昇る

大丈夫かかる電話に手を合わせ
次からは勝手口より入られよ

唐津市 市丸 晴子

震度七 孜孜営営を踏み砕く
重い被害 軽く笑って告げる友
額縁をはみ出して書く孫の夢

唐津市 松本 圭一

晴着の娘 足の運びに地が出てる
寒い夜は温めあつて夢を見る
壮年が祭り準備でまた浮かれ

島根県 森 茂美

震災の瓦礫に人は小さすぎ
春炬燵 茶飲みの友の足に触れ
うみねこの雌呼ぶ声や島は春

出雲市 中村 トク子

宝くじ夢のかけらを追う師走
万両のうつ向き加減ルビーの実
おみやげの伏見のお酒ひとり酌む

岡山市 山磨 行子

一番でないが元気がとりえの子
記念写真 一番まえにいる私
覚悟して出ればさほどでない寒さ

尼崎市 森 安夢之助
看病のお粥が煮えて夕暮れる

普通の子 普通に育てて恙無い
重箱の隅をつついて迷いだす

和歌山市 山根 めぐみ

勘ぐって太い心を細らせる
私がわたしを裁く秘話がある
便利やの私で他人につかわれる

日立市 加藤 権悟

柳友のその後の無事が気にかかり
愛憎の雪の螢が闇に舞う
パソコンの指に少年風わすれ

高槻市 乙倉 武史

起き抜けに地震吃驚しましたわ
震災の自粛 義理チョコ槍玉に
飲む話 誘うと飛んで来る男

河内長野市 妹背 尽呂久

しぶちんとしぶちんがする長話
殊更に時間をかける上握り
レントゲン結果待ってる無表情

静岡市 大村 正雄

貧しくも明るい妻の片えくぼ
人生のたそがれ涙脆くなり
雪嶺の向うに春が待っている

羽曳野市 安芸田 泰 子

聞き流す事にもなれて春の風
福耳が旨い話を聞きのがす
呆け封じ念じお寺へ忘れ傘

藤井寺市 楠 昭 子

漬物の樽底見えて春が見え
そばにいる知恵はだれだろ電話口
真心が届き小さな活字見る

鳥取県 武 田 照 女

愚かにも味方の掘った穴に落ち
砂丘から父母の足跡消え去らぬ
一羽ずつ春へ飛び立つ千羽鶴

岸和田市 亀 井 皎 月

軍歌には上手下手などなかったが
ねぎらいのひと言がなく張りが消え
ループタイ外して今日は山歩き

寝屋川市 森 茜

真実へわたしに欲しいのは勇氣
悪友が一人もないのもさびし
うす味が好き私もうすくなる

尼崎市 立 谷 勇 次 郎

見送りの影もまばらな都落ち
バスが揺れ美人の方に僕がゆれ
マイルドな煙草に替えて倍も吸い

兵庫県 玉 田 三 重
マタニティー着るのも嫁の晴れ姿
もう少し汚れを拭いて弥陀に会う
下手すると袋叩きに遭う予感

米子市 永 井 三 津 子

山陰の冬空何故か物悲し
自然の掟それは良識ではないか
大金に家族の轂軋み出す

(前月分) 大山市 森 正

理屈抜き孫七人の祖父となり
馬鹿言うな俺とお前は夫婦だぞ
金婚は仲よいばかりでは来ない

大山市 田 中 太 音

待たせては悪い和尚は気短だ
まだたんと世間さまには借りがある
和尚逝く浮世に壇家おいたまま

出雲市 川 島 和 歌 子

地図辿り旅のプランに夜も更ける
厳寒も溶けてうれしい寒椿
平凡な暮しの中に梅一輪

寝屋川市 北 岡 波 留 吉

土地の歌 教えてくれた箸袋
割箸が客の育ちを見抜いてる
真直ぐに歩いて蟹に笑われる

島根県 槻谷 仲子

被災地で水の尊さ知らされる

目の上の瘤 嫌われる叔母の口

一人言愚痴の出で来る台所

十和田市 阿部 喜久江

男ならじたばたするなみつともない

世話好きな嫁は我が家の宝物

欲に目がくらんで落ちた落し穴

佐賀市 古川 かずのり

条件は同じちがいは心意気

七十を越しても楷書ばかり書く

老人のガッツポーズは笑えない

鳥取市 田中 友子

朝食をぬいて五分の夢を見る

温室を出て大空へ息子翔べ

じいちゃん之恩賜の時計はなさない

和歌山県 藤井 春子

あたふたと朗報持ってやってくる

玉子酒吞んで流感のりこえる

さり気なくこぼした言葉覗かれる

羽曳野市 麻野 幽玄

古い二人出前のフグで送る冬

祈りまだ足りぬか聞けぬ神の声

一人寝のベッドを覗く明けの月

大山市 早川 盛夫

人付き合い苦手で猫と熱帯魚

豊かさがその根底にあるいじめ

東京都 清原 悦子

スタートに立ってゆとりが少し見え

まわり道そんな二人に届く幸

兵庫県 安達 厚

亡父のことあって胃カメラ飲んで

爺ちゃんは我がままだから叱られる

唐津市 野田 旭恒

居心地が良いか越冬燕達

風邪でまた薬が二つ増えました

兵庫県 北川 とみ子

割り切ってしまうば灰にする手紙

出る幕がなくとも老いの位置がある

島根県 今若 章子

お正月帰るつばめの宙返り

ごめんねは夫が向こう向いてから

河内長野市 木太久 正一

一日を無為に過して草臥れる

癌を病む友の見舞に躊躇する

松江市 安食 友子

蛍光ペンで引かれた本をお借りする

替え玉で落馬のシーン見せるだけ

大阪市 一本勇太
オーブニングいつも派手だよこの僕は
軽い罪一つ残して髭を剃る

岡山県 国米きくゑ
故郷の川で心の垢洗う

新潟県 高野不二
兔小屋守る主婦にも春の風

留守電に言いにくい事言うておく
健康法それぞれ酒もその一つ

米子市 小塩智加恵
二十五字 孫の便りを三度読む

時々腹の虫連れレストラン
鳥取市 谷口侑里

強くても女だけでは生きられぬ
松の内テレビ観ながら眠ってる

鳥取市 津村静枝
うれしさを小出しに胸は溢れそう

明暗は活断層に引き裂かれ
吹田市 西岡豊

ネクタイを外してバーの顔になる
飲みだすと家も時間もない女

東大阪市 松山隆
何取りに上がったのかな踊り場で

フラワーに冬ぎれの季語薄くなり

和歌山県 村中悦男
見通しがたって話を聞く余裕
余震かと窓うつ音におどされる

島根県 三代朝子
それぞれの出番待ってる朝の靴

クラス会ラフなジャケット着ると決め
相互扶助 高価なつけが従ってくる

島根県 松本聖子
ファッションショー フットライトに目が回り

兵庫県 森脇和子
深呼吸 働き蜂の小休止

勝ち負けは二の次だとは思っても
西宮市 池田善守

人の背に願いごとする初詣
やがて効く漢方薬がじれったい

千葉県 大川晩翠
チョコレート義理と欲とがからみ合う

運が悪い何でも籤で決めるとは
岡山県 土居ひでの

照る日曇る日 夫婦の鈴の響き合い
木枯しをにげて蓑虫ぶらさがり

高槻市 庄野澄子
十歳もごまかせるなら恋をする

歳月よ急ぎすぎてはいませんか

麦遷の屏風 菩薩のひれが舞う 高槻市 執行稲子

飼い主を瓦礫の下で待つ尻尾

兵庫県 酒井靖子

被災地の生活見つめた失語症

和歌山市 楠見章子

グルメ旅止めて福祉へ足が向く

春雨もこうべ上空思案する

見え見えの嘘にころりと騙された

摂津市 井上源一

常識が時どきボタン掛け違う

鍵抜けの終りの鍵が戸惑わす

枚方市 濱田良知

縄のれんさびしがり屋の席がある

シーソーゲーム妻がだんだん重くなる

出雲市 浜圭三

降り立った無人の駅が好きだから

復興を唯々祈るばかりです

宝塚市 黒台伊佐武

気懸りを語り明かして白む朝

思いきり泣くもまたよし晴れるなら (阪神大震災)

弘前市 今生恵子

猫がやたら外出しだす春二月

さらさらと砂が崩れる夢の城

避難所の主人を犬が探し当て 豊中市 月原方郎

震災に歩く健康身につける

岡山市 中嶋千恵子

幸せに見えて心は寒い冬

雪どけににつこり笑う紅椿

尼崎市 萩原しげる

なまかじりしたまま時が過ぎてゆく

ほどほどがよいと思えるようになり

豊中市 みきわきみ

価格破壊 売れる値段まで下げた

税金は避けたし美田残したし

砂川市 武田正美

修正の効かぬ軌道をつつ走る

急用へ留守番電話とは何ぞ

米子市 服部朗子

ぬかずいて静かに今日をふりかえる

蟹を買うそのとも言わず送らせる

大阪市 松永会美

北の涯はまなす赤く母の故郷

川のない橋に車が流れゆく

尼崎市 向井末貞一

着飾った孫と嬉しい宮詣り

祈る母まねてもみじの手を合わす

姫路市 福島 姫女

大寒の冷えにも耐える震災者
復興へ明るい顔の魚屋さん

出雲市 荒木 恵美子

友の声爽やかに聞く山の里
一言でわたしの心弾んでる

姫路市 服部 一典

寒風へ一枚脱いできみに着せ
途中下車してみて人生幅ができ

島根県 岩田 三和

花崗岩の中に県庁築こうか
新世紀を生きぬく文化モデル都市

鳥取県 橋本 孝原

正論で騒ぐ終りは見えてくる
崖っ淵そわそわしてる馬鹿な俺

兵庫県 中野 とよ子

歳の暮れ心に虹をかけてみる
にらめっこ財布の中味には負ける

高知市 桑名 知華子

自転車を懸命にこぐ母を見る
知能指数下げて話をしてくれる

大阪市 今西 静子

少しずるく脇役などをしています
話し合うひとつもないこの空虚

泉佐野市 大工 静子

ばけていず見舞客より記憶よし
ストープを入れてシャボテンと遊ぶ

大阪市 宮本 信幸

まっとうに生きたか天よ答えませ
結果よしあの反対はなんだった

唐津市 入江 喜久亭

屋台酒ピッチの早い飲みっぷり
たつぷりと湯舟につかる二日酔い

大阪市 平井 露芳

似ていると猫が聞いている猫の真似
奥尻も普賢も愛の義援金

和歌山市 和田 美寿子

絆だけしか残らない夫婦仲
金魚は目高と住んでけんかする

羽曳野市 山本 たけし

書に飽きて十時半睡 舟を漕ぐ
土の道踏んで安堵の旅がえり

交野市 山川 日出子

大地震ライフラインの有難さ
震災後 僕もうやめる絵とピアノ

池田市 藤井 計

あいまいな返事で銀行ガードする
年女 千支は千支でも一回り

鳥取市 近藤 ふうこ

おひる寝の赤ちゃんに舞う花吹雪
ふるさとを友に送ろう蟹一枚

大阪市 尾崎 黄紅

倒壊を掘る手に生きている合図
震える日 肩抱きあって老い夫婦

貝塚市 池田 寿美子

平和呆け危機の手配はおくれがち
避難所の鬼 団結を呼びかける

大阪市 鈴木 トヨ子

お雛さまピンクの靴を履かせたい
墓詣り無垢の心になってくる

大阪市 乾 哲静

もうは未だ涙で論す大地震
この老いによく似た孫へ未来像

鳥取県 藤山 弘子

子沢山みかんの山もすぐ消える
幸せを味わいながら食事する

岡山県 福原 辰江

旗持つて風になびかぬ夢を抱く
真実を話してからの距離が出来

天理市 飯田 昇

バレンタイン軽い気持で待ってます
さりげない大阪弁に含む毒

和歌山県 上岡 正直

箱庭の論理及ばぬ大自然
結局は人の支えて生きている

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

運だろっパイオリズムは当てにせず
凍てついた身体解凍して上げる

池田市 木村 一笛

揉み手する仕草は金を借りるとき
家中は毎度雷落ちている

豊中市 岸田 知香子

被災地に戦後焼跡だぶらせる
節分の豆に再起の願い込め

青森県 諏訪 柳々

嫁不足 四十男の小正月
アメリカが見れば日の丸白く見え

出雲市 園山 かおる

子の入院つき添う人がバテぬよに
政界も多少目ざめた震度七

和歌山県 杉山 精子

母という灯台がある子らの海
安楽死を思っ桜の木の下で

鳥取市 杉本 孝男

趣味の会 手持無沙汰を埋めに寄る
雑念を払う座禅の足しびれ

沙湖抄

小出智子選

棚など倒れる中に震撼する いのち

宝塚市 永田 暁風

余震なお大地の怒り解けがたし
冬の廃墟に死者たちの長い行列
虚構の街崩れて冬の底が抜けた
昔を今に万年筆を買ってくる

尼崎市 田中 薫

航海を終えて静かな海にいる
表現のさまざま被災地の焚火
雨洩りの音を今でも忘れない
鈴付けた猫がコタツの守りをする

八尾市 高橋 夕花

笑い袋を繕いたくて冬ごもり
校門で迎えてくれる雪達磨
迷ってるまだまだ若いなと思う
少しなら飲んでもよいと言う名医

富田林市 藤田 泰子

しあわせな姉妹だったか母と叔母
魔法がとけて二人は二人だけになる
着膨れていつまで見てる日本海
古典読む人恋う心まだ捨てず

尼崎市 春城 年代

五所川原市 齊藤 嘉
出雲市 尼 れいじ
黒石市 相馬 一花
鳥取県 新家 完司

富田林市 藤田 泰子

大阪府 西出 楓楽
青森市 工藤 甲吉
藤井寺市 高田美代子

大阪府 西出 楓楽

東大阪府 今岡 貞人
守口市 森川まさお
八尾市 宮崎シマ子

大阪府 今岡 貞人

播り鉢の底這い上がり這い上がり
とんでもない事を賽銭箱へ入れ
輪の中でみんな赦してくれている
夢が燃え尽きる日何歳ぐらいかな

大阪府 今岡 貞人

息吹いてたしかめて買う風車
金魚鉢泳ぎ上手がいて困る
墨をするときから墨に試される
夫婦百景男結びがゆるくなる

大阪府 今岡 貞人

沖に出るまでは傍観者でいよう
大地震小さな悩みふつとばす
被災地より生死を分けた姉の声
お天氣の都合でブライドが揺れる
年金がやっと支えている父権
親類とは名ばかり被災へ吾が非力

鳥取市 武田 帆雀
松原市 小池しげお
岡山県 土居ひでの
砂川市 大橋 政良
横浜市 菱田 満秋
豊中市 辻川 慶子
米子市 林 荒介
羽曳野市 吉川 寿美
和歌山市 木本 朱夏
大阪府 日坂 秋子
和歌山市 田中 みね
和歌山市 福本 英子
和歌山市 青枝 鉄治
寝屋川市 宮崎 菜月
枚方市 森本 節子
高槻市 守先 伸子
鳥取県 江原とみお
羽曳野市 芦田 絢子
富田林市 片岡智恵子
西宮市 山本 義子
和歌山市 田中 輝子
出雲市 吉岡きみえ
弘前市 村田 善保
鳥取県 土橋はるお
羽曳野市 田中 透太
寝屋川市 坂上 高栄

他愛ない話で石段おりきつた
恋文は丸いポストに落としたい
親へ子へ不孝海鳴り止まぬなり
再会に重いコートを脱ぎ捨てて
鬼に会い仏に出会う震災地
大丈夫か両となりから声かかり
薔薇園を出たいと薔薇の独り言
無為無策くもりガラスを拭いている
蛇口から今日のリズムが流れる
墨すつてたばこ一本燻らせる
万策が尽きて環状線に乗る
福笹もたわなに結ぶ願い事

大阪府 日坂 秋子
和歌山市 福本 英子
和歌山市 青枝 鉄治
寝屋川市 宮崎 菜月
枚方市 森本 節子
高槻市 守先 伸子
鳥取県 江原とみお
羽曳野市 芦田 絢子
富田林市 片岡智恵子
西宮市 山本 義子
和歌山市 田中 輝子
出雲市 吉岡きみえ
弘前市 村田 善保
鳥取県 土橋はるお
羽曳野市 田中 透太
寝屋川市 坂上 高栄

その時は貴男の足になる覚悟
保険金満期で妻と乾杯す

盲腸の孫と風邪の祖母との長電話
旅からの葉書少々詩人めき

夫婦には見えぬが他人にも見えず
いつの間に棚から落ちていた秘密

亡き友が余震の度に呼ぶような
あれからだ少し大人になったのは

花道を歩き続ける父の背な
今一度賭ける自信を掴まねば

逝った子が泣いているのか雪しきり
斜めから見るとゆとりが見えてくる

雪解けのくる日へ流すものがある
スベアキー皆に渡してある余震

子供から自立した振りしてただけ
来てうれし帰ってホッとする絆

豆さんもふっくり煮えてうれしかろ
一つずつ罪置いて行くへんろ道

地球はまだ若い怒れば恐ろしい
考えて神は乳房を二つくれ

老いせめて三步前進二歩後退
大正がいくさ話に来る酒場

眠らせておいた性根が眼を醒ます
まだ生きるつもり続編急かされる

親しんだ鏡が亡母に似てきます
三寒四温無人駅にも降りる人

鳥取市	小谷美ツ千	和歌山市	細川 稚代	米子市	澤田 千春	八尾市	片上 英一	西宮市	奥田みつ子	米子市	光井 玲子	海南市	三宅 保州	寝屋川市	堀江 光子	守口市	結城 君子	岡山県	岩道 博友
堺市	山本 半銭	堺市	小西 小雪	西宮市	亀岡 哲子	堺市	山根めぐみ	香川県	山地マツエ	仙台市	川村 映輝	米子市	石垣 花子	出雲市	園山多賀子	広島県	田村 新造	寝屋川市	岸野あやめ
八尾市	高杉 千歩	堺市	宮本かりん	八尾市	宮西 弥生	八尾市	宮本かりん	八尾市	宮西 弥生	八尾市	宮西 弥生	八尾市	宮西 弥生	八尾市	宮西 弥生	八尾市	宮西 弥生	八尾市	宮西 弥生

すっぱりと修羅を包むか雪の白
断水の蛇口を囲む疲れた目
サイタサイタクラガサイタ クラス会
逢いたいという人もなし餅を焼く
念願は俺より先に死ぬるなよ
定年に妻のタクトが冴えてくる
晩学の白いページを埋めつくす
好きな花なんだと聞いてそれっきり
健忘症忘れたい事だけ覚え
震災ニュースつくづく無力思い知り
たより書くやつと臘梅さきました
肩の力抜いて続編生きてゆく
古希近し生きる呪文を探さねば
花道を飾る台詞がまだ書けず
快便の朝はなんだか嬉しくて
人柄がそのまま服が脱いである
身に余る光榮生存句碑が建つ
身最賈な妻の話に逆らわぬ
減量は水着姿の似合うまで
腹黒い人が住めない過疎の村
被災地の方に詫びつつ湯に浸る
生き延びた身に生きて行く途けわし
背伸びすればチラッと二十一世紀
試行錯誤しながら春を待っている
大地震ボトルはみんな無事だった
バッグの底に秘めてある惚け防止

弘前市	戸 一ツネ	和歌山市	野々 圭子	鳥取市	植田 一京	名古屋	藤井 高子	静岡市	片平 静代	米子市	新 正子	香川県	木村あきら	今治市	越智 一水	八尾市	山下美津留	青森市	漆戸凡々子
尼崎市	春城武庫坊	和歌山市	本間満津子	大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男
大阪府	本間満津子	和歌山市	野々 圭子	鳥取市	植田 一京	名古屋	藤井 高子	静岡市	片平 静代	米子市	新 正子	香川県	木村あきら	今治市	越智 一水	八尾市	山下美津留	青森市	漆戸凡々子
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明
大阪府	池田 半仙	岡山県	傍島 克治	高槻市	小野 克枝	倉敷市	三浦 強一	札幌市	奥谷 弘朗	倉吉市	松本 文子	島根県	谷口 義男	海田市	谷口 義男	大阪府	板東 倫子	今治市	月原 宵明

肝臓がイエローカード突き付ける

男から女を引くと石になる

おだやかな母にも爪を磨いた跡

ひと波乱いずればよりはりを戻す鬼

震度七憶測ばかり通りすぎ

信号を渡れば歩幅やつと合う

三ヶ日床の間を背に肩が凝り

ホッチキスやさしく打っている絆

父の足兵の姿は崩されぬ

女房が寝込むと花もしおたれる

年上の夫こんなにかかり

余所の男が可愛いことを言ってくれ

零れるものがこぼれて夜はまだつぐ

ひとり旅はるかはるかに幻氷よ

貝になることも一つの処世術

冬の駅立ち食いそばが嬉しいね

三差路で私を捨てる片想い

鬼らしい鬼にまだまだ逢ってない

絵に描いた餅をとときき買わされる

ピリオドを打つ釘だから強く打ち

一隅を照らし裏方さんを決め

胸のなかでなにかがはためき出して春

おみくじを結んで帰る片想い

被災地の人にはすまぬ鍋かこむ

約束をためらわず出る春一番

喜びの形で靴が脱いである

大阪市 川原 章久

鳥取市 春木圭一郎

米子市 鹿島 繭

大阪市 藤田頂留子

岡山県 矢内寿恵子

鳥取市 前田 一枝

高槻市 江原 秀夫

大阪府 榎山 隆

兵庫県 玉田 三重

大阪市 榊本 落児

和泉市 中川 楓

和歌山市 榎原 公子

富田林市 池 森子

和歌山市 福井 桂香

和歌山市 山口三千子

和歌山市 古久保和子

鳥取県 土橋 睦子

米子市 木村富美子

八尾市 村上ミツ子

鳴門市 八木 芳水

倉敷市 田辺 炎六

京都市 都倉 求芽

箕面市 椎江 清芳

堺市 黒田 真砂

京都市 山海 友照

和歌山市 吉村さち子

精いっぱい生きよと土に教えられ

ぼつぼつと頑固を捨てて日向ぼこ

電話口血の繋がりを感し取る

悪友の吹くラッパなら踊らねば

花々に釣られ遠出がしたくなり

柚子味噌を煮詰め厨房の灯が消えぬ

活断層明日はわが身かも知れぬ

ふれあいの絆が固い和をひろげ

証などないが覚えていた小指

ライバルと思ってたのは自分だけ

寒風につばみ育てている桜

炎える明日ある信じている種火

遺された同士で苦い酒を酌む

成し遂げるまでの雑言聞き流す

独り居は風の音にも気を遣い

言うべき事は明るい内に言っておく

米子市 足立由美子

和歌山県 西口 忠雄

岸和田市 井齋 一齋

島根県 今川三津江

大阪市 松尾柳右子

倉吉市 最上 和枝

阪南市 深日白光子

鳥取市 岩原 喬水

鳥取県 石谷美恵子

姫路市 北条てる代

大阪市 町田 達子

姫路市 丁坪サワ子

和歌山市 津村 武春

鳥取市 杉本 孝男

静岡市 沢田 さん

和歌山市 和田美寿子

晩風さんの句。今回地震を体験された句の多い中で、大先輩の

三句は実感を見事に捉えられています。それはまさに震撼するい

のちであり、護られたいのちであったのです。薫さんの句。この

平和な時代にこの悲惨な現実。長い行列は生きながらの死者の姿

でもあり、悲痛の極みです。夕花さんの句。この作者はかつて川

柳界で活躍されていた一人。「昔を今に」の気概は、春の訪れと共に

に万年筆を扱う気にさせ、ささやかな喜びを一句に託された。泰子

さんの句。昨年春ご主人を見送られた後になってお聞きした。夫

婦の歳月に苦難な事があったとしても、今はきれいな思い出だけ

が残される。長い航海を終えたとの比喩的な表現が見事です。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 3月号から

山本 希久子

予定通りいけば今年もいい年だ

足立 由美子

さりととした句の仕立て方だが含まのある句。明日が読みとれぬ人生。今年の阪神大震災は多くの人の運命を狂わせた。全く予定は未定である。せめて作者にとっては、平穩無事な一年であってほしい。

きつちりと食べて一人の冬日かな

芦田 絢子

一人の暮しを誠実に律義に生きておられる作者の姿勢が目につく。前向きに背筋を伸ばしておられるが健康を氣遣いながらの一人の食事には寂寥感がつきまとう。

竹光に斬られて死んだ父の墓

田辺 鹿太

不慮の死か、子にとって大死とも思える父の死を、竹光に斬られて死んだと表現されたことにより無念さが的確に表わされている。

女性差別どころか妻の強かさ

池田 一男

頼もしい女性がふえた。年々強くなる妻に一目置いている夫族も多い。そのくせ内心では、自分がいなければ妻は駄目と思っているのも男というものだ。

かざ車こともは風の彩を見る

古谷 ひろ子

回っている風車は判然としない彩を持つ。子供の目にはそれがはつきり風の彩にみえる。夕暮れて可愛い馬鹿になつて行く

堀江 美月

一日の日暮れの思いではないと思うが、それにしてもとてもお利口な可愛さである。

トンネルをゆつくり抜けてきた力

中川 楓

長い長いスランプのトンネルは実は翺ぶための助走路であつた。おそらく作者は大きな強い力を溜めてトンネルを抜けたことであらう。

何もかも後手 回れ右でもしよう

渡辺 南奉

とても乱暴だが、後手後手に回つてしまふ口惜しさもどかしさが率直に出ていてしかもあつていかんとした性格までうかがえ、川柳ならではの表現である。

はしやいではやがて悲しくなる手鞠

奥谷 彩子

悲しみの極みにはふと洩れる笑ひ、喜びの果てには思いがけぬ淋しさがあつて、はしやぎのあとには弾まぬ鞠のよう、言い得て妙。

軍手干す冬陽の当る一等地

木下 道子

家中で一番働きものの軍手、大いばりで陽当りのよいところへ干せばよい。何気ないこんなところにも川柳の眼があつて楽しい。

みかん剣くみかん農家を思いつつ

倉垣 恵美

リズム感の良さ、リフレインの効果か。そこまで言つて何処まで行つたやら

小木 久子

ちよつとそこまでと言われると妙に納得してしまふもの。

我が家には有つて無いよな自由席

飯西 ミサヲ

家族はそれぞれ好き勝手をしているように見える。見えない縄に縛られており、家の中での居場所も定まつていて自由もある程度までである。

美人薄命 美人の分も生きてやる

三浦 きぬ

同感同感。かくして女性の平均寿命は伸びに伸び、長く川柳を楽しめるといふものだ。

荀香のむ

西出楓楽選

種を蒔く話をせねば始まらぬ
 焦点の違いヒールの高さかも
 冬型がくずれこころを覗かせる
 水っぱい話に砂糖まぶす役
 期待などしないといつも期待して
 母さんの湯加減だから安心だ
 根があつて茎が噂をまきちらす
 ああ手抜き専業主婦でない強み
 この辺で小説ならば実るはず
 許すには河の流れが早すぎる
 捨て切れぬ思いほろほろ春を抱く
 メリハリをはつきりせよと影法師
 子の声が聞える位置に灯をともし
 矢印は見えぬが亡母の鈴が鳴る
 他人の影とばかり遊んでいたようだ
 桜咲くもたまたましてはいられない
 見えそうで闇を見詰めているのです
 民謡に土の折りと火の思い
 真実は笑顔の下にある素顔

和歌山市 古久保和子
 大阪市 本間満津子
 八尾市 宮西 弥生
 弘前市 肥後和香子
 堺市 谷平 照
 米子市 金山 夕子
 倉敷市 小野 克枝
 大阪市 津守 柳伸
 鳥取市 植田 一京
 米子市 茂理 高代
 米子市 木村 春枝
 和歌山市 山口三千子
 倉吉市 最上 和枝
 鳥取県 石谷美恵子
 島根県 松本 文子
 大阪市 神夏磯典子
 藤井寺市 高田美代子
 米子市 新 正子
 香川県 川崎ひかり

家出した猫には猫のわけがあり
 新刊書溢れ本屋で溺死する
 塩少々それでもめてる嫁姑
 風の数だけひらめきがあり生きられる
 人情の溢れる里で暇がない
 何はなくても雪が降り花が咲き
 厄払いできぬかわい鬼といふ
 幸せが絵になつて毛糸玉
 歯ごたえがあると見られて叩かれる
 具体的になると返事が重くなる
 頼らない樹だから視野を外せない
 春風に少うし嘘がうまくなる
 ふところにしまうと風になる言葉
 身の内のいびつな壺をまた磨く
 思い直してマニキュアを塗りかえる
 鏡の奥に無垢な昔がたまつてる
 農継ぐときめた大鼓を強く打つ
 不器用か反論しないかたつむり
 襷にも帯にもなつて長けてくる
 脱け殻になつた人 人 震度七
 壺の底たたけど何も出てこない
 寸劇の終つた鏡拭いておく
 梅から桜 忘れ上手になつていく
 五千人その無念さは如何ばかり
 燃えるもの少し残して封をする

和歌山市 木本 朱夏
 羽曳野市 吉川 寿美
 大阪市 鍛原 千里
 鳥取市 小谷美ツ千
 寝屋川市 坂上 高栄
 鳥取市 西原 艶子
 八尾市 村上ミツ子
 和歌山市 吉村さち子
 兵庫県 酒井 靖子
 羽曳野市 芦田 絢子
 富田林市 藤田 泰子
 豊中市 辻川 慶子
 米子市 青戸 田鶴
 米子市 林 瑞枝
 大阪市 鈴木 節子
 岡山県 矢内寿恵子
 熊本市 永田 俊子
 米子市 光井 玲子
 弘前市 今 生恵子
 西宮市 奥田みつ子
 米子市 田中 亜弥
 今治市 野村 京子
 和歌山市 田中 輝子
 和歌山市 桜井 千秀
 兵庫県 北川とみ子

天国と話がしたいコードレス
 その先の夢は湖岸から拾う
 新鮮な野菜に包丁よく答え
 未来から降りた小雪が真っ白い
 迷いなど忘れ上手が連れてゆく
 未だその余韻に浸る火の手紙
 呑みこんだ言葉がのどに突き刺さる
 口紅を濃いに心引き締める
 震災へ政府の腹のくくりどこ
 真っ白に干すしあわせがまだ残り
 きょう一日の私をほめる三面鏡
 焚き火囲んで人の良し悪し談じおり
 烈震にありあり見えた一切空
 あらためて読めば怒ってない手紙
 山越えた病夫に海がまだ荒れる
 寄り添うて生きて余生を満たされる
 寒木瓜の視線に棘をつい忘れ
 泣く事の出来る背中に会いたい
 非常リユックへ夫のパンツも入れてます
 ニュースにもホットが欲しい霜柱
 ホームラン呪縛がするり解けていた
 今一度 捜しあてたい桜貝
 母よりも長いつき合い姑の味
 どの彩を混ぜても染まぬ澄んだ水
 刃こぼれの包丁で出ぬ母の味

和歌山市	福本	英子	和歌山市	森口	美羽	和歌山市	唐津市	浜本	ちよ	大阪市	三浦千津子	松尾柳右子	大阪市	安宅美代子	徳島県	平松かすみ	兵庫県	中野とよ子	広島市	森田	文	宿毛市	岡村	千鳥	和歌山市	岩本美智子	西	大阪府	日阪	秋子	尼崎市	春城	年代	羽曳野市	徳山みつこ	鳥取県	岩崎みさ江	菜月	香川県	辻上よしみ	米子市	澤田	千春	和歌山市	田中	みね	米子市	寺沢みどり	青森県	福士	トキ	松江市	浦辺	静江	和歌山市	太田とし子	寝屋川市	磨いても所詮生き方変らない
------	----	----	------	----	----	------	-----	----	----	-----	-------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	----	---	-----	----	----	------	-------	---	-----	----	----	-----	----	----	------	-------	-----	-------	----	-----	-------	-----	----	----	------	----	----	-----	-------	-----	----	----	-----	----	----	------	-------	------	---------------

磨いても所詮生き方変らない
 宿敵の友に体重差をつけた
 電話から聞こえる小さい春の音
 ふつ切れぬ想いにたぎるやかんの湯
 好感度シヤネル五番が効いている
 二日酔 虚しく水が置いてある
 息切らし影従いてくる千鳥足
 痒いとこしつかり搔いて日脚伸び
 不意に來て嬉しい知らせ置いて行く
 目玉焼 気分伝わる出来具合
 地震以後障子ピツタリ合う不思議
 どっち向いてもお世話になった人ばかり
 保護色になつてみんなと仲がよい
 幾千の仏に届けレクイエム
 アンテナをそろそろ伸ばす好奇心

今日は阪神大震災の影響が投句数に現われ、これまでより少
 なかった。被災地の人を思うたび感じる胸の痛みは、まだまだ
 続くであろう。一句目―世の中のあるやうが端的に表現されて
 いる。今回の地震の際の政府の無能振りを、この句でなじりた
 い。二句目―価値観の違いとはたかだか、ヒールの高さの違い
 程度―と割り切ることが出来れば、どんなに生き易いであろう。
 三句目―厳しい寒さがゆるんだ日の、やすらぎとうれしさが伝
 わってくる。そんな時、ふと言わずもがなを洩らしてしまふ女
 心が愛おしい。四句目―これまでに何度か詠まれた素材だが、
 フレッシュな作者独特のユーモアで、みずみずしい句に仕立て
 上がっている。

和歌山市	山根めぐみ	吹田市	茂見よ志子	和歌山市	岸野あやめ	八尾市	高杉	千歩	京都市	山海	友照	岸和田市	原	さよ子	倉吉市	淡路ゆり子	和歌山市	榎原	公子	岡山県	土居ひでの	松江市	佐野木みえ	鳥取県	土橋	睦子	松江市	松浦登志子	有田市	生馬英美子
------	-------	-----	-------	------	-------	-----	----	----	-----	----	----	------	---	-----	-----	-------	------	----	----	-----	-------	-----	-------	-----	----	----	-----	-------	-----	-------

番

千葉風樹選



偽造したい一番違いの宝くじ
番がくる知らずに鰻よく太り
三番叟の袖から春が踊りだす
被災地のニュース番組見逃さず
焼酎で阿呆になりたい金庫番
交番の隣で鍵を掛け忘れ
憂き晴らすこの一票に來た出番
順番に注いでほは笑む一升瓶
別れにも門出にも吹く春一番
五十音 順番もめること避ける
番付上がり次第に風が強くなる
留守番の猫の伝言ニヤーンと言う
成績の順を狂わす裏の金
異動時期番狂わせをただ祈る
ニシン来る知らせを待っている番屋
二番目のボスがうしろで背を狙う
エンマから順番問わぬ招待状
一番へこたわるマニア泊りこみ
ライバルを視野に出番を待つあせり
番付が上がつて母に手紙書く
父逝って長者番付表と縁
番号が光って見えるサクラサク

晴子 東雲 シマリ タミ 俊子 武史 白光子 かおる 希久子 照子 剛治 ツネ みさを 旋風 新造 玉恵 凡々子 勝美 あずき ゆり子 春枝 重人

お喋りが留守番電話にしおらしい
出番待つ鬼千匹を胸に飼う
長者番付印刷洩れとしておこ
電車来るまでは順番乱れない
二番しほり一度飲みたい天の邪鬼
子育ての番になり知る親の愛
乳呑み児を抱き出番待つ楽屋裏
五番目の希望ぐらいは聞ける絵馬
面接の順番不況風に堪え
一番を狙う男の胃腸薬
番長の頃のおもかけ無い気品
一番は一人いつでも他人の子
拍手喝采ばくの出番じゃないらしい
福の神まだ順番は来まへんか
またとないう出番男を賭けてみる
佳
一番に咲いたばかりに花鉄
番台の女 ロボットかもしれぬ
番犬と思うから腹立つてくる
だまりっこやめた 番茶桜もち
番号を調べるまでが宝くじ
人
番卒の夢をまだ見る元兵士
地
被災地へ一番に聞く母の無事
天
一番のもてなし皆のいい笑顔
軸
家族です首輪にしかと番地書く
海老池 洋

典子 彩子 照ね 一花 ちかし 恭昌 しげお あずま 鉄治 達子 南奉 芳郎 清芳 有一朗 盛夫 悦男 良知 みつこ 舞鳥影 實 サワ子 洋

映す

古野ひで選



娘のヒップ妻を映した線が出る
親の背を映して子ども伸びてゆく
一枚を映すに賭ける富士の四季
鬼瓦 昔を映す武家屋敷
御近所の厚意を映すお葬式
京の四季映す手踊り習うてる
故里は水車小屋から映り出す
宝石を映す鏡は別にある
ハチ切れる姿映した芽出度い日
ウインドに映る我が身の背を伸ばす
よそ目には仲良く映る嫁姑
六等身の私を映すショーウインドー
映る心みがき静かに写経する
いじめにも政治のかげり濃く映る
映し絵の老母を手帳に持ち歩く
夕映えに染まる女が詩になる
人柄を映すメカネに掛け替える
何もかもテレビが映すはずはない
敏感に世相を映す変り難
おだしたつぷり大阪映しているうどん
師の心映し座右の銘を抱く
亡き父のビデオ映して法事終え

東雲 實 可住 一齋 あやめ 英壬子 明水 典子 鉄治 通彦 倫子 俊子 源一 ひでの よしみ 彩子 四郎 義男 とし子 旋風 悦男

それなりに映っているからほっとして
真実を映せる鏡なら買おう
わたくしを映すと亡母が出る鏡
心まで映す鏡を母が持つ
文字言葉むなく映る大地震

富士山がこんなに映えた日の門出
災害に負けぬ元気な子が映る
いつ来ても素敵な島の夕映えよ
正直に映す鏡に愚痴が出る
曲者の影を映したレントゲン

震災を映すテレビに身が凍る
選挙へとう映すのか女性の目
ウィンドに映す自分が恥ずかしい
転ぶ子をビデオに映す運動会
震災に素顔を映す水たまり

被災地を映すテレビへ端座する
哀しみを映せば鏡くもりだす
好きな人映すカメラに夢がある
現実を足下に映す水たまり
バックミラーに映る人生彩模様

被災地を映すカメラも泣いている
腹の中を映し読まれていた不覚
天
善人に丸い眼鏡がよく映る
瞳に映るみんな楽しい入試パス

たみ
強一
正子
あすま

帆雀
武春
新造

大柏
清美
高栄

やすお
勝美
姫女
たす子

保州
ツネ
狸村
寿美
洋美

雄々
美代子
吉村さち子

たつぷり

山本義子選



たつぷりのサラゲを盛ってくれるけど
たつぷりと読経の母の夜は長い
たつぷりと出世払いに盛ってやる
たつぷりと盛られたカレーの辛いこと
路地裏にたつぷり盛って食わす店
朝稽古たつぷりといいい汗をかく

露天風呂たつぷり月に見られる
たつぷりと味わいましたふぐ料理
たつぷりと満ち足りぬむる愛らしさ
たつぷりの湯舟こたわり溶けてゆく
たつぷりと母に甘える里帰り

コトコトと愛たつぷりのシチュー鍋
たつぷりと時間はあなが小走りに
オッパイをたつぷり飲んでいい寝顔
たつぷりと昔ばなしを聴く河童

たつぷりの風呂で勇気がわいてくる
ビタミンをたつぷり売っている八百屋
たつぷりと眠ってそれから考える
ふる里にたつぷりとある力水
合格の知らせ たつぷり眠りたい

若い魂 愛をたつぷり持っていた
叱る身にもなれとたつぷり叱られる
命名書たつぷり墨をふくませる
被災地の花屋たつぷり春のいろ

隆
照女
しげお
姫女
帆雀
清芳
孝原

狸村
幸夫
よしみ

みね
寿美
美代子
ミツ子
一花

満秋
保州
たす子
正子
正雄

あすき
洋

丸山よし津

初歩教室

題一太い

吉岡美房

安易に中八にしておられる句が、いまだ散見されました。提出前に再度推敲して頂きたいものです。どうしても字余りとなる場合は上五で余すというような工夫をして頂くと、リズム感を損うことが少ないものです。

それでは添削句から発表します。

太い眉切ってやりたい長い眉 因静子

（太い眉だけの人氣に陰り見え）

震災で太い絆が太くなる 一典

（隣人の太い情けを見た被災）

震災で図太い気魄あるを知る 俊一

（復興へ気迫図太く起ち上がる）

被災地でスクラム組もう太い輪に 文子

（震災へ太い輪になるボランティア）

政見に太いパイプをのみ主張 圃幸子

（政策はゼロ太い利権のパイプだけ）

選挙戦太いパイプに荒い鼻 幸夫

（中央に太いパイプのある選挙）

中央と太いパイプの政治裏 義男

（中央に太いパイプの裏政治）

大根抜きうんとこどっこいああ太い トヨ子

（丹精の腕より太い大根抜く）

真つ二つ太い大根春の音 瑠美子

（春の音 厨は太い大根切る）

すあき牛蒡太って人間だましてる 芳枝

（太かったすあき牛蒡に騙される）

太い根の鉢をゆるがす菊が咲く かず子

（大輪の菊を咲かせた根の太さ）

柿の木は幹が太いが実がならぬ 美寿子

（幹ばかり太らず父の柿づくり）

羨望がさわつてみたい屋久の杉 隆

（屋久杉の太さ羨望するいのち）

千年杉太く青空突き破る 彩子

（千年杉太い歴史が天を指す）

神経が太いが心やさしい娘 孝原

（神経は太いが優しい我が娘）

太毛糸恋に追いつけ編むセーター りつえ

（恋追つて太い毛糸を編みつつけ）

寿と筆太に書く嬉しい日 強一

（嫁ぐ娘へ寿太く書く）

太い樹に頼る鳥にも四苦八苦 澄子

（太い樹の夫に頼る鳥である）

母が編む太い毛糸の服温い 姫女

（ママになる太い毛糸を固く編む）

健やかに太れ伸びよと産湯の児 志華子

（健やかに太った孫を産んでくれ）

命名は無口な父の太い文字 笑

（命名は父に委せた太い文字）

みどり児を太い腕でそっと抱き 霽爺

（初孫へこわごわ祖父の太い腕）

母になり骨太くなる娘の手 ますみ

（母になりもう骨太を気にしない）

声太くなった子の顔しじみと ミツ子

（声変わり急に態度が太くなり）

巢立つ子に親より太い判贈る 宏章

（巢立つ子へ贈る印鑑太くする）

親と子の太い絆に目を見張り ふみえ

（親と子の太い絆を手繰り生き）

幸せて私の体又太る 三津子

（幸せな日々が私を太らせる）

豊満な体に私ほれました 真一

（豊満な君が好きだといったミス）

我が家にも陽気で明るい太目ちゃん 圃弘子

（明るくて太目の妻にもたれとく）

家丸く大黒柱太く生き 鐘造

（母さんが太い大黒柱です）

太っ腹ただそれだけで連れ添うて 勝巳

（太っ腹そんなあなたについて行く）

温い太い絆を嫁と織る 照子

（幸せは嫁との太い絆織る）

まっとうに生きた母の太い指
（真つすぐを貫き母の太い指）
三代太い絆にある強み
（三代代強みは太い血の絆）
見栄張って太つ腹見せ後で悔い
（見栄張って後で悔いてる太つ腹）
かみさんが太目おでんの温かさ
（おでん屋のおかみ太目であたたかい）
オリンピック負う脚太い聖子さん
（聖子さんオリンピックの太い脚）
軒つらら修羅の涙が太くなる
（修羅越える涙つららが太くなる）
太い足カムフラージュに式袴
（太い足想像出来る式袴）
この肥満身から出た錯悔いはない
（この肥満身から出た錯とは言えど）
ジパンが息切れしちゃう太いも
（ジパンが息切れしちゃう太い足）
太かった昔を想い腕を見る
（太かったけれど昔は皺がない）
自我埋めて働く女の太い指
（女捨てて生きた軍手の太い指）
太つ腹勇み足など恐れない
（太つ腹などと言われて勇み足）
空席に太いお尻が物申す
（気の弱い席へ割り込む太い尻）

ふゆ子

克治

康子

ツネ

日出子

円女

玲子

美恵子

志重

孝男

タミ

瘦せた人太った犬と散歩する
（瘦せた分犬を太らせ散歩する）
どう見ても神経太いきやしゃな人
（神経の太き意外な体つき）
太くても細い神経持つている
（神経の細き似合わぬ肥満体）
恵方向き寿司かぶりつく一人膳
（太い寿司かぶって独り年をとる）
針山の太針一本ボタン付け
（太い針だけで独りの釦付け）
太く短かく生きると決めた酒茶漬
とし子
細くても太く短く生きて行く
（瘦せてても寡婦という名で太く生き）
言葉では太く短く生くと
（言うほどに太く短く生き難し）
着想・表現ともに立派な句
震災地太い絆の物資着く
避難所の絆日毎に太くなり
震度七太い橋脚なぎ倒し
立志伝初代社長太い指
親と子の夢縫い上げる太い糸
親ゆすりマイクの要らぬ太い声
身上が太って情け薄くなる
大根の白さに負けた太い足
好き嫌いさせてる猫の太り過ぎ

一壺

三重子

照

幸枝

まさ子

一典

梅村

黎之助

高栄

柳章子

春枝

武春

ミツオ

三重

敏子

斜めから細く見せたい写真とる
豊作の今年の米にある太き
冬を越すための根っこを太くする
極太で作家気どりの文字を書く
骨太の父の背中を見て育つ
四季すべて飯が美味くて瘦せられぬ
転ぶたび絆を太くする夫婦
揺れながら夫婦の絆太くなる
どん底を切り抜け絆太くする
牛蒡天の太い方から売れて行き
老骨の太い指には自負がある
図太さが聞き流してる風の私語
節くれた遊びを知らぬ太い指
太さならいずれあやめかきつばた
ライバルで仲間で絆太くなる
娘の未来託す男の太い眉
立候補太いバイブにすがりつき
年金の財布で太る事がない
震災後役に立つる太い腕
私句
復興へ太い庶民の土性骨
太い指女を捨てたわけじゃない

侑里

八重子

しのぶ

半畳

忠男

君枝

行子

芳水

克美

ふさ子

めぐみ

君江

碧

さち子

キヨエ

一乗

（伸）弘子

義子

題「捨てる」4月15日締切（6月号発表）
宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房



毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

京都塔の会

松川

杜的報

その傷にうつかり触れた濁り酒
苦勞性 曆離せぬ亡母だった
不幸続きもつ曆など見なくなる
花曆 冬には冬の花が咲く
カレンターの余白が私の日記です
祈らねば一日重い日で終る
祈りますあなたが過去を捨てるまで
祈るだけ祈つて後はケセラセラ
振り返る度に祈りが深くなる
御多幸を祈るとだけの置き手紙
勉強もせずに合格祈る絵馬
祈りのかたちは女を女らしくする
京和菓子 半紙に包む温か味
手のつけぬお菓子貰ってくる半紙
旅役者へ半紙でくるむお鳥目
古半紙に臍の緒大事に母子達者
山里の人の温みが半紙漉く
取りあえず半紙で返す内祝
気配りを半紙にくるんで添えておく

百合子 求芽 巨詩 正坊 杜的 諷云児 圭坊 芳子 倫子 年代 友熙 紫香 波留吉 栄 武庫坊 白溪子 ただし

大津絵の鬼が半紙に踊りこむ
仮名書きの半紙おんなの火が匂う
地続きでない眼で戦見てる国
いい話小耳にはさむ待合室
除夜の鐘へ煩惱半分残しとこ
アンカーの猪が出て期待する

川柳塔鹿野みか月

土橋

誓いのことはこの頃邪魔になりだした
鶯よまた鳴け今日は初風
美人には可能ながきりつくします
ブラックコーヒー美人に少し見栄があり
雪の日の女はみんな美しい
一つすりや一つ忘れる鍋磨く
愛されることはもうない鍋磨く
可能性信じ女は肌磨く
ひたすらに磨いた腕にやつと春
六十路過ぎ磨く出足が揃わない
感性を磨く本物みつめて
数珠を掌にひたすら日日の嬉しさよ
夕暮れの山が墨絵の佗びを見せ
ドングリも歌うか山もにぎやか
山奥にやさしい熊が住んでいる
山の子は遊び上手で親孝行
爆発も考えている 休火山
もう二月春は山からかけ降る
山の乱雪に倒れた木が目立つ
山勘がいつもはずれた寒の山
大雪に山も往生するらしい

真柳 薫 てる 笑女 達子 水客 蟹報 喜与志 明美 多哥由 三千代 石花菜 野草 くに子 幸枝 智恵子 睦子 茂 はお 孝男 八重子 早苗 菊乃 実満 弘子 節子 富久江 久枝

流水の詩が聞こえる白い海
白いチョークと怪童たちとドラマする
まだ酒がうまい白寿に望みかけ
むつくりと山が動いて春になる
産まれくる都市を白紙に夢を描く
白を切る狸の尻尾見せしめよう
負けるが勝ちいつも白旗上げてます
足袋白く白く女を捨てきれぬ
嘘をひとつに白髪一本罰あたり

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

百舌鳥一羽下見に來ました柿の枝
下見たころは芒と茅ばかり
本気とも嘘ともとれぬ目に負けた
本気で畳の上の死を思う
來ると言う娘待つ間の長いこと
損をした本気で怒った結果です
風船が本気になったか高く飛び
つけこんだ味の批判をしてお茶
ほめあげてきてはつけこむつもりだナ
縁談の下見ころを見失い
天皇の名をかり本気で撲られた

川柳岩出

小倉アサ報

富恵 風人 房子 よしえ 汲香 隆風 きみ子 かつ乃 好栄 ちよえ 恵美子 はるみ 英子 鈴江 かつ子 聖子 博利 清泉 白汀 紳一郎 精子 和子 正直 綾子

美しい心
言葉に飽かない

公一報

久留美 一枝 高栄 トヨ子 白峰 柳影 とし子 静子 公一

欣史子 慶子 光子 あずき シマ子 香住 弘直 能子 千枝子 留吉 清芳 薰風

時 店

久しぶりヒコキ雲が新鮮だ
ぞうきんがきれいになった新学期
新しくつをキュッキュとならしたい
太陽の光まつすゞさしてくる

一路報

小5 小5 中1 中3
愛 惠 千 史
枝 子

蘭 臣 夏 一 壽 喜 比 淑 靜 正 八 喜 節 靜 笑
幸 子 喜 枝 枝 久 呂 子 佳 宏 美 美 子 夫 風 子

住谷石

雀百まで生きてる限り理想追う
背のびしてみても無力は無力なり
一本の薔薇に空気が甘くなる
クレヨンで描いても母は美しい
栄光の数だけ恥がある浮き世
銀杏散るかすかな秋の訣れぎわ
浅知恵の心貧しい日を恥じる
冬を病んで賀状一枚書き残す
背信の背なに二の矢が追ってくる
真剣に生きた背広が吊つてある

三男 舟
森子 湖正年
度 風坊代
富 諷 澄 女
喜 云 子 兒

敏 洞庵 聡 キミ子 えみこ 重人

川島諷云児報

一壺 晉 治代 たけし 子報 隆 森子 頂留子 朝子 美幸 ますみ 柳宏子 三男 祥文 春子 欣之 たもつ 柳伸 東雲 春堂

吐來報

たけし
子報

宮崎シマ子報

隆
森子
頂留子

朝子 美幸 ますみ 柳宏子

春祥三
子文男

欣之 たもつ 柳伸

春
堂

なにげない逃げ口上にあつた嘘
二次会を逃げてラーメン食べている
重箱の隅にもあつたぬくい春

隅っこも真ん中もない仲間の輪
隅に居て豊かな笑顔たやさない
隅っこにいても母さん光つてる
左遷地の雪が我慢をしろと言つ
しんしんと雪降り止まぬ物思い
肩の雪顔見合せて払い合つ
積雪へ闘志をもやすふきの臺
藁くつの温みで雪の山を越す

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

年寄りの生活の知恵今に生き
笹肩似無羅里揺研宵夷

トップの座譲れぬ地震のおそろしさ

被災地へ昔懐かし尋ねピラ

玄関に押売防ぐ男下駄

頃合いの色でルージュが生きている

酒吞んで晴れる憂さなら詮も無し

同窓会しわくちやの顔笑つてる

忍耐の限度を測る投票所

被災地へ徒手空拳をいかにせん

焼け跡の瓦礫に揺らぐお線香

環境が顔も形も変えてゆく

たっぷり食べたお腹をなでる孫

頼り無い夫に嫁さん鬼となり

自己嫌悪今日も記した日記帳

いつも二句まだ焦点が定まらず

信博 一風 弘直 洋

美津留 夕花

とみを

かつみ

和子

度

シマ子

タミ

朴竜

實

久仁於

旭恒

虹汀

高明

主一

四郎

晴子

幸夫

治幸

喜久亭

ちよ

ふさ子

紀一

焼け跡の句の中のメッセージ

南大阪川柳会

金井

文秋報

正剣

生活のやつれをかくすコンバクト

値打ち無い男の釘がひん曲り

お初千回もはや演技を越えている

ふと触れた肩のあたりがでている

価値観の違いを捨てたゴミ捨て場

捨てての割には図太いことを言い

計略をちゃんと見抜いている笑い

学歴を偽り値打ち下げた奴

演技派の女優は齢を匂わせぬ

高い値を付ければ売れるから不思議

綿密な計略張った蜘蛛の糸

散髪を終えた鏡の顔のてれ

花束を受ける少うしてれながら

計略に八艘飛びの舞の海

生活に負けた昭和のかれすき

値打ちだけ遊ぶお金のむつかしさ

生活のためと文句を言わさない

てれている場合じゃないと叱られる

こそばゆい計略がある誕生日

値切るのは大阪弁が幅きかす

計略があつてやさしく出迎える

鶴の舞 愛を得よう演技する

大根を値切つて少してれている

ささやかな生活へ伸びる子は宝

二人よりひとりで生きる市場かこ

お世辞とも知らずしきりにてれてはる

柳宏子

秋子

楓楽

千里

寿

真砂

文秋

正博

萬的

庸佑

志華子

章久

度

東雲

信博

勝美

頂留子

咲

智子

柳伸

久子

スミ子

トミ子

シメ子

文江

三男

紋付の子猿照れてる初舞台
ポケットの小銭が演技したがって
叩き売り演技上手に買うサクラ

川柳藤井寺

高田美代子報

いろいろな賞をねらつてみんな駄目

賞とつた馬は人參貰うだけ

賞状の数だけ飛躍した青春

ばあちゃんの家が味の名人賞

賞金も取つて震えがとまらない

紅少し派手めにひいて初句会

眠つた派手を着てみる初詣

派手にやつた喧嘩のあとでれくささ

不渡りを出した社長が派手に酔い

派手好み小手をかざして見たくなる

道頓堀派手なネオンにあるいくさ

派手な服脱いで噂の外に出る

派手でいていど厳かな日の出かな

運命にいとむ心で髪洗つ

鶴 ご機嫌悪い子供達

男運を狙つてメイク変えてみる

神様がご機嫌斜め運がない

強運の右手は洗わなっている

試行錯誤 運が追風連れてくる

レモンティー 運命決めたのは女

運だけで渡る怖い丸木橋

走つてごらん運は後からついてくる

運命を決めたあなたとの出逢い

年男張り切り過ぎず怠らず

日出子 千梢 智久

キミ子 志洋

史郎

愛子

しげお

みよこ

ハツエ

晋

吸江

二南

正一

絹子

一屯

扶美代

三夫

恒雄

淑子

悦子

六点

三郎

和樹

美代子

美房

宗一

叩いたら聞えるラジオ捨てきれず 敦子

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

今日のストレスおでん屋に置いてくる 夢之助

今日もまた北の夜明けは真っ白い 紫香

熱燗とおでんに妻が上気する 鹿太

街眠るおでん屋台の灯がボツリ 尚利

わがままな母を黙らせてる白衣 歌子

受けた恩いつかいつかのまま白髪 弘治

如月の眼鏡また拭く手暗がり 定人

袴足の白さばつんとあるほくろ 勇次郎

川柳後楽吟社

従野 健一報

亡父は浄土へ帽子は今も棚の上 義親

柚子の湯でのんびり浮いている頭 吟平

親不孝逆らう爪がまた伸びる 正秀

嘘ひとつしか言えぬまだまだ少年 拓治

家中をひっくり返して探す愛 幸子

懸賞金つきの定期へ変えるかな 柳五郎

息子の似顔が描いてあるボトル 邦季

ひとりになり涙ぼろりと出とおとこ 桃風

神の手の上で煩惱燃え尽きる 吉則

失念の賀状に三拝九拝する たけ志

賽銭を奮発今年の願いごと 佐加恵

成人の晴れ着に雪が舞っている 金吾

小さな灯守るいくさがまだ続く 道博

手の内は見せぬゆつたり懐手 美智子

禁煙の列車で匂う二十歳の香 文平

主婦の面モナリザになり鬼になり 哲郎

木枯らしに押されて老いの背が丸い 青銅

古希過ぎて柳に風と生きている 照路

捨て石にされてる余生へ弾力性 博友

ゴールで待っていたのは処刑台 草風

賢くはないが元氣なのが取り柄 秋月

川柳高知

川竹 松風報

故郷の駅に初窓置いてある 三郎

木枯らしの駅で訣れの科白聞く 千鳥

駅で逢う人人人はみな他人 佳風

あこがれの駅は車と人の波 圭風

左利きだけど見事な箸さばき 功幸

器用さはないが真面目に生きた道 幸

ロボットの器用に負けて首になり 快風

良妻も悪妻も棲んで月日たつ 有佳

正月も私のリズム狂わない 菊野

人込みにまぎれて漁る年の市 竹萌

恋成就 賭け大吉のみくじ引く 春枝

古鍋と昔の苦勞語り合い とみ子

黒板で忘年会がはしこする 孝雄

とまり木のとなりへ耳が長くなり 千恵子

玉砂利に氏子の自覚取り戻し 朱坊

三幸川柳教室

三宅 保州報

合図は無用 天知る地知る我も知る 初子

きつかけを掴みそこねて出ぬ合図 美美子

虚と実の狭間で合図揺れ動く 久子

怠慢が見のがしたのか死の合図 一郎

合図するひとつもない囲炉裏端 当代

白い歯を見せて二の矢を射る合図 めぐみ

いま合図出さねばチャンスもう来ない 三千子

旗印見えるところに居る安堵 町子

以心伝心 合図はいらぬリング割く さち子

過去を捨て牙の傷痕なめっている 美羽

ぬれ衣を歯牙にもかけぬ太っ腹 武春

イヤリング象の哀しい声がする 美智子

糸切り歯牙に変身することも 千秀

牙まるくなつた鬼へは気を許す 鉄治

キバむいた男ざかりが懐かしい 正雄

ちらちらと牙も覗いている笑い 和子

磨滅した牙で父権がしまらない 百合子

満場一致みこしを上げた役どころ みね

ボジョレーヌーボー満たして夢を追いかける 親路

潮満ちるまでの御託は並べまい 茜

うたかたの恋満ち潮を遠く聴く 朱夏

欲望を満たす器に底がない 保州

満面の笑みは私の負け惜しみ 靖子

上手な嘘聞くと切なさ満ちてくる 章子

煙突はなないけどサンタ待っている 公子

十二月の街は本音で動いている 悟

クリスマス飾りお経を唱えてる 桂香

南座のまねきに雪が降りかかる 美寿子

一年のすべて絵に書く十二月 高夫

踏み切りでタタラ踏んでる十二月 花肇報

川柳塔みちのく 小寺 花肇報

決心がゆらぐ吹雪のど真中 五楽庵

冬の風まともに受けて北に住む 花峯

減反にあくまで抗議する案山子
焼餅はこんがりこげを食う覚悟
ふらふらと右手に前科もつ男
ドア開けてノラの決意がほしい夜
酸欠になつても妥協しない独楽
奥の細道たどり優雅な旅をする
雪の朝今日は泥棒休みです
子を産むと決意してからサンマ買つ
墨染めのふらりようめく山頭火
深々と駄馬の蹄は花模様
不揃ひで團児のついた餅がある
ふらふらして倒れる一升瓶
りんごつ娘餅肌映える露天風呂
一発の花火迷いがふつきれる
ハッケヨイ土俵の下で重ね餅
ふらふらと出るに出入れぬ混浴場
北を去る私の足跡消しておく
現代の神話ゆさぶる震度7
足跡をたどれば父の靴がある
数歩先行く足跡をまだ越せぬ
足跡を信じ花咲く日を信じ
決意してからの歩幅が乱れない
少年の足跡青い空に貼る
ある決意未だ青春の残り火か

東大阪川柳会

森下

愛論報

一花 果林 和香子 千加子 黙人 井蛙 一光 ふさゑ 生恵子 ツネ ふじ子 雅城 花匠 正徳 龍人 順三 北歩 明雄 一路 アサ しげる 銀波 きえ子 踏青 勝美 愛論 度

また明日も逢う指きりを痛いほど
書道展万葉がなと無に浸る
じゃ又と別れ上手のそれつきり
辛くともあなたのためと言う別れ
お別れの握手の温み手に残る
関係がない別れでも涙出る
しっかりと結んでなかった赤い糸
しっかりとした返事見舞を安堵させ
しっかりと世渡りをする金を貯め
星くずの下で無限の愛に酔う
酒より人の情けに酔う涙
幸せは猪口一杯で酔う夫
うっかりから始まる母の痴呆症
運とツキ無い生涯の試しクジ
やるせないいじめに抗議する別れ

岩見川柳会

羽津川公乃報

孤舟 信治 頂留子 庸佑 美子 東雲 猪太郎 文秋 真柳 湖風 柳安子 晋吾 太一 隆 高尚 喜与志 一京 孝男 芳江 孝原 照女 八千代 睦子 睦子 幸枝 嘉津江

鼻の下の長い短所が少しある
意地悪も生きる証の短所です
妻は掌の上で短所も遊ばせる
O型の短所か情に脆いこと
擬餌鉤の飾りに短所など見せぬ
火葬場にきつと短所は焼け残る
色即是空 桃と流れて行く短所
誰もある短所がなくてノイローゼ
いずも川柳会 前月分 園山多賀子報
もう春の話は出来ぬ震度七
春はまだ企みごとに炎がつかぬ
乳房張るもう遠くない春の音
丹念に無職は春の髭を剃る
海が風ぐ春の訪れかも知れぬ
いのししの威勢論する齡でない
避難所に威勢をつけた握り飯
威勢いい女が配る紙コップ
昔日の威勢と思ふ紙おしめ
威勢いい妻に一目おいている
威勢よい話をしては借りに来る
威勢よく切った咳阿の後始末
威勢よい女将で暇な将棋盤
振袖に弾む心をためて出る
おめでたい話に弾む志野茶碗
足音に鍵つ子の声弾みする
老残の威勢は失せて黙秘する
突然の災害期待を灰にする
重過ぎた期待弾けて飛んだまま

隆風 たけし 美恵子 螢 忠良 はるお きみ子 大漁 ちかし 草丘 蘭水 裕 陽子 多賀子 しま子 章峰 寿美 三代 昌枝 幸一 芙佐子 れいじ 満江 まこと 水煙 篤子 ちえ

期待した父の背中に謀反する
まだ明日があると期待の毬をつく

期待され姑の跡継ぐ荷が重い
ふる里に住み水不足ないくらし

せせらぎも音符奏でる早春譜
花陰も揺れて水面の鴨の群

掛軸の鯉にもほしい水しぶき
弱点を見付けた水は闇を這う

ははと言ふ深い入江の水を恋う
水臭いことは言ふまい金のめし

川柳塔おつばこ吟社 木村あきら報

今日よりも明日が素敵と待つゆとり
起き上がるタルマに明日の夢貰う

助手席に私の知らないイヤリング
離れても心をつなぐ虹がある

人が来て半分をやめる痴話ゲンカ
年寄りもまたそれなりに忙しい

十円で億のお願い初詣
馬鹿になり阿呆にされてる気楽な身

初孫で十二の干支が勢揃い
マンガ見る時だけ静かな孫の群

ガラクタを焼いて夕日が落ちてゆく
明日吹く風にあまえた罰当り

初孫が生まれ我が家に春がくる
方言で出された料理食べてみる

我が一座望みみちぎて地鎮祭
書き替えた世帯主です税払う

マツエ 文仙 千カエ マサエ

マツエ 文仙 千カエ マサエ

雑草も明日に向って生きている
はた目には良く写ってる夫婦仲

川柳ささやま社 酒井 靖子報

理想どおり紙吹雪の中にいる
初暦うれしい出会いありそつな

ひと言が過ぎて絵馬が迷いだす
冬眠の石の柩が喋り出す

灰皿の底にトラブルねじ伏せる
冥土の門くぐって冬眠すると決め

母逝って父の冬眠がすぎる
飛べる日を夢見て忍の一字抱く

飛べたならあなたに捧げる愛の詩
居心地のよい冬眠で四季忘れ

飛ばされて此処で果てると決めている
妻の目の死角で冬眠したくなる

愛冷めるだから冬眠など出来ぬ
久世川柳クラブ 二宗 吟平報

雪かしら雨戸をたたく風の音
春風に眠りをさますねこ柳

風に乗る梅の香が春を呼ぶ
風に舞い歌いながらに散る木の葉

風吹けば寝たかまだかと戸を叩く
いい話だけを運んで春の風

北風に南にうつす老母の部屋
岐路に立つ男が迷う風の街

いろいろな顔で猪くる年賀
新しい年は亥の歳まつしぐら

山 人

山 人

中なみ子 迷貫

純子 純子

恵美 市三

八重子 素水

とみ子 つや子

ヒサ子 和子

芳郎 可住

靖子

山 人

山 人

山 人

山 人

山 人

山 人

山 人

山 人

猪の賀状仲よくどつと来る
猪の顔に似合わぬ芸達者

猪に不況を一気に追わせたい
亥の歳も喜寿を迎えりや猫となる

ポタン鍋かこんで抱負語り合い
猪の出鼻を挫く大地震

猪が歴史と共に生きている
不況風飛ばせ横綱土俵入り

サークル檸檬 小林 一夫報

一月十七日 晴 街がつぶれた
敗戦と重ねて寒い焼野原

月へ行く人智 笑うように地震
意地張って自分を小さくするばかり

不幸中の幸いさいわいにも限度
胸の辺りの母へ椿が咲きました

永らえた花はひそかに風を待つ
さようならアルツハイマーにはなるな

人の子の生まれはかなしみの川下る
誕生の日の新聞を持っている

ふわふわの黒猫産まるとんな恋
蝶一羽生まれる冬の枕より

川柳クラブわたの花 片上 英一報

球根が凍土押し上げ春支度
凄絶なドラマへ窓も凍りつく

凍りつく心を溶かす母の唄
凍る道ヒールの踵もどかしい

聞きませず豆腐一品膳に載る

幸 枝

千代女 ただし

秀香 光水

伊久栄 甫正

吟平 富士野

一夫 房子

みつ子 智恵子

あずき たか子

希久子 薫風

正坊 喜美子

千代

千代

千代

千代

千代

千代

千代

ふつふつと煮える豆腐が主役顔
鳥も虫も共に榮えている林
魔除け獅子むなしく虚空睨んでる

何祈る子連れ猪初瀬もうで
初荷積む仕事始めの白い息
喝采をうけるピエロの赤い鼻

鼻が利かん犬と暮していて気楽
鼻よりも耳の気になる年になり
妻の鼻隣のおかず嗅ぎわけ

ラベンダーの薫りに鼻を遊ばせる
鼻たれつ子いてのんびりとしてた里
鼻高い十日えびすの福娘

鼻つ柱強いところが気に入られ
沈丁の香り届けてくれる風
鼻白むこと多かりき去年今年

ジントラの調子に赤い鼻がゆれ
川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

本場のベテラン天狗にはならぬ
銃口をあなたに向けて忘れよう
生きていることを忘れていません

一杯で忘れるほどの軽い疵
自問自答しても名前が出てこない
過去は過去忘れ上手に生きている

愛すべき忘れ上手な老母という
猫舌も忘れるほどの熱いキス
忘れたく心の糸を切っている

忘れてるライフラインの有難さ
さざ波の過去へ忘れて来たボエム

朝子 剛治 弘直 友甫 隆 暁子 春子 道子 ますみ 君江 実希子 トシエ しのぶ ミツ子 英一 鬼遊

試着室 顔に合わずの忘れてる
実がなると花の苦勞も忘れられ
もの忘れかばちやの馬車はよく転ぶ

避難所の窓に変わらぬ今日の月
お隣の西日の窓にメロドラマ
春ですよ窓辺を叩く温い風

忠告へいつも心の窓を開け
窓際の椅子にも届くチョコレート
真打ちの扇子ときには槍に見せ

F A宣言ベテラン真価問うてみる
ベテランと呼ばれ頂点諦める
聞き流すこともベテラン知っている

ベテランにされて責任負わされる
ベテランにしておだてられる孫の守り
ベテランも日に新たななる人が好き

主婦業のベテラン妻の底力
ベテランのミスを人間味とおも

川柳塔まつえ吟社 恒松 町紅報

茶柱が立って受験の靴かきし
この橋に立てば亡母にも会えそう
受け止めが下手で言葉の刺が立つ

立候補内助見事に花開く
立っても座ってもひとり芝居です
ローンだけ残りひといきが自立

別れかなきりきりと風立つ日
正面のその真ん中にある思案

年子 誠子 栄美子 呑天 晶子 さち子 千寿子 稚代 鉄治 武春 利香 紫香 春蘭 紀久子 めぐみ 輝子 信子 紀美女 克子

正面の鏡に心のぞかれる
正面に良きライバルの影がある
裁判長の正面だけは座るまい

正面の拍手騙している手品
高齡の葉は孫の笑い声
高齡の母が教える舞扇

高齡と言われたくない山登り
高齡にほどほどという長寿法
面倒な書類高齡楯にとり

茶飲み友曾孫自慢の春炬燵
団樂の鍋を覚えたる家の鍋
団樂の歌を覚えたる家の鍋

団樂の中で本音を盗みとり
団樂の歌を覚えたる家の鍋
団樂の歌を覚えたる家の鍋

席順がなくて団樂温かい
失って初めて知った団樂図
二分咲きの下で男の舌もつれ

霧の中もつれ話が謎を生む
赤い糸もつれて出口見つからず
もつれ糸はぐす盃干している

もつれさす閑なラッパがいて困る
酒癖が丸い話をもつれさせ

ほたる川柳同好会 井上 直次報

その日以後 六甲動し雲低く
養虫が心開いた温い風
心開いて話せばわかつてくれるはず

砂布団かぶって目だけ開くヒラメ
商魂が瓦礫の中の店を開け

房子 知恵子 清江 佳三 長子 米丸 鶴丸 満江 清志 茂美 多賀子 蘭水 義良 桂子 与根一 登志子 章峰 静恵 みえ 太泡 友子 町紅

直次 明光 螢柳 ただし 薫風

離乳食大きく開く母の口
愛嬌も挨拶もない改札機

童謡の結んで開いて遠くなり

揺れやんで開口一番生きてるか

山茶花の白に心を見透かされ

あいまいな白で世渡りする玄人

白いスカートはくと弾んでくる心

やり直す出発点の白い道

真つ白のハンカチ嘘が包めない

空白の一瞬生と死とを分け

ビリオドを打った余白が語り出す

十七日夜の白みの遅い朝

何事も無かったように白水仙

縄暖簾潜るいつもの顔揃う

メンバーの補欠に入りはつとする

メンバーが揃って居酒屋ます乾杯

メンバーですぐにまとまる食べる会

脱ぎ捨てたセーターにある襪

震災の直後ライバルから手紙

震災であいりん地区が大出動

首相よりスイスの犬が早く着き

豊中もくせい川柳会 田中

正坊報

生か死かゴールラインにある日記

恐妻に見せる日記は別に書き

焼跡に桃の花あり日記かく

真実を書くとは限らない日記

上げ底の菓子はいきれいに並べたて

底意地の悪い女のハイヒール

馬洗

祥風

清史

しずえ

佳秋

純次

喜美子

幸子

瀧小

紫水

保子

桂子

敬子

眞郎

吉太郎

正安

英子

福一

博史

一笛

方郎

方郎

方郎

方郎

方郎

方郎

方郎

方郎

方郎

胸底へしまいこんどく悪いくせ

絶望のどん底からの槌の音

せめて一行 神戸の便り待っている

自分だけ不運のように来た便り

追伸でやつと本音に辿り着く

いい便り娘がくれた孫のこと

追伸が本文よりも長い母

嬉しさに家中躍っている便り

妥協した悔いが滲んでいる便り

前略が拜啓おしのけ幅きかす

年ごとに時計の針が速くなる

うっかりとモナカの角をつぶしたり

ペットボトルお地蔵さまの横っちょにも

湖が光る乗合バスはみな無言

蛇口から生きているかとはげまされ

センサーで地震の予知が出来たなら

冬の夜の大根の熱き安心

あきまへん言いつつ生きる旗を振る

とつとり川柳会

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

月子

知香子

武庫坊

芳子

佳秋

一笛

明光

悟郎

つえ子

計

風雲児

杜的

蕪風

落児

瀧小

万之助

ただし

薫

帆雀報

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

風景を引き立たせてる崖の松

松の内めでためてたで三日過ぎ

健康と平和寿ぐ松飾り

松ボックリ狸に化けて可愛いね

公認の朝寝朝酒松三日

初釜の床一本の根引き松

松飾り我が七代の心意気

おめでどうやっさもつきの幕が開く

おめでどう父が涙で娘を送る

飲み慣れた酒で成人おめでどう

おめでたい酒は下戸でも酔って来る

何はともあれ健康でおめでどう

逢う人へ一月中はおめでどう

おめでどう一寸お腹に触らせて

ともかくも新年句会おめでどう

いずも川柳会

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

武田

孝原

一枝

山人

悦子

舍人

明美

帆雀

侑里

黙光

喬水

静生

一京

孝男

輪多朗

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

圭一郎

親友だから思い切り吐く愚痴の山
深呼吸思い切りしている野心
思い出へ風花が舞う夢が舞う
植木屋の思い切り良い花鉢
千年のストレスを吐く大地震
天国と地獄二十秒の震度七
会うたびに地震の怖さ語り合う
被災地のストレスを聞く喫茶店
思い切る気でもやっぱり瓦礫掘る

川柳大阪

川端

一步報

末貞一
歌子
美智子
六浦
昌子
正治
紫香
澄子
弘治

太り過ぎ猪首に合やす服はなし
猪に指示器つけつつ進みたい
精進して猪突昇段今年こそ
まっすぐに歩んでほしい猪生まれ
子も巣立ち猪突猛進してみよか
猪歳は隣の花に見向かない
猪の気概が僕に出ず居酒屋に
招かざるのに顔を出す居酒屋に
店の前において招く備長炭
福招く浪速商人えべっさん
招かれて單身赴任口説かれる
不景気に輪をかけているゼロ春闘

堺川柳会

河内

月子報

推高
たもつ
太元
和子
川童
洛醉
吟笑
良花
醉照
柳弘
鉄心
一步

元旦に揃う絆が解けかける
健康のパロメーターよ屠蘇の味
二人三脚速度おとして夫婦坂
お互いの棘抜き合せて夫婦坂
寒牡丹二上風も遠まわり
姿見に二十歳の責任映し出し
祝い酒鏡を割って春を呼ぶ
祝い膳まずは父から箸をつけ
祝われてふと振り返る歳になり
大漁の旗に港は祝い鍋
真珠婚祝うふたりの飯の数
祝杯に嬉し涙も共に飲み
祝日の朝で日の丸が美しい
祝宴になって主役はほんととかれ
やなぎ箸神も一緒にめしあがれ
すこやかに主役スヤスヤ内祝い
猪の出鼻くじいた大惨事
猪に似ているようになつちの妻

柳昌
しげお
雅巢
青道
比呂志
末坊
河南子
与呂志
一男
金太
希久志
笑風
まつお
かよこ
重人
美津留
信醉

もどかしい代替バスの時間待ち
仮面かぶる二番の椅子が高すぎる
旨みの差それは大きな愛だろう
零背負う素手も素足も残っている
冬の時差抱いてじっと春を待つ
便乗のチャンスと鬼に言いよられ
五センチの段差歯がゆい車椅子
売り言葉ひとつにもある実力差
便乗の美女が噂の種らしい
普段着でまた逢いに行く二番館
親の夢破った意識いまもなし
文明の利器すたずにされた街
ボランティア心の破れ繕って
赤い服着て年の差を忘れよう
後ろ向き二番の位置を確かめる

二南
金三郎
三千子
美子
紀美女
頂留子
みつこ
勇太
狸村
小雪
摩耶
千代
照
梓
東雲

富柳会

池

森子報

初春へはずむ生命の花を助け
両の手に瓜坊連れて初詣
車椅子引いたおみくじ吉と出る
下駄箱の三段目まで娘に取られ
虹の色一色消したい日も有りて
春一番金運我が家に吹いてくれ
純真なあんが娘がわが子なら
マネキンが不況の春を色で待つ
初夢に恋した人のめぐり逢い
金星をあげた力士は隣村
悪いことでけへん純な目が見てる
純粋な子のいじめ聞くらさ

紅紫朗
晋
喬之
恒雄
鐘造
紅月
方子
二三子
登子
昭水
美代子
トシエ

どの子にも優しくなれるお正月
あなたには分かつてほしい年賀状
裸婦像に風邪の神様立ちどまる

純真な人には心開きます

純情も買つて歩いて初春の風

けつたいな男に美女が惚れている

傷みもつ人形もいるおもちゃ箱

汗くさい父の背広は無口だな

初春の夢風船は百個ほど

打吹川柳会

奥谷

弘明報

願いごと老母は無心にじゆずをくる

息抜きに城を抜け出す殿も居る

南窓こは隠居の城とする

野仏がお城の方を向いて建つ

甲虫 今も城山離れない

念願の子宝結婚十年目

願いごと器に過ぎて皆こぼれ

勝つために男は城を建てて死ぬ

念願は夫婦達でタイヤ婚

ときめきを勘定書が沈下させ

影つすい城主にない後継者

ときめきも忘れて久し八十路

地下牢もあつた華麗な天守閣

ときめきを聴いてお腹の児が育ち

念願は最高点で出てみたい

念願がかなう頃には惚けていた

父の背を越す念願を抱いている

勿体ないもつたいたいと溜めている

(四) 勇

文次

智久

維久

柳太

花梢

岳人

森子

節子

幸子

玲子

勝見

よしえ

小生

季芳

螢

博文

喬水

妻水

善政

松盛

一浪

玲坊

銀嶺

雄々

とみお

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

逢つまでの胸のときめきかもしれず

小さい手の介添えもして初詣

富士山と会えないままに終る旅

ひとり旅の男の人生覗きたい

旅好きの友がほしいな花便り

故郷の牛故郷の声で鳴く

古希迎え素顔はめられ染めぬまま

染め分けた手綱にくるう親子獅子

被災した心染める師なお不明

二度三度染め直して姑の色

翠洋会

渡部さと美報

冬山へ登る魅力は失わぬ

分きざみブランコ揺らし塾急ぐ

電灯の揺揺れている余震

たそがれて甘い言葉にすぐ揺れる

節分の豆を怖がる私の歯

気がつけば危険地帯に付っている

没法子 危険だらけのうらおもて

菜の花に負けじと伸びる葱坊主

ねぎ坊主判子押すのをまだまよい

お人好しと言われ本音は伏せておく

ライバルの本音をさぐる三次会

じわじわと本音に迫る目が変わり

あつさり和本音をはいた顔と顔

ちゃらんぼらんも本音は礼儀わきまえる

政治家の本音は眉つばものだろう

関西は本音ばかりでうそがない
本音しか言えぬ父さん平のまま
事なかれ主義が本音に蓋をする
本音出し別のストレス溜めている
嫁の身で本音吐いたら修羅になる
本音でも取れる言葉にゆるがされ
本音吐けず言葉ばかり飲んでいる
上下震 老いたる妻もしがみつ
釣り上げたつもりは妻に泳がされ

久世川柳クラブ

二宗

冷平報

捨てきれぬ絆もとめて瓦礫掘る

重ね着に肩がこりますサロンプス

子は巣立ち夕餉に向う古い二人

臘梅の気品崩れぬままに散り

歯車の狂うて視点がすんでき

暖房に旅行はなしと旅土産

戸を開けてやさしい温い息を吐く

暖かなポラントイアが勇気づく

陽炎の燃えてポカポカ通路笠

赤ちんの湯気を抱いているバスタオル

大地震親子引きさく生きている地獄

くじ引きも引いてしまえばただの紙

満身の力で弓を引く乙女

またしても値引にひかれ無駄を買い

親しさの仲にも線引き和を保ち

出しやばらず引く手と手に世を渡り

半世紀添うて夫婦の綱を引く

柿の種大きく育てて命と

たま子

恭昌

正雄

澄子

宣司

さと美

希久子

淑子

ひろ子

甫正

種子

楽山

亜矢

美恵子

千代女

志重

ただし

吟平

久女

久子

八重子

伊久栄

のぶ子

光水

禅心

富士野

秀香

■各地句会だより

ほたる川柳同好会

井上直次

大阪空港に隣接した街―豊中市の蛍ヶ池に私たちの「ほたる川柳同好会」があります。

平成四年五月、豊中市立蛍池公民館の主催で橋高薫風先生を講師とする川柳入門講座が八回にわたって開かれました。終了後、その参加者有志が母体となつて、同公民館の支援でこの会が生まれました。

そして同年七月十四日、第一回句会を開いて以来、三十三回の例会を重ね、この四月で二年十か月となりますが、会員三十余名で運営し、あえて「同好会」と名乗って初心者育成を最大の目標に掲げております。

毎月の定例会では、ご多忙の薫風先生のご指導を仰ぎ、発足当初から不慣れな句会運営には、先輩格の「もくせい川柳会」の皆さまから多大のご支援をいただき、毎月第二火曜日午後一時から句会を開いています。

句会では毎回、兼題三題と席題一題を出題

していますが、まず、席題は互選とし、出席者全員が投句の上、投票によって入選句を決めるとともに、参加者による忌憚のない合評に十分な時間をかけ、薫風先生からのご指導もいただいております。

次いで兼題のうち一題は先生に選をお願いし、残る二題については、前回の句会で天・地・人、あるいはそれに準ずる者が原則とし

て選者をつとめており、できるだけ選者が特定の人にかたよることを避けています。

句会以外の行事としては、毎年秋の公民館祭に積極的に参加し、会員全員の自筆の短冊を展示して会のPRと新会員募集に努めております。お陰で発足以来、会員数も次第に増えつつあります。

なお、女性会員が半数を占めていますが、句会ごとに当番でお茶のお世話をしていたたく厚意に甘えており、選者や協取もどしどしやっていたいでいます。

句会を終った後、公民館付近の喫茶店で四方山話に花を咲かせ、会員相互の親睦を深めるのが習わしで、先生から有益なお話をいただいたり、質問したりで、句会とは違った雰囲気の下、大きな収穫を得る一つの勉強会ともなっております。

何事も石の上にも三年と申しますが、これからが正念場―と存じ、会員各自のレベルアップを図ることが会の発展に結びつくものと心得、平成九年には創立五周年記念句集発行を何とか実現したいものと意気込んでおります。薫風先生は申すまでもなく、先輩諸兄姉のご支援を深謝するとともに、今後ともいっそうのご高配をお願いする次第でございます。





保西岳詩さんを悼む

大 原 葉 香

昨年十一月、植村客遊子さんが亡くなられた。そして今年の二月二十一日、保西岳詩さんが亡くなった。このように続いて姫路の川柳塔同人が亡くなられてしまつとは……

しかも岳詩さんは昭和二年生れ、まだ六十八歳の若さで、姫路における同人は私、葉香だけとなった。一種二級の身体障害者で、車椅子生活というハンディを背負う私が、

このところ、岳詩さんの句が「川柳塔」欄に掲載されるのをあまり見かけたことがない。地域にあつては自治会長、民生委員その他の公職を務め、多忙をきわめておられるからだろうと思われる。そして最近では、兵庫ふれあいの祭典、はりま文芸祭、さらに相生もみじ祭りなどにおける川柳部門の選者を務め、この地方における指導的存在として活躍しておられた。そのせいもあつて、「川柳塔」への投句が次第に遠のいてしまつたのだらう。

しかし、昭和五十二年、柏原市で開かれた兵庫県民川柳大会では、堂々と入賞しておられるのだから、その実力は誰しも認めることである。

姫路では、昭和三十一年十二月に「川柳あしなみ」が発足し、時実新子、正本水客、阿萬萬的、松川杜的、辻白漢子、宮口笛生というそうそうたるメンバーの参加と指導によって船出した。今は亡き植村客遊子さんが対外的に活動し、内にあつてそれを支えてきたのが岳詩さんでなかつたかと思う。そのうち、「あしなみ」の編集・印刷を一手に引き受けるとともに、会員宅への句報配布も行つた文字どおり八面うつつの活動で、同会の大黒柱的存在であつた。

句報配布の途中、私の家に立ち寄り、四方山話に花を咲かせることもしばしばで、私の古希記念句集「谷間のささやき」の発行につ

いても、一方ならぬお世話になつた。

話は前後するが、私が昭和五十年に国鉄を退職し、閑職についていた折には、私の方から岳詩さんの職場を訪れ、お茶を飲みながら、「川柳塔」のこと、「あしなみ」のことを話し合い、ごく短期間ではあつたが、私が「あしなみ」の会長を務めていたときには、いろいろと援助していただいたことも、いい思い出である。さらに大江秋月さんが指導しておられた「ことぶき」の発行についても、岳詩さんに負うところが大きかつたと思う。

昨年八月ごろから彼は体調を崩し、入退院を繰り返す日々であつた。その間、広村悲子・松村大鷹・古川奮水・中塚礎石の皆さんによる涙ぐましい励ましも甲斐なく、二月二十一日、ついに帰らぬ人となつてしまつた。私も喜寿を迎えてすつかりもつろくしてしまい、こんなとりとめもない追悼文となつてしまつたが、岳詩さん、どうか許してください。そして合掌、さようなら岳詩さん、涙涙でお別れします。

正論はいつも孤独の椅子にいる 岳詩
駄馬なりに大地をしかと踏む決意 〃
三等賞ほどの幸せ満ち足りる 〃

本社 三月句会

三月七日(火)午後五時半

メンズフアツションセンター

春の訪れとともに、阪神大震災の復興への動きも活発となり、明るさを取り戻し始めた中、八十六名の参加で三月句会が開催された。雖の月でもあり、栗名譽主幹を除く全員女性の選者ばかり。そして「お話」は安藤寿美子さん。女の話はとりとめないと前置きされて川柳に入られたきつかけ、俳句と川柳の違いなどをユーモアたっぷりに話された。

俳句・川柳を詠まれた師の古方さんは、その違いを俳句は山へ真直ぐ登り、川柳は回りながら登る。いきつく頂上は一つと言われ、自分の考えとしては、十七音字の柱を中心として俳句は季語を半径とし、川柳は人生を半径として無限の円を描くことができると思われ、会場の共感を得られた。

初出席は撰津市の井上源一氏。

月間賞は田辺鹿太氏(尼崎市)に輝く。

(司会)天笑(記名)ダン吉・シマ子

(受付)諷云児・智子・みつ子

席題「癖」

福井桂香選

癖のない男は信じないことだ
電話口お辞儀する癖止められぬ
ネクタイが曲つています悪い癖
酔いが回るとやたらに名刺配る癖
癖文字が躍る賀状に安堵する
つり書には悪いと書けぬ女癖
好きだった癖が気になる倦怠期
じわじわとにくい癖字で攻めてくる
八つ目の癖 父からも母からも
地震見舞に癖ある文字のうれしくて
ゆれ癖がついてダルマは落着かず
つつ走る癖植玉にあげられる
赴任地へ先に酒癖届いてる
小走りの癖がぬけない母の下駄
寝る前に猫と会話をする女
欲張りの亡父は癖まで持った近き
一癖も二癖あるのがと真ん中
妻の名をすぐに忘れる癖があり
ころび癖ついでしまったハイヒール
野良猫がトイレにしているうちの庭
ワンプロの中で癖字が威張り出す
鼻の下のはず癖だけ止めなはれ
癖のある字でお花見に誘われる
ライトバンわたしの癖を知り尽す
税務署は人を疑う癖があり
癖のない人に責任押しつける
隅から隅まで離婚届を読む男

重人 千歩 鬼遊 諷云児 吐来 哲夫 美房 寿子 武庫坊 千秀 路児 寿美 寿子 とし子 悟郎 岳人 諷云児 寿美子 たもつ 金太 月子 天笑 鬼遊 千歩 美子

警官と会うと必ず目を伏せる
うまいこと男の癖を持ち上げる
大根一本買うのに店をひと回り
そばの汁 わたしどっぴりつける癖
癖のないペンだが退屈なコラム

佳

遊び癖を叱つて猫が羨まし
八十もなつてエッチな癖がある
美しい癖でオホホホと笑う
人に言えない癖で深海魚が沈む
爪を噛む癖は孤独を溜めている

人

ばくの癖どおり大根が育つ

地

本の虫これも一種の癖だろう

天

窓叩く癖が直らぬ北の風

軸

灯台のあかりになれと母の癖

兼題「呼ぶ」

門谷たず子選

名を呼べば答える鳥を飼っている
魚河岸の符丁が乱れとぶ活気
呼ばれたような気がして振り向く曲り角
呼んでみようこちら向くかもしれぬ運
愛称で呼ぶと柴犬威厳すて
呼んだとて答えぬわたくしの爺
洗濯機 律義にピーと呼んでいる
呼び捨てに出来ぬこの子は未来っ子

外吉 重人 美子 義子 希久子 絹子 笛生 森子 雅文 森子 白兔 英子 かすみ 桂香 艶子 権悟 満津子 満津子 君子 文子 義子 桂香

一杯の酒で自分を呼びもどす
復興に愛の絆を呼び交わす
梅咲いて飲み友達を呼ぶことに
三寒四温 二月堂から春を呼ぶ
何処に居ようと呼べば答えるくされ縁
鬼と仏に呼ばれ真ん中から裂ける
呼び交わし雁の親子が北を指す
復興の音が神戸に春を呼ぶ
別姓で呼んでもうちら夫婦です
呼ばれたようでも振り向く羅漢像の坂
もう呼んでくれなくなつた絵うそく
不意に鬼に呼びとめられてからの冬
呼び水へ愁は素直にはずみ出す
空耳か沖で呼んでる流し雛
戦友を今も貴様と呼んでいる
こんな時呼びたい名前ひとつある
赤ん坊の呼び声へ皆あとまわし
割り勘のあたまた数にと呼んでくれ
振り出しへ戻つて初心呼び戻す
くだらない用事でひを呼ばないで
地の虫を春だ春だと呼び起す
一人息子を呼び捨てにする嫁がくる
花だよりだけで呼ばれた事がない
春を呼ぶ火の粉を散らすお水取り

佳

武庫坊 源一 月子 美代子 小路 美子 ダン吉 寿美 希久子 森子 寿美 英子 保州 希久子 寿美子 天笑 欣史子 正坊 シマ子 一二三 天笑 萬的 美代子 洋 白兔 磔

亡き母の鉄の鈴が呼びかける
人
行き詰り遠くで母が呼んでいる
地
正論を吐けば火種が呼び止める
天
うぐいすに呼ばれ冬眠から覚める
軸
鎮守の森が呼んでる母の祭り寿司
席題「僅か」 宮西弥生選
ネックレス僅かに過去の色残す
へそくりが僅かになって笑い出す
僅か一秒違いで変わる人生も
酔い覚めの水僅かずつ人になる
僅かでも愛を下さい寒いから
私には貴重な時給五百円
僅か針含ませ姑の文とどく
激震後わずかな音に身構える
一泊で妻の年金消えました
旗振つてついできたのは「三人
僅かずつ鬼も仏も見えてきた
命や紙一重の震度七
幼稚園に僅かな愛を置いてくる
僅かばかりの事で時間を止めている
跳ねる素足へ僅かな土があたたかい
貧者の一灯五百円貯めている
今日は僅か明日はたくさん咲かす花
たかが僅かと笑つた奴が借りに来る

飄云児 ゲン吉 勇太 月子 たず子 緑良 花梢 満津子 緑良 さい子 保州 茜 みつ子 かつみ 正坊 稚代 菜 絹子 森子 寿子 千歩 希久子 昭子

一杯の僅かな水に生かされて
残り時間を数えエンジン掛けなおす
被災者で三つ割りにするにぎりめし
僅かずつ粥が濃くなる快復期
僅かでも嘘を信じた馬鹿だった
僅かなのよクレオパトラと私の差
良く見れば僅かに笑みのある羅漢
僅かでも貸しは貸しです返してや
大根の一本を貰う値に迷い
あれからには微震におびえている小鳥
残り僅かな余生に温い彩を塗る
指先が僅かな傷も許さない
佳
瓦斯管の復旧遅らす蟻の穴
首僅かかしげ夢二の女となる
ときめきが僅かに漂う雛の酒
僅かだと知つてるろうそくの炎
夫とは常に僅かな差を置こう
人
君なら僅かでも私には大金だ
地
僅かな悪が浮く洗面の水かえる
天
ほんの僅かに狂う時計と老いてゆく
軸
手話の指僅かにわたしに血が通つ
兼題「経緯」 河内月子選
帳尻が合つて経緯は見逃がされ

ダン吉 美代子 源一 正坊 桂香 昭子 鬼遊 桂香 武庫坊 狸村 英子 茜 千歩 森子 小路 金太 美子 たず子 弥生 満津子

田高の経緯聞いてもわからない
 ヤシの実の経緯と同じ運命もつ
 父の顔知らぬいきさつ聞かされる
 いきさつはどうあれ許すことにする
 いろいろな経緯地球が病んでいる
 経緯の真ん中結び目がひとつ
 あまいな経緯女の風読めず
 うまいこと経緯とらえる風見鶏
 いきさつは知っているから黙っとく
 経緯など聞かずに温もりを重ね
 妻に言えないいきさつに金が要る
 脱サラの経緯を示す力瘤
 正直に経緯話して疑われ
 いきさつを聞いてどうなるものでなし
 たてよりもよこ糸太く織る余生
 離婚した経緯どうやら僕の負け
 経緯を知らぬ男がしやしり出る
 震災のその後は言わぬ仮住まい
 経緯語らず別姓のまま夫婦
 アリバイの経緯歯切れが悪くなる
 経緯はともかく今は社長の座
 離婚した経緯どちらもしやべらない
 見てきたように経緯話してうけている
 いきさつを知っているから口出せぬ
 いきさつは隣のおちゃん知っている
 経緯を少し脚色して弁護
 経緯はいずれ新聞テレビから
 いろいろとあつて屋台を引いている
 経と緯の妙味で生きる嫁姑

蟹 文子 一風 みつ子 雅文 森子 勇太 狸村 正坊 森子 外吉 鹿太 白漢子 正坊 隆 吸江 天笑 希久子 希久子 源一 シマ子 路児 澄子 三男 栗 正雄 房子 保州 冬葉

その経緯言わせておいて聞いていず
 陰ながらお見送りするおとむらい
 佳 先祖代々深爪だったわけがある
 経緯を訊けば善人ばかりなり
 おだやかな経緯を語る母の海
 日本史の経緯あばいている遺跡
 経緯など知らず土筆が顔を出す

紫香 鬼遊 白兎 吐来 鹿太 狸村 英子

いきさつは男ざかりにきいてみる
 人 弱いから負けたと後は重い口
 地 天

栗 射月芳 天吉

いきさつを聞くまで誤解してました
 軸 いくさつは言わんとくけど夫です

月子 射月芳

兼題「ずばり」

小出智子選

悪友からのずばりで我をとり戻す
 正直にずばり言う娘が好かれてる
 まだ若い証拠だずばり物を言う
 えん曲に言つたつもりが突きささり
 ラストチャンスずばり本音を言いそびれ
 ずばりと切つて後にしりは残さない
 合格の正夢ずばりサクサク
 ズバリとノー言えた私に拍手する
 ジャンジャン街ズバリズバリと言う女将
 筆順が違つと孫に叱られる
 ずばり吐くわりにはなぜかい奴だ

美代子 シマ子 金太 天笑 愛論 満津子 柳弘 絹子 萬的 寿美子 権悟

好きですとずばりと言えらる若い人
 一言ですばり鱗が落ちました
 こともなげに老化ですなと言う主治医
 ずばりと言おうキミ男かい女かい
 幸せとは何かとズバリいえますか
 不倫ではないかとずばり聞いてやる
 いけ好かん男がずばり歳をきく
 心臓をひと突き刺したインタビュー
 核心をつく記者の眼が寒い
 ずばり言う九条実素晴らしい
 悪友の祝辞ずばりと飾らない
 若さかなずばり王手をかけてみる
 ずばりですお金がものを言いました
 不羈なマイクへずばり八字眉
 ずばり言えぬあなたもやはり日本人
 ずばりから生まれてこない未来の絵
 何もかもずばりと当てて嫌われる
 ずばりずばりと当ててあしたを狭くする
 ずばり物言う人間であり孤独
 母さんはずばり半額には弱い
 戸を足で開けてずばりものを言い
 罹災ひと異口同音に家欲しい
 佳

結婚してくださいとエレベーターの中で
 ずばり言う父は煙たし有難し
 税務署へ言つてやりたいことがあり
 酒少し入つたところでずばり言う
 面接がずばり短所を聞いてくる

艶子 保州 森子 外吉 磔 柳伸 とし子 千歩 ダン吉 諷云児 みつ子 路児 柳伸 冬葉 度 美子 岳人 かすみ しげお 紫香 天笑 希久子 鬼遊 笛生 清史

人

ずばり言う嫁の瞳が澄んでいる

地

核をついて来たのは舊微の棘

天

ずばりとは言えぬお世話になる嫁に

軸

師の言葉すばつと脳天を割った

兼題「家族」

西尾

栞選

花梢

森子

たず子

智子

希久子

ルイ子

哲夫

金太

外吉

英子

美代子

花梢

弥生

勇太

狸村

白兎

岳人

保州

鬼遊

源一

房洋

二人住まい二階と下のうそ寒さ

萬的

申告期 扶養家族が欲しくなる

よう似た鼻が五人並んだお葬式

家族にも橋の無い川一人居る

ホームレス家族の写真手放さず

よく噛んで食べる家族のテーマ曲

家族には内緒の金を溜めている

食いぶちを出して一人前の家族

嘘をつく時に家族といふ痛み

餌付けされ家族でぞろぞろ来る狸

核家族みんな渾名がついている

六人の家族和音が美しい

家族並み待遇大も心得る

家族あり友あり不安のない余生

住

隣人も家族と思つちらし寿司

指紋みな流れ家族の薄い縁

キミの家族に会いたいという男

たらの芽は孫まで好きな一家です

猫の家族犬の家族も殖えて春

人

御家族でどつぞと野外コンサート

地

家族ありき親を選べぬ子もありき

天

家族から浮いた男の日向ぼこ

軸

大家族母に残したところ汁

鹿太

柳伸

天笑

美津留

欣史子

冬葉

天笑

緑良

萬的

しげお

吸江

笛生

颯云児

稚代

正坊

外吉

隆

シマ子

歌子

澄子

鹿太

高橋操子追悼句会

とき 4月15日(土) 正午開場

ところ 岸和田市・久米田寺信徒会館

兼題 吹く・久しい・別途・帽子・万年青

会費 30000円(懇親会費を含む)

気高町制施行40周年

記念誌上川柳大会

課題と選者(各題2句)

気 橘高 薫風 湯 小林由多香

高い 天根 夢草 白い 林 荒介

郷 柏原幻四郎 風 江原とみお

萌える小出 智子 光 土橋 螢

遙か 神平 狂虎 翔ぶ 小谷美ツ千

投句料 15000円(記念品・入選作品集呈)

締切 4月20日(木)

表彰 7月 当地で町長賞ほか贈呈

投句法 総合上位10位まで呈賞

投句先 四百字詰原稿用紙に住所・氏名

所属柳社名を明記

〒689-03 鳥取県気高郡気高町飯坂

84-4 鈴木 公弘方

「誌上川柳大会」事務局

柳界展望

月夜の谷でざわめいてい
る水子たち

野睦朗へ。

★長崎市は「被爆五十周年
記念・原爆忌文芸大会」の

作品を募集している。原爆
や平和をテーマにした短歌

俳句・川柳で、川柳は2句
をそれぞれ1組とし、1人

2組まで、選者は山田良行
氏ら。投句料は1組につき

千円で、作品集が送付され
る。5月31日締切。投句先

は〒850長崎市出島町9
-12 長崎国際文化協会へ

★「川柳塔わかやま」30
0号記念川柳大会は8月6

日午前11時からJ A会館5
階(J R和歌山駅前)で開

かれる。兼題と選者(各題
2句)は、続く「河内天笑

明日」野辺喜美子▽相談
▽耐える「中村重治▽ハン

カチ「森中恵美子▽山」田
中好啓▽歌「橘高薫風、午

後零時半締切。会費150
0円、懇親宴3500円。

事前投句は、海「牛尾緑良
選で指定ハガキに2句、7

新同人紹介

飯田昇
―笛生・茂雄推薦―

▼計報▲

■保西岳詩氏(川柳塔社理
事・姫路市) 2月21日、肺

臓ガンのため死去、68歳。
告別式は翌22日行われた。

■岸野喜志雄氏(同人岸野
あやめさんの夫君) 1月24

日、肺ガンのため死去。

▼訂正▲

■3月号P101(本社
句会)中段10行目「桜井千

愁」↓「桜井千秀」▽表③
(作品集)「渺湖抄欄は誌

友」↓「水煙抄欄は誌
友」の誤りでした。

▼ご芳志▲

■岸野あやめさん(同人・
寝屋川市)から亡夫供養と

して金一封を拝受しました

★川柳塔わかやま吟社では
平成6年度の各賞を次のと
おり決定した。

〈葵水賞〉

本物の情けは母の乳房か
ら 尾田 綾子

〈あおい賞〉

天高し二人で植えた芋を
掘る 寺田 裕美

〈へちばな賞〉

肩書の差は人間の差では
ない 三宅 保州

〈課題吟賞〉

ゆるやかに捌く手綱に強
い芯 大越 利治

★第44回西大寺会陽川柳大
会は2月26日、西大寺市民

会館で開かれ、本社同人の
河内天笑氏の作品が最優秀

句に選ばれた。

4 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	6日(木)午後1時から 子・残 念・嚙 む・隙	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	7日(金)午後1時から しこり・天・雑詠(A・B)	尼崎市中心企業センター 阪神尼崎駅北東5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 手 品・快 調・風呂敷	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	9日(日)午後1時から 弾 む・太 陽・声	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川 柳 会	9日(日)午後1時集合 油断・桜・メモ・祈る	近鉄山本駅集合(信貴山花見) 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川 柳 会	9日(日)午後1時半から 意味・生まれる・まとも・自由吟	なるお文化ホール 阪神鳴尾駅から徒歩10分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
ほたる 川 柳 同 好 会	11日(火)午後1時から めつきり・リモコン・歩	豊中市立蜚池公民館 阪急蜚池駅西へ150米 〒560 豊中市蜚池中町3-10-28 井上直次
岸和田 川 柳 会	15日(土) 正 午 から 高橋操子七回忌追悼句会	久米田寺信徒会館 本文P103参照 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
京 都 塔 の 会	15日(土)午後1時から 表・盛り(さかり)・天才	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル 都倉求芽
川 柳 ねやがわ	16日(日) 正 午 から 笑顔・月給・役所・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	17日(月)午後1時から 魚・飾る・店・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	20日(木) 正 午 から 浮く・迷信・忘れる・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島凧云児
南 大 阪 川 柳 会	21日(金)午後6時から 本心・揉む・余程・老練	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
東大阪市 川 柳 同 好 会	22日(土)午後6時から 化粧・ジョーク・天狗・桜	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 川 柳 会	23日(日)午後1時から 爪・モーニング(衣装)・びったり・誇る	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
富 柳 会	27日(木)午後1時から 球・もつれる・自由吟	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子

★日時・会場などが変更になる場合は、田中正坊(06-336-3395)へご連絡ください。

編集後記

★新聞・雑誌によく「座談会」が掲載される。通説では、『文芸春秋』を創始した菊池寛が始めたと言われている。あるテーマの下に

数名の人を集め、編集者またはそれに代る人が司会して話し合ってもらい、それを速記、または録音して記事にまとめるものである。

★タイムリーな特集を組む場合、何名かの人に特定のテーマを示して原稿の執筆を依頼するよりも、一か所に集めて意見を述べたり、話し合ってもらう方がはるかに簡便であり、司会者の意図どおりに討論が進行すれば、『読ませる』記事にもなる。

★私も現役の編集者時代、この座談会を何十回となく企画し、記事にまとめた。

依頼原稿ではないから、発言をある程度、自由に取捨選択し、必要なページ数に納めることができるし、原稿料よりもはるかに安い経費でまかなえるというメリットもある。

★しかし、「座談会」記事は実際の座談会における発言内容の速記または録音をそのまま活字にすればよいというものではない。座談会には出席者の思うままに自由に話してもらうことが大切だが、活字として定着するとなると別であり、検討を要する内容もある。

★討論の進行が編集者の意図どおりに運ばなければ、軌道修正することも必要だし、出席者の発言はほぼ均等であることが望ましく、特定の個人・団体を中傷することは避けねばならぬ。編集者は、よくよく心せねばならないと思う。(正)

ひとこと

震災お見舞い

死者五千四百名もの災害に遭われました関西地方の皆様に心からお見舞い申し上げます。

北海道では平成五年一月の「釧路沖地震」、同七月の奥尻島を中心とする「北海道南西沖地震」、平成六年十月の根室・釧路・北方領土を襲った「北海道東方沖地震」そしてつい先日(同十二月二十八日)の「三陸はるか沖地震」でも釧

路地方に多くの被害がありました。

このような地震の巣に住む私どもにとつて、今回の関西の皆様への痛みは心に染みて分かります。いかに深きショックを受けられたか、深く同情申し上げます。

どうぞ一日も早く復興され、お元気になられて関西人の気骨をお見せ下さるようお願いいたします。

地の裂け目天の裂け目の槌の音
北海道川柳研究会 塩見 一釜

○桜前線がそこまで北上してきたが、被災された方々はどんな思いで今年の桜を眺められるのだろうか。

○震災後のある日、被災地の西宮市に住んでおられる

同人、藤村宏子さんと電話

で話す機会があった。話題は

どうしても地震のことになる。彼女は家族も家もこ

となきを失得、その時点では

○テレビや写真で破壊や倒壊の様子を何度も見るが、

現地に行くとそれより数倍ひどく感じる」と人から聞く。その話をすると言下に

「画面では奥行かないからでしょう」と指摘された。

○確かに映像は、どのよう

にうまく撮ってあつても、

あくまで平面である。臨場

感、即ち奥行！と言えば句

人に訴える強い力を持つて

いるのは、句に奥行がある

からであらう。

○作句の年月を重ねるにつ

れ、その姿勢の原点を忘れ

て、時には言葉を弄んだりして

いることを、はからずも反省させられた。とは言つても、どんなにいい句が出来ても、地震の経験はもう真つ平。ほとんど被害のなかつた大阪市中心部でさえ、それは恐ろしかった。(ふ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（6月号）

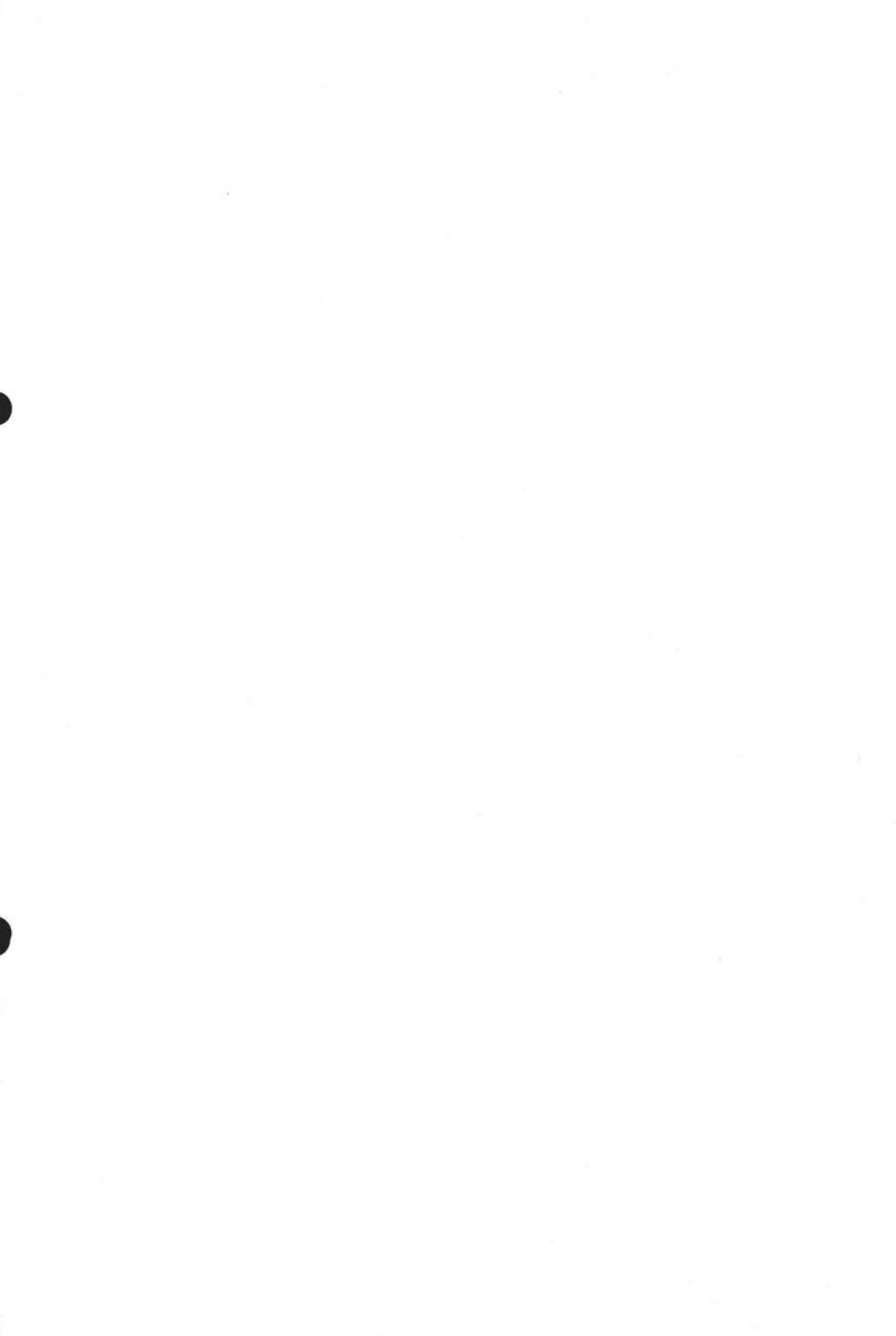
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確にお書きください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

6月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (8句)	橋高 薫風選
水煙抄 (8句)	高杉 鬼遊選
渺湖抄 (3句)	小出 智子選
茴香の花 (3句)	西出 楓楽選
吟「町」	稲本 凡子選
課題「突」	氏林 洋敏選
「望」	川島 諷云兒選
「む」	吉岡 美房担当

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友(誌代半年分前納者)茴香の花欄は女性に限ります。

7月号 課題吟「旅」「塔」「従う」
初歩教室「傘」

本社4月句会

とき 4月7日(金)午後5時半
ところ メンズファッションセンター3F
中央区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角
おはなし
兼題 「妬」 「惜しい」 「立場」 「ふんざり」 「亀裂」
板尾 岳人 三宅 保州 福本 英子 奥田 みつ子 河内 天笑 橋高 薫風
席題 1題 当日発表 各題2句以内
会費 500円
4月句会から投句は廃止することになりました。

本社5月句会 8日(月)予定

兼題 「減る」「きつい」「道具」「だんご」「痛み」

夜市川柳募集

第11回「星」 橋高 薫風選
ハガキに3句 4月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

5月の常任理事会は5月1日(月)

NHK川柳作品募集

課題「軽い」 森中恵美子選
ハガキに3句 4月10日締切
投句先
〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表 4月22日(土)午前11時5分から
ラジオ第1放送(予定)

西日本文字放送作品募集

課題「窓」 森中恵美子選
ハガキに3句 4月15日締切
投句先
〒540 大阪市中心区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

平成七年四月一日発行

編集兼 橋高 薫

発行人 藤原 童心

印刷所 ウエムラ第2ビル202号室

大阪市阿倍野区三好町一〇一六

発行所 川柳塔社

電話(06)六九一四番

振替〇〇九八〇一五二三六八番

- 川柳・俳句・短歌集 ● 画集・写真集・絵本
● 社史・小説・エッセー ● 故人を偲ぶ追悼誌
● 創業・喜寿を祝う記念誌 ● 郷土史

各種 **本** (製作専門)

- 少数の本も取り扱っています。
- ご相談ください。

ミヤケ プランニング
MIYAKE
planning

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8

電話 06-659-5514(代)

FAX 06-652-2928

ジェイ出版

電話 06-658-8741(代)

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

TJ 豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14

TEL (06) 330-0006(代)

FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21

TEL (06) 388-6166(代)

FAX (06) 388-6886